

# マルコ福音書

哲猫

2008年8月7日

## 第1章

### 洗礼者ヨハネの伝道 (1:1~8)

(マタイ 3:1~12, ルカ 3:1~18, ヨハネ 1:19~28)

<sup>1</sup> これは神の子イエス・キリストの良き知らせ (福音) である。<sup>2</sup> 預言者イザヤによる書の中に神が言ったまさにその通り始まる。「私は、あなたが来る前に、あなたの道を整えさせる為に使者を遣わす。<sup>3</sup> 荒れ野で誰かが叫んでいる。『主のために道を整えよ、主の為に道をまっすぐにせよ。』」そのとおり、<sup>4</sup> 洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、「神に立ち返り、洗礼を受けよ。そうすればあなた方の罪は赦されるであろう」と全ての人に語った。<sup>5</sup> 全ユダヤとエルサレムから大勢の人々が、ヨハネのところにやってきて、彼らは自分たちがいかに罪深いかを告白し、ヨハネはヨルダン川で彼らに洗礼を授けた。<sup>6</sup> ヨハネはらくだの毛でできた衣をまとっていた。ヨハネは腰の周りに革の帯を身につけており、いなごと野蜜を食べていた。<sup>7</sup> ヨハネは人々にこうも語った。「私より優れた人が、やって来るだろう。私は屈んで彼のサンダルのみを解く価値もない。<sup>8</sup> 私は水であなたたちに洗礼を授けるが、彼は聖霊で洗礼を授けることになるだろう。」

1. 「神の子」という言葉はいくつかの写本にはない。つまりは、この言葉は加筆されたものである。

1. 「イエス」という名前はユダヤ人に非常に多い名前であるヨシュアからくる。ヨシュア (イェホシュア) が、イェシュアになり、それをギリシャ語綴りに直して名詞語尾 *s* を付けたのがイエスである。因みに、「ベン・シラの知恵」と呼ばれる文書の著者もイエスであるし、イエスと共に十字架につけられたとされるバラバ (「父の子」の意味) も写本によってはイエス・バラバとされている。コロサイ 4:11 にもユストと呼ばれるイエスなる人物が登場する。

1. 「キリスト」はヘブライ語によるメシア (油注がれし者) のギリシャ語訳である。ただし、ヘブライ語による「メシア」というのは本来的には王を指す。王はその就任式で、神の恩恵に対する象徴的表現として油を注がれるのである。それで王は神から油を注がれたということで「メシア」と呼ばれることになる (サムエル記上 10:1 に、士帥サムエルからサウルが油を注がれてイスラエルの王として立てられる記述がある)。バビロン捕囚以降、イスラエル-ユダヤではメシアなる王は存在しなくなる。尚、ユダヤではダビデの血統がメシア (王) とされた。前 2 世紀にユダヤにはハスモン王朝が成立するが、ハスモン王朝を打ち立てたマカベア家は地方祭司であり、ダビデの血統ではないので、正統なメシアとは認知されなかった。従って、ユダヤの民は、自らを解放する、ダビデの末裔であるメシアの登場を願っていた。しかし、イエスの時代のユダヤ人達は、このメシアに対して様々な捉え方をしていたようである。ある者は、ダビデのように、実際に軍事的にユダヤを再建する存在としてのメシアの登場を願っていたし、別の者は、この世を裁く超自然的な存在としてメシアを考えていた。しかし、新約聖書が描くメシアはこれらのメシアとは全く異なった存在 (人々の罪の身代わりとして死ぬという存在) である。イザヤ書 53 章には正しい人が人々の罪の為に死ぬことが書かれている。尚、この箇所の「キリスト」には定冠詞が付いておらず普通名詞扱いとなっている。イエスを明らかにする意図で、メシアとされたイエスという意味で使っていると思われる。尚、マルコ福音書で「イエス・キリスト」となっているのはここだけで、後は全て「イエス」である。

1. 「良き知らせ (good news) は、福音 (gospel) とも訳される。

2. 「イザヤ (Isaiah)」は前 740~701 頃のユダヤの預言者

2. 「私は、あなたが来る前に、あなたの道を整えさせる為に使者を遣わす」というのは、七十人訳聖書の出エジプト記 23:20 前半とマラキ書 3:1 前半を合体し改変させたもので、イザヤ書からの引用ではない。

3. この箇所は、ヘブライ語聖書ではなく、七十人訳聖書のイザヤ書 40:3 の「荒れ野に叫ぶ者の声がある。『主の道を用意せよ。我らの神の道をまっすぐにせよ』」からの引用である。尚、新約聖書としてまとめられた各文書に記された「聖書」というのは「七十人訳聖書」を指す。因みに「七十人訳聖書 (Septuaginta)」とは、エジプトのアレキサンドリアでヘブライ語聖書からギリシャ語に翻訳された聖書 (今日的には旧約聖書の類であり、最初はモーセ五書だけであったが、後に様々な文書が組み込まれるようになった。ただし、今日、旧約聖書と呼ばれる文書群と七十人訳聖書とは配列と中身がかなり異なる) である。ヘレニズム期以降、アレキサンドリアには、かなりの数のユダヤ人が居

住していたが、彼らユダヤ人はギリシャ語しか理解できなくなったので、この七十人訳聖書が重宝されるようになり、この書が、本国パレスチナに於いて、第1次ユダヤ戦争以降ユダヤ人共同体と袂を分かちようになったキリスト者共同体で用いられるようになったのである。尚、今日プロテスタントが用いている旧約聖書というのは、第1次ユダヤ戦争後ユダヤ人共同体がヘブライ語で書かれてきた文書の一つにまとめてこれを聖典としたものに、全面的に依存している。

4. 「洗礼者ヨハネ」は「洗礼を施す(者)ヨハネ」が原意。マルコ 6:25 及び 8:28 は原意通り「洗礼者」であるがこの箇所のギリシャ語形はこれらとは異なる。ヨハネが人々に洗礼を施していたことは、ヨセフスの「ユダヤ古代誌」(18巻)にも記されている。

4. 「ヨハネ(John)」という名前は、「Yhwhは恵み深い」という意味。ある人々はヨハネを甦ったエリヤ(Elijah)であると信じていた。

4. 「荒れ野(desert)」とは、エルサレム-ベツレヘム高地から東へ約20マイル(約32km)に渡って広がっている荒野を指すと思われる。尚、「荒れ野」とは「神に近い場所」としての積極的な意味を持つ場所である。

4. 「罪」とは、神から離れて神の命令に従わないことを意味する。

4. 「洗礼」はギリシャ語の「水に浸す」から来る。律法の書では、祭司が神に犠牲を捧げる前に自らの体を水で清めなければならなかった(出エジプト 40:12, レビ記 16:4, 24)。尚、クムラン(Qumran)教団の遺跡から、上り降りする為の階段が付いた貯水槽が見つっている。彼らは自らの体を清める為にこの貯水槽を使っていたと考えられている。尚、創世記にある洪水物語に、その原意が見られると考えられる。ヨハネは、水による清めを悔い改めのしるしに転換した人物であることになる。

5. 「全ユダヤとエルサレムから」とあり、「ヨルダン川で」とあり、4節でヨハネが荒れ野に現れたとあり、且つ後にガリラヤ及びペレアの領主ヘロデ・アンティパスによって殺害されることを考えると、洗礼者ヨハネはユダヤとペレアが隣接するところのヨルダン川両岸で活動していたものと思われる。

6. 「ヨハネはらくだの毛でできた衣をまとっていた。ヨハネは腰の周りに革の帯を身につけており」は、列王記下 1:8 に預言者エリヤ(Elijah)の装いに関する記述から来ている。

7. 「私より優れた人」はイエスを指す。

7. 「サンダルのみを解く」は奴隷の仕事である。

8. イエスは宣教初期に実際には誰にも洗礼を施していないと考えられている(ヨハネ 4:2)。しかし、復活後のイエスは弟子達に洗礼を授けるようにと命じている(マタイ 28:19)。

8. 「聖霊で洗礼を」は「聖霊の中に浸す」が本来の意味。

#### イエスの誕生物語

マルコ福音書ではイエスがどのように誕生したかということに一切触れてはいない。

#### イエスの受洗(1:9~11)

(マタイ 3:13~17, ルカ 3:21~22)

<sup>9</sup> その頃、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネはイエスに洗礼を授けた。<sup>10</sup> イエスが水の中から上がるとすぐに、イエスは、空が開き聖霊が鳩のように自分のところに降りて来るのを見た。<sup>11</sup> すると、「おまえは私自身の愛する子、私はおまえに満足である」という声が、天から聞こえた。

9. ガリラヤ(Galilee)は、「円」または「地域」を表す語に由来するとされる。実際、ガリラヤは、中央部は山岳地帯で、これを環状に取り囲む平地帯からなる。ガリラヤは、北のイスラエル王国の領土であったので、アッシリアによってイスラエルが滅ぼされた後、消滅し、これ以降は住民も純粋なイスラエル人ではなくなった(アッシリアは征服した領土に他民族を移住させる政策をとった為)。尤も、イスラエル王国時代に、ガリラヤ地方の人々はフェニキア人やカナン人と混血を繰り返していた筈であるが。その後、ベルシャ時代、ヘレニズム期のガリラヤは常に南のユダヤとは別の行政府によって統治されていた。イザヤ書(8:23)でも「異邦人のガリラヤ」と呼ばれている通り、ガリラヤはユダヤとは異質の文化を持った地域であり続けたのである。ガリラヤがユダヤによって同化されたのは、前104年、ハスモン王朝のアリストブレス1世による侵略の後である。このとき、ガリラヤ住民に強制的に割礼が施されユダヤ化が開始されたのである。イエス誕生の100年前位にガリラヤはユダヤに同化され、その後イドマヤ人(このイドマヤ人もハスモン王朝によりユダヤ人に同化された人々であるが)ヘロデに支配されたので、その後ガリラヤでは度々支配者に対して反乱が起こる。尚、ガリラヤは他の地域に比べ肥沃であり、人口密度も高かった。

9. ナザレ (Nazareth) は、勿論ギリシャ語の地名である。イエスの時代のガリラヤ南部のユダヤ人居住地とされるが、「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著し、第1次ユダヤ戦争でガリラヤ防衛のユダヤの将軍として従軍したヨセフスの文書にも、タルムードにも、ナザレという集落名は登場しない。また、そのギリシャ語の綴りも一通りではない。

9. 「ヨハネはイエスに洗礼を授けた」 この記述から、イエスは当初ヨハネの運動に共鳴し、行動を共にしたことが窺える。尚、マタイ福音書では、本来ヨハネはイエスから洗礼を受けるべきと考えていたが、ヨハネは敢えてイエスに洗礼を授けたとしている。また、ルカ福音書では、「ヨルダン川でヨハネから」という言葉を省いて、両福音書共、イエスがヨハネに師事したという事実を消去しようとする意図が窺える。しかし、9~11節全体から、イエスがヨハネから洗礼を受けたという事実以上に、この時イエスが神の愛する子と(人々に)認知された(イエスは元々神の子であるからこの時に初めて神の子になった訳では勿論ない)ということが強調されているのである。

尚、ヨハネがイエスに洗礼を授けたとき、ヨハネの弟子など多くの人々がその様子を見守っていた筈である。

10. 「空が開き」の空(天)は複数形。空(天)は複数の層をなしていると考えられていた。

10. 「見た」 「空が開き聖霊が鳩のように自分のところに降りて来る」という事実をイエスは見たということになるが、マタイ及びルカでは「空(天)が開いた」ということは客観的事実であったというふうに記されている。

11. 「おまえは私自身の愛する子」は、詩編 2:7 中にある「お前は私の子、それ故、今日、私はおまえの父となった」にあるが、詩編の「私の子」は「王」を意味する。尚、マタイ福音書の並行箇所では、この者は私の愛する子であるというように、神はイエスだけではなくその場に居合わせた人に伝えるように語っているとされている。

11. 「天から聞こえた」は、その場にいる人々に神の声が届いたということになる。尚、天からの声があったという記述は、共観福音書の全てに記されている。

#### 荒れ野の試み (1:12~13) (マタイ 4:1~11, ルカ 4:1~13)

<sup>12</sup> すぐに、神の霊はイエスを荒れ野に送り出した。<sup>13</sup> イエスは四十日間そこにとどまったが、その間サタンはイエスを試した。その間、イエスは野獣と共にいたが、天使達がイエスを守っていた。

12. 「送り出した」はギリシャ語では現在形である。所謂「史的現在」であり過去形で翻訳する。しかし、マルコ福音書に度々登場する「史的現在」用法には一貫性が見られないとされる。

12. 「サタン」は敵対者を意味し、悪魔または Beelzebul としても知られる。

12. 「サタンはイエスを試した」に関しては、どういうことを試したのかは分からない。マタイ福音書とルカ福音書に残る Q 資料には、サタンの試みの中身が記されている。

13. 「野獣と一緒におられた」は、イエスがサタンの誘惑に勝利したことを表す。この部分は Q 資料には存在しない、マルコ独自のものである。

13. 「天使」は神の使者・僕である。

13. 「天使達がイエスを守っていた」も Q 資料には存在しない、マルコ独自のものである。

#### イエスのガリラヤ伝道開始 (1:14~15) (マタイ 4:12~17, ルカ 4:14~15)

<sup>14</sup> ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神からの良き知らせ(福音)を語った。<sup>15</sup> イエスは、「その時はもう来ている、まもなく神の国はここに実現するだろう。神に立ち返り、良き知らせ(福音)を信じなさい」と言った。

14. 「捕らえられた」は、ギリシャ語では「引き渡される」という動詞であり、福音書に於いては、この動詞は、「誰に」「どこへ」「どういう理由で」という修飾語を付けることなく用いられている(絶対用法)。受難の場面で用いられる動詞である。つまり、マルコはヨハネもイエスに先がけて受難に遭ったと捉えていることになる。尚、事の詳細については、マルコ福音書にも 6:14~29 に記述されている。つまり、ガリラヤ及びペレア領主ヘロデ・アンティパスが、ヨハネから、「自分の兄弟の妻と結婚することは律法では許されていない」と言われた為、ヨハネを恨んだからである、とされて

いる。しかし、実際は、ヨハネが多くの民衆の支持を得たため、不穏分子として領主アンティパスに処刑された可能性が大である。

14. 「捕らえられた後」とあるので、マルコによるイエスの伝道開始は、ヨハネが捕らえられた後ということになるが、ヨハネ福音書 3:22～23 を見ると、イエスはヨハネが活動していた時期に自らの伝道を開始していたことが窺える。洗礼者ヨハネの逮捕は、ヘロデ・アンティパス (Herod Antipas) の治世 (前 4 年～39 年にガリラヤとペレアを統治) の終わり頃であり、イエスの死は 30 年前後であるから、ヨハネの死後にイエスが伝道を開始したとすると、その期間は極めて短いものになってしまう。因みに、イエスを処刑したピラトのユダヤ総督在任期間は 26 年～36 年である。

14. 「イエスはガリラヤに行き」により、マルコはイエスはガリラヤで伝道を開始したとしているが、ヨハネ福音書からはイエスの伝道はパレスチナ南部 (ユダヤ) で開始されたように解釈できる。つまり、イエスの伝道はいつどこで開始されたのかが極めて不明瞭なのである。しかし、マルコにとって、イエスの伝道は、エルサレムの権威的宗教支配が及ばないガリラヤ中心になされることになるのである (イエスの時代、ユダヤとガリラヤの統治者は異なるのであるから、当然、別の国家と言って良い)。

15. 「神の国」＝「神の王国」とは「神による永遠の支配」を意味する。つまり、この世的な支配が終了した後の絶対的な神による支配を指す。しかし、それが具体的にどういう状態であるのかについてはイエスは (というよりはマルコは) 何も説明していない。

15. 「立ち返り」の「立ち返りなさい (回心しなさい)」は二人称複数の命令形である。

15. 「福音を信じなさい」とは、今日的には「キリスト教の信仰を持つ」＝「キリスト教徒になれ」という意味にされてしまう。しかし、勿論、マルコ福音書に「キリスト教」・「キリスト者」という言葉はない。

#### 漁師 4 人を弟子とする (1:16～20)

(マタイ 4:18～22, ルカ 5:1～11)

<sup>16</sup> イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いていると、シモンとシモンの兄弟アンデレがいるのが分かった。彼らは漁師で、湖に網を打っていた。<sup>17</sup> イエスは、「私に付いて来なさい。魚の代わりに人の捕り方を君らに教えよう」と言った。<sup>18</sup> すぐに二人の兄弟は網を捨ててイエスに同行した。<sup>19</sup> イエスが歩いていくと、少しして、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネがいるのが分かった。彼らは舟の中で網の手入れをしていた。<sup>20</sup> イエスはすぐに彼らと一緒に来るように命じた。彼らは、父ゼベダイと雇われ人たちとを舟に残して、イエスに同行した。

16. 「イエス」 原文では「彼」

16. 「シモン」 アラム語によるあだ名が「ケファ(Cephas)」(1 コリント 1:12, 9:5) で、そのギリシャ語名が「ペテロ」である (マタイ 16:18)。これらは共に「岩」を意味する。

16. 「アンデレ」 アンデレとペテロはベトサイダ (Bethsaida) 出身である (ヨハネ 1:44)。ヨハネ福音書によるとイエスの最初の弟子がアンデレであるとされている (ヨハネ 1:40～42)。尚、ベトサイダはガリラヤ湖北岸にあった集落で、その名前は「漁師の家」からくるとされている。

16. 「漁師」 イエスの時代、ユダヤ人は地中海沿岸の港を利用することはできなかった。従って、漁はガリラヤ湖でなされていた。ガリラヤ湖に生息する魚は主に鯉とナマズであった。しかし、律法で食べることが許されている魚は、ひれと鱗を持つものだけであった (レビ記 11:9～12) ので、ユダヤ人は鱗を持たないナマズを食することはなかった。また、おそらく地中海で捕れた海水魚も、ティルス (Tyre) やシドン (Sidon) から干物や塩漬けにされた形でユダヤ人の口に入ったものと思われる。

17. 「人の捕り方」とは、要するに人々を回心させる為に働くこと。

18. 「二人はすぐに網を捨ててイエスに同行した」 シモンとアンデレ兄弟は最初は洗礼者ヨハネの弟子であったとされる (ヨハネ 1:35～42)。19. 「ゼベダイ (Zebedee)」は、新約外典の「ナザレ人福音書 (Gospel of the Nazarenes)」では、貧しい漁師であったとされている。

19. 「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ」は、Boanerges(「雷の子達」) というあだ名が付けられることになる (マルコ 3:17)。

#### 穢れた霊に取り憑かれた男 (1:21～28)

(ルカ 4:31～37)

<sup>21</sup> イエスと弟子達はカファルナウムの町に行った。次の安息日に、イエスはユダヤ人の会堂に入って教え始めた。<sup>22</sup> 皆は彼の教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威をもって教えたのである。<sup>23</sup> 突然、悪霊に取りつかれた男が会堂に入ってきて叫んだ。<sup>24</sup> 「ナザレのイエスよ、我々にかまわないでくれ。おまえは我々を滅ぼしに来たのか。おまえが何者かは分かっている。おまえは神の聖者だ。」<sup>25</sup> イエスは悪霊に「黙れ。この人から出て行け」と言った。<sup>26</sup> 悪霊はその人にけいれんを起こした。それでその人に大声をあげさせた後出て行った。<sup>27</sup> 皆はすっかり驚いて、お互いに言い合った。「これは何なのだ。何か新しい力を持った教えに違いない。悪霊でさえ彼には従うのだ。」<sup>28</sup> イエスに関する話はたちまちガリラヤの至るところに広まった。

21. 「カファルナウム (Capernaum)」は、ガリラヤ湖北西岸に漁港を持つ町(村?)。エジプトとシリア(ダマスカス)を結ぶ重要な交易ルート上に位置していた。ヘロデ・アンティパスの軍隊の重要な駐屯地の一つであるとされる。イエスはここを拠点として活動したと考えられる。カファルナウムとは、ヘブライ語のケファル・ナウム(ナウム村)をギリシャ語綴りに音写したものとされる。

21. 「安息日 (Sabbath)」 1週間の7番目の日(今日的には、金曜日の日没から土曜日の日没までを指す)。神が世界を創造した後に安息をとった日(創世記 2:2~3)。本来的には、人間や家畜に過重労働をさせないようにする配慮から生じた規定であると考えられる(出エジプト 23:12)。しかし、バビロン捕囚期以降、ユダヤ人のアイデンティティ維持の為に用いられるようになったと考えられる(エゼキエル 20:12,20)。これに違反して労働した者は死罪にされるとした(出エジプト 31:13~17,35:2)。ファリサイ派やエッセネ派では、何が安息日に許されない行動なのか詳細に定められていた。現在でもユダヤ人には適用されている。尚、原文では安息日は複数形になっている。

21. 「会堂 (synagogue)」はユダヤ教の地域共同体の集会所であり、キリスト教で言えば教会堂に相当し、礼拝と教育が行われていた(つまりは教会は、この synagogue から派生した組織であると言える)。その起源はバビロン捕囚期に遡るとされている。第1次ユダヤ戦争によるエルサレム神殿の消滅後は、ユダヤ人の宗教生活の中心として機能し現在に至る。ただし、イエスの時代、ガリラヤに synagogue が存在していたという事実は確認されていない。カファルナウムの地にあって復元された会堂は4~5世紀頃のものである。

22. 「律法学者 (teachers of the Law : scribes)」 律法(モーセ五書)を解釈する学者達で、多くはファリサイ派に属していた。律法書及び口頭伝承により律法を解釈した。イエスの時代、文書を読み書きできる人は非常に少なく、特別な教育を施された人達(書記など)だけが文書を読み書きできた。従って、書記は、律法の書を学び、そして人々に内容を教えていたので、律法学者とも言われるのである。

23. 「悪霊」 サタンの仕業と考えられていた。イエスの時代には、悪霊により(精神的な病を含む)多くの病が引き起こされると考えられていた。悪霊を持ったユダヤ人は、不浄とされ他のユダヤ人と一緒に食事したり礼拝したりすることが許されなかった。従って、悪霊に取り憑かれた人(即ち、病人)は集団から孤立して暮らさなければならなかった。

24. 「神の聖者」 七十人訳聖書で「神の聖者」という表現が特定個人に対して用いられているのは、士帥記 16:17(サムソンの物語の1節)のB写本(パチカン写本)だけであるという(E. シュヴァイツァー)。そして、ヘブライ語聖書及びA写本では、この言葉は「ナジル人 (nazirite)」になっている。

士帥記 16:17 B写本「私は母の胎内にいたときから神の聖者の一人でしたから」; A写本「私は母の胎内にいたときから神のナジル人でしたから」

ただ、イエスの時代には「ナジル人」というのは存在しなかった。しかし、「ナザレ人イエス」と「ナジル人イエス」が妙に重なるのが気になる。

イエス、多くの病人を癒す (1:29~34)

(マタイ 8:14~17, ルカ 4:38~41)

<sup>29</sup> ヤコブとヨハネと一緒にイエスが会堂を出るとすぐ、彼らはシモンとアンデレの家に行った。<sup>30</sup> 彼らが家に着くと、シモンの義理の母(姑)が熱を出して寝ていることを、イエスは聞かされた。<sup>31</sup> イエスは彼女のところに行き、その手を取って起した。すると熱は去り、彼女はイエスの一行にご馳走した。<sup>32</sup> 日が沈んだ後の夕方、病人や悪霊に取りつかれた人達が皆、イエスのもとに連れて来られた。<sup>33</sup> 町中の人々が、戸口に集まった。<sup>34</sup> イエスは、あらゆるひどい病気を治し、また、多くの悪霊を追い出した。悪霊はイエスが何者であるかを知っていたので、イエスは彼らに話させなかった。

30. 「シモンとアンデレの家」は、ベトサイダ (Bethsaida) にあった (ヨハネ 1:44)。しかし、文脈からこの家にはシモンの姑が住んでいることが分かる。とすると、ベトサイダの「シモンとアンデレの家」にシモンの姑も引き取っていたということになる。であれば、イエスの一行はカファルナウムの会堂からベトサイダへ行ったということになる。シモンはカファルナウムの妻の家に住んでいたと考えることもできる。しかし、この場合、この家は「シモンとアンデレの家」とは表現されない筈である。

30. 「シモンの義理の母 (姑)」とあるので、シモン即ちペテロ (初代ローマ法王とされている) には妻がいたということになる。シモンが結婚していたことは第 1 コリント 9:5 にも記されている。

31. 「ご馳走した」は、単にご馳走したなどという次元を遙かに越えたことしたということを原文では表現している。このことから、シモンの姑の家にイエス一行はかなり世話になり、ここを拠点に活動したとも考えることができる。

32. 「日が沈んだ後の」 日没後は安息日の翌日となる。

34. 「イエスが何者であるか知っていたので」の箇所は、写本の多くは「イエスがキリストであると知っていたので」としている。

#### 孤独から宣教へ (1:35 ~ 39) (マタイ 4:23, ルカ 4:42 ~ 44)

<sup>35</sup> 翌朝、まだ暗いうちに、イエスは起きて、一人になれる所に行って祈った。<sup>36</sup> シモンその他の者達はイエスを探し始め、<sup>37</sup> そいてイエスを見つけると、「みんなが捜しています」と言った。<sup>38</sup> イエスは応えて、「我々は近くの町々に行かなくてはならない。そうすれば、人々に良き知らせ (福音) を話すことができる。その為に私は来たのだ」と言った。<sup>39</sup> そして、イエスはガリラヤの全ての会堂に行き、そこで教え、悪霊を追い出した。

35. 「一人になれる所」とは、人の居ない所という意味ではない。本来的には「荒涼とした場所」という意味である。イエスが休息し心を落ち着ける場所は (神の領域に近い) 「荒れ野」なのである。

36. 「捜し始め」の「捜し」は「(敵を捕まえる為に) 捜す」という敵対的な意味を持つ動詞が使われている。イエスは漁師 (狩りをする者の一種) を弟子にしたので、敢えて、弟子がイエスを追跡して捕まえるという表現をとったのだろうか。

38. 「近くの町々」の「町」はポリスと呼べるような都市ではない、村よりは大きな規模の (市場が立つような) 町を指している。

#### イエス、らい病人を癒す (1:40 ~ 45) (マタイ 8:1 ~ 4, ルカ 5:12 ~ 16)

<sup>40</sup> らい病を患っている人がイエスのところに来てひざまずいた。彼は「あなたに思いがあれば、私を良くすることができます。」と懇願した。<sup>41</sup> イエスはこの男に憐みを感じて、手を彼に触れて、「そうすることにするよ。さあ、君は良くなるよ」と言った。<sup>42</sup> すると直ちにらい病は去り、その人は良くなった。<sup>43</sup> イエスは、この男に厳しく注意した後、彼を立ち去らせた。<sup>44</sup> イエスは「誰にもこのことを話さないようにね。すぐに祭司のところへ行きよくなった体を見せなさい、そしてモーセが定めた通り神殿に捧げものをしなさい。そうすれば誰でも君が癒されたことが分かるからね」と言った。<sup>45</sup> この男はこのことを人々に大いに語たので、イエスはもはや公然と町に行くことができなくなった。イエスは町々から離れたところに滞在しなければならなかったが、それでも人々はあらゆる場所からイエスのところにやって来た。

40. 「らい病 (lepra:leprosy)」 七十人訳聖書ではヘブライ語の「ツァーラート」の訳語とされて一般に「らい病」と訳されているが、必ずしも今日的な「らい病」を意味するのではない。様々な症状の皮膚病がこれに該当すると考えられている。しかし、ユダヤ社会では、この病に罹った者は、穢れた者とされ、強制的に共同体社会から隔離・遮断され (レビ記 13:46)、公の場に出てくることが許されなかった。この点に於いて、「らい病 (ハンセン病)」と類似したものと捉えることができる。

40. 「ひざまずいた」という箇所は写本によっては欠落しているものがある。

41. 「憐みを感じて」は写本によっては「怒って」となっているものがある。ただし、「怒って」と記している写本の方が少数派である。恐らく「怒って」という表現が元来のものであり、これを書写

した者が、イエスは慈愛に満ちた存在である訳だから、「深く憐れんで」と直したものと思われる。書記がテキストを書き移す場合は、書記にとって難解な表現をより易しい表現に書き換えてしまう傾向はあるだろうけれど、その逆はない筈であるから。では、「怒って」とは何に対して怒ったのかと言えば、それは、このらい病人に対して怒ったということに他ならない。何故ならば、この者は律法を守らなかったからである。。

41. 「触れて」 律法では、らい病に罹った人の体に触れた人も「不浄」とされた。

43. 「立ち去らせようとし」は「追い出して」・「放り出して」などという強い態度で臨んだというニュアンスを持った言葉で訳するのが妥当とされる。

43. 「厳しく注意し」という訳はギリシャ語を正しくは表現していない。「激しくいきり立って」・「厳しい調子で」などが妥当とされる。

44. らい病が癒された場合、それを祭司に浄いということを証明してもらい、献げもの（動物の生贄とオリーブオイルを混ぜた小麦粉）を献納する必要がある（レビ記 14:1～32）。浄いとされた者は、元のユダヤ人共同体社会に戻って普通の暮らしをすることが可能である。

44. 「すぐに祭司のところへ行きよくなった体を見せなさい、そしてモーセが定めた通り神殿に捧げものをしなさい」とイエスが言ったということは、イエスは律法を忠実に守ったということになる。ところが、癒されたこの男は、祭司のところに行って献げものをする前に、人々に事の次第を言い広めてしまうのである。

## 第2章

### イエス、手足の不自由な人を癒す (2:1~12) (マタイ 9:1~8, ルカ 5:17~26)

<sup>1</sup> イエスがカファルナウムに戻った数日後には、イエスが家にいることが人々に知れ渡った、<sup>2</sup> 多くの人々がイエスのいる家に集まってきたので、入り口の前の部屋などは人が立っている隙間もないほどになった。イエスが教えを説いていると、<sup>3</sup> 四人の男が手足の不自由な人を敷物に載せて運んで来た。<sup>4</sup> しかし、沢山の人々がいたので、彼らはその人をイエスのもとに連れて行くことができなかった。それで、彼らはイエスのいる辺りの屋根に穴をあけて、この人を(イエスの周りにいた)人々の前に降ろした。<sup>5</sup> イエスは彼らの信仰の大きさを見て、手足の不自由な人に、「友よ、君の罪は赦されるよ」と言った。<sup>6</sup> そこには何人かの律法学者が座っていた(のであるが)。彼らは怪訝な気持ちになり、<sup>7</sup> 「こいつは、なぜこんなことを言うのだろう。こいつは自分が神であると考えているに違いない。神だけが罪を赦すことができるのだ」(と思った)<sup>8</sup>(しかし)すぐにイエスには、彼らが考えていることが分かり、こう言った。「なぜ、そのような考えをするんだい。<sup>9</sup> 手足の不自由な人に対して、彼の罪は赦されると言うのと、起きて敷物を担いで家に帰れと言うのと、どちらが僕にとって易しいことなんだい。<sup>10</sup> 人の子は地上で罪を赦す権能を持っていること君らに知らせたいよ」。そして、手足の不自由な人に言った。<sup>11</sup> 「起き上がって、敷物を担いで家に帰りなさい。」<sup>12</sup> その人は、起き上がり、敷物を担いで、皆が驚いて見ている中、家に帰った。人々は神を誉め称え「こんなことなんて、今まで見たこともない」と言った。

1. 「家」 単に家というだけで、シモン(ペテロ)の家などと特定している訳ではない。
2. 「教え」=「福音」
2. 「教えを説く」 福音宣教をなすと同義であるが、この場合は、キリスト教の教義を語ったのではなく、福音書に書いてあるようなイエスの言葉をイエスが語ったということである。
4. 「屋根」 イエスの時代、パレスチナの集落での住居の屋根は普通平らであり、屋根は土で覆われた梁と板でできていた(従って簡単に剥がすことも可能であった)。また、住居は一部屋だけの簡単なものであり、家の外側に屋根に通じる階段があり、屋根の上に乗ることが可能となっていた。屋根の上で植物を育てたり、部屋が暑くなったときは屋根の上で寝ることも可能であったと思われる。
5. 「信仰(πίστις)」は、この場合キリスト教の教義としての「信仰」ではなく、神またはイエスへの全面的な信頼を指す。
5. 「罪」 複数形。7,8,9の各節の「罪」も複数形。
5. 「君の罪は赦されるよ」 当時、ユダヤ人は病は罪の結果生じると考えていたとされるが、病は全て罪の結果であると考えていた訳でもない。
10. 「人の子(Son of Man)」 ユダヤ人の聖書(つまり旧約聖書)では、「人の子」というのは単に人間を指す表現であった。このことはエゼキエル書で、何度も預言者が「人の子」と呼ばれていることから明かである。ただし、ダニエル書で預言者ダニエルは、天の雲に乗った「人の子」が来て、この世界を支配する救い主と描いている(ダニエル書 7:13~14)。イエスは、ダニエル書にあるような神に選ばれた救い主としての「人の子」とされているのである。福音書では、イエスはしばしば自身を指して「人の子」という表現を使っている。
12. 「驚き」=「我を忘れて驚き」・「度を失って」

### イエス、レビを弟子とする (2:13~17) (マタイ 9:9~13, ルカ 5:27~32)

<sup>12</sup> 再度、イエスはガリラヤ湖のほとりに出て行った。大勢の民衆がイエスの周りに集まって来たので、イエスは彼らに教えを説いた。<sup>14</sup> イエスが一人で歩いていると、アルファイの子レビがいるのが見えた。レビは収税所に座っていたが、イエスはレビに「一緒に来なさい」と言った。それで、レビは立ち上がってイエスに同行した。<sup>15</sup> その後、イエスと弟子達がレビの家で夕食を摂っていた時、多くの徴税人や他の罪人がイエスに従うことになり、彼らも(そこに)招かれ食事を摂ることになった。<sup>16</sup> 何人かの律法学者はファリサイ派であったが、彼らは、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をしているのを見て、弟子たちに、「どうしてあの男は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。<sup>17</sup> イエスはこれを聞いて



答えた。「健康な人には医者が必要ではないけど、病人には医者が必要なんだ。僕は立派な人を招待し僕の弟子とする為にやって来たんじゃない。僕は罪人を招待する為に来たんだよ。」

14. 「アルファイ (Alphaeus) の子レビ (Levi)」 並行箇所であるマタイ 9:9~13 では徴税人名はマタイとなっている。尚、写本によっては、「アルファイの子ヤコブ」となっているものがある。これは、マタイ 10:3、マルコ 3:18、ルカ 6:15、使徒 1:13 にイエスの弟子 (使徒) 名があげられているのであるが、これらの箇所には「アルファイの子ヤコブ」がマタイとは別にあり、これらの箇所との統一を図る為に、これらの写本では書き換えられた可能性がある。因みに、アルファイのギリシャ語 (ἄλφαιος) 音は、halphaios となる。

14. 「収税所」 収税所は幹線道路の間に立てられていた。尚、イエスの時代、ガリラヤでは税金は、領主であるヘロデ・アンティパスの懐に入り、ユダヤではローマ皇帝の金庫に納められることになった。ヘロデ・アンティパスが支配するガリラヤにあったカフェルナウムはペリポの支配領域に近接していたので、ここに収税所が置かれたと思われる。

15. 「徴税人 (収税人・取税人)」 徴税人は領主やローマに支払う以上の金を住民から取り立てていた。即ち、徴税は請負で、業者が一定地域に於いて決まった額を領主などに納め、それ以上の徴収分は自分の懐に入れることができたのである。従って、徴税人は収入を増やすために悪辣な方法を用いていたと思われる。尚、徴税人には請負業者とその下で徴税作業をする下請け人がいた。そして請負業者は町の有力者になる場合があったが、下請け人として働いたのは下層階級に属していたとされる。つまり、レビは貧しい階級にあった人物である。徴税人は異教の神などが彫られている硬貨などユダヤの律法が不浄としていたものを取り扱っていたので不浄であるとされた。多くのユダヤ人は、当然のことであるが、徴税人を嫌っていた。

15. 「罪人」の罪とは神に逆らったり、律法に従わないことを指す。徴税人、犯罪人、売春婦、乞食、船乗り、羊飼、肉屋、革なめし業者や多くの下層労働者などが罪人に該当する。勿論、異邦人 (ユダヤ教徒以外) は罪人に該当する。しかし、ユダヤ人で罪人とされた者の多くは律法を守らない者というようりは寧ろ生きていくためにはどうしても律法を守れない者達であったということになる。尚、ユダヤの律法では、律法を破る者とは何事も一緒になすべきではないとされていた。

16. 「ファリサイ派」 ファリサイという言葉は、ヘブライ語の「分離」ないしは「純粹」による。ファリサイ派は律法にできるだけ厳密に従おうとしていた。律法学者の多くはファリサイ派に属していた。

イエスの死後、ファリサイ派と原始教会はしばしば相互に関係する存在となった。また、エルサレム神殿崩壊後、神殿運営に従事していたサドカイ派は消滅し、ファリサイ派にはローマによってパレスチナのユダヤ人に民政を司る権力が与えられたので、ファリサイ派は突出した存在となった。ファリサイ派と原始キリスト教会の間に決定的な亀裂が生じるのは、第1次ユダヤ戦争以降であるので、イエスの時代、ファリサイ派とイエスが果たして対立する関係にあったかどうかは疑問である。

16. 「どうしてあの男は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」、ユダヤの律法では不浄とされる人々と一緒に食事することを禁じていた。

#### 断食問答と新しい酒 (2:18~22)

(マタイ 9:14~17、ルカ 5:33~39)

18 ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々は、時々断食した。何人かの人々がイエスのところに来て尋ねた。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人たちは時々断食するのに、なぜ、おまえの弟子たちは断食しないのか。」<sup>19</sup> イエスは答えた。「婚礼の客たちは、花婿と一緒にいるかぎり、断食はしないよね。<sup>20</sup> でも、花婿が彼らから取られる時が来る。そのときは、彼らは断食することになるんだ。<sup>21</sup> 誰も、新しい布切れを古い服に縫い合わせて継ぎを当てたりなんてしない。(そんなことをすれば、) 新しい布切れは縮んで、引き裂かれ服に大きな穴が開くからね。<sup>22</sup> 誰も、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりなんてしない。(そんなことをすれば、) ぶどう酒は発泡し革袋を破り、ぶどう酒は(こぼれて) 無くなり、革袋もだめになるからね。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れなければならないんだ。」

18. 「ヨハネ」 洗礼者ヨハネ

18. 「断食」 ファリサイ派はしばしば断食した。ヨハネはナヅル人 (ブドウ及びブドウからできたものは一切食しないという誓いを立てた) のようであったかも知れないので、ある種の飲み物と食べ物を摂取はしない誓いを立てていた可能性がある (民数記 6:1~4)。断食するのは神への献身の現れなのである。尚、この断食に於いて、ヨハネの弟子達とファリサイ派を同列におき、イエスの弟子達と対峙させていることから、洗礼者ヨハネ派とイエス派が何らかの対立関係にあったと推測できる。

19. 「花婿」はイエスを指す。

19. 「婚礼の客」は「結婚の祝宴の部屋の子ら」で、イエスの弟子ないしはイエスに従う人々を指す。イエスが共にいるときは特別な場合なので断食することは免除されると考えた訳である。

21. 「新しい布切れは縮んで、引き裂かれ服に大きな穴が開くからね」 水で洗ったとき、新しい布（つまりは洗っていない布）の方が縮みが大きいので、破れができてしまうということ。

22. 「新しいぶどう酒」とは発酵が十分でない酒で、新しい酒の発酵が進むと炭酸ガスが発生し（古い）革袋が破れてしまう。革袋が古いと弾力性がなくなる。つまりは、新しい運動（イエスの福音宣教）には、古い伝統や体制にとらわれることのない新しい環境こそが必要になる、と言っているのである。

#### 安息日問答 (2:23～28)

(マタイ 12:1～8、ルカ 6:1～5)

<sup>23</sup> ある安息日に、イエスと弟子たちは麦畑の中を歩いていた。弟子たちは歩きながら麦の穂を摘んでいた。<sup>24</sup> 何人かのファリサイ派の人々がイエスに、「なぜ、おまえの弟子たちは安息日に麦の穂を摘むのか」と尋ねた。<sup>25</sup> イエスは答えて言った。「ダビデとその従者たちが、空腹で困っていたときに何をしたのか、(聖書を) 読んだことがないのかい。<sup>26</sup> アビアタルが大祭司だったとき、ダビデは神の家に入り、祭司だけが食べることでできる聖別されたパンを食べ、ダビデは従者たちにも与えたんだよ。<sup>27</sup> イエスは「人々は安息日の為に造られたんじゃなく、安息日が人々の為に設けられたんだよ。<sup>28</sup> だから、人の子は安息日の主なんだよ。」

23. 「麦の穂を摘んでいた」 お腹を空かした寄留者・孤児・寡婦が畑を通るときに摘んで食べることができるように、畑には幾ばくかの穂を付けた麦を残しておくなければならないというのが律法にある(申命記 24:19～22)。これは、イスラエル人がエジプトに奴隷状態にあったときのことに思いを馳せた人道的配慮である。

24. 「ファリサイ派の人々が…」 本来的には安息日にファリサイ派の人々が畑の近くにいる筈はない。従って、これは事実ではなく、作られた物語ということになる。或いは、ファリサイ派の人が話を聞いて、後でイエスに詰め寄ったということもできる。

24. 「安息日に麦の穂を摘む」 麦の穂を摘むというのは労働行為であり、安息日には労働は許されていないから、これらの行為は律法違反となる。安息日には、種まきも耕しも収穫も許されていない。

25. 「ダビデと…」 サムエル記上 21:1～7。ダビデ(ユダ族)は伝説上の人物であり、イスラエル統一王国の2代目の王とされる(初代はベニヤミン族出身のサウル。尚、パウロの元々の名前はサウル(サウロ)であるが、やはりベニヤミン族出身となっている)。ノブ(Nob)の祭司アヒメレク(Ahimelech)が、(空腹だった)ダビデ(このときダビデはサウル王によって命を狙われていて逃れていた)に、聖別された(Yhwhの祭壇に供えた)パンを与えた。ノブはエルサレムの北のベニヤミン族の領地にあった町である。アヒメレクはシロ(Shiloh)の祭司エリ(Eri)のひ孫に当たり(サムエル記上 14:3)、シロの衰退後にノブにYhwhの主要な祭壇が置かれたと考えられる(そして最終的にエルサレムにYhwhの聖所が設置されることになる)。シロはイスラエルの部族がカナンの地に侵入した(ヨシュア記ではイスラエルの部族が軍事的にカナンの地に侵攻したと描かれているが、事実としてはそのようなことはなかったと考えられている)初期に於いて、その政治的・宗教的中心地であり、ここに幕屋(tabernacle)が設置された。しかし、ペリシテ人により幕屋内に置かれた契約の箱(この中には十戒を記した石版などが当初は入っていたとされる)が奪われた後(その後契約の箱は取り戻すのであるが)、シロの威光は落ちてしまうのである。因みに、シロはエフライム族(ラケルの子で兄弟達から奴隷としてエジプトに売られたが後にエジプトで出世したヨセフの二人の子供がエフライムとマナセとなっている。また、ヨセフの同母兄弟がベニヤミンでベニヤミン族の地にエルサレムが建てられる。ヨセフはヤコブから長子の権利を引き継いだ。エフライム族とマナセ族が領土が後の北王国の主要な領土となる。尚、南王国は共にレアの子であるユダ族及びシメオン族の領土がその領土となる。レビ族もレアの子の子孫とされる)の領地にあった。

26. 「アビアタルが大祭司であったとき」は不正確で、実際には「アビアタル」ではなくその父「アヒメレク」が該当し(因みに七十人訳聖書でもアヒメレクである)、大祭司ではなくノブの祭司である。この時代、エルサレムは都として建設されていなかったため、エルサレム神殿(ダビデの子ソロモンが築いたということになっている)もなければ大祭司職もない。アヒメレクをアビアタルとしたのはマルコの誤解によるものと考えられる。つまりは聖書を一度も読んだことがないのはマルコ本人ということになってしまう。尚、写本によっては「アビアタルが大祭司であったとき」が欠落しているものもあるが、これは書記が間違いに気が付いて削除したものと考えられる。

また、マタイ福音書の並行箇所では、大祭司名は記載されていない。

26. 「大祭司 (high priest)」 イエスの時代、エルサレムの神殿に奉仕する祭司職の中で上級階層にあった祭司が祭司長 (chief priests) で、彼らのリーダーが大祭司である。尚、祭司長は専らサドカイ派と関係していたとされる。

26. 「聖別されたパンを食べ」 レビ記 24:5~9 によると、Yhwh に献げられた 12 個のパンは、アロン (モーセの兄) とその子らのもの (つまり大祭司のもの) であり、これらのパンはそこで彼らによって食されたのである。

27. 「人々は安息日の為に造られたんじゃなく、安息日が人々の為に設けられたんだよ」とイエスが言ったことは、マタイ及びマルコの並行箇所にはない。

28. 「人の子」= イエス

#### イスラエル 12 部族

ユダヤ人 (イスラエル人・ヘブライ人) の始祖は、アブラハムである。アブラハムはメソポタミア地方からカナン地方 (現在のパレスチナ) に移住した人物である。アブラハムとその妻サラ (サライ) の息子がイサクであり、イサクとその妻リベカの息子がヤコブである。ヤコブには兄エサウがあったが、ヤコブは父イサクを騙して、その相続権を得る (その為逃亡生活を強いられる)。ヤコブは 4 人の妻を娶り 12 人の息子をもうける。逃亡したヤコブはハランの地の伯父ラバンのところに身を寄せてたのであるが、そこでラバンの娘のレアに恋をするのである。しかし、レアには未婚の姉ラケルがいたので、伯父はヤコブに先ずラケルと結婚させ、その後レアと結婚することを認めるのである。このラケルとの間に誕生したのが、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンの 5 人であり、レアとの間にできた子がヨセフ、ベニヤミンである。尚、ヤコブはラケルの下女のビルハとの間に息子のダン、ナフタリをもうけ、レアの下女ジルパその間にガド、アシェルをもうけた。イスラエル 12 部族は、ルベン、シメオン、ユダ、イッサカル、ゼブルン、及びヨセフの子のエフライムとマナセ、ベニヤミン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェルのそれぞれ子孫を指す。尚、レビ族は祭司の家系とされ、土地が割り当てられなかった。また、部族長の権利は長子であるルベンが当初受け継いだが、罪を犯したとされ、後にヨセフに移されることになる。

イスラエル 12 部族はサウル (ベニヤミン族) を初代の王として統一され、2 代目の王はユダ族のダビデとなり、3 代目はダビデの息子ソロモンが引き継ぐ。しかし、ソロモン王の死後王国は、南北 2 つに分裂する (とされる)。南王国はユダと呼ばれユダ族とシメオン族がこれに属し、北王国はイスラエルと呼ばれ 10 部族がこれに属した。しかし、イスラエルはアッシリアに滅ぼされ、その民は他国に強制移住させられたので 10 部族は歴史上から消滅する。尚、南王国の首都となるエルサレムはベニヤミン族の領土であったので、ベニヤミン族の一部は南王国に属していたと思われる。また、アッシリアによってイスラエル 10 部族が滅ぼされた時、その一部はユダ王国に難民として移住してきたと思われる。

こうして、イスラエル 12 部族で民族消滅を免れたのが、ユダ族とシメオン族、及び祭司としての少数のレビ族であるが、シメオン族は何故かいつのまにか消滅したので、イスラエル人は、最終的にはユダヤ人とされるのである。北王国イスラエルと南王国ユダとでは国力には圧倒的な開きがあって、北王国の方が肥沃であり人口も多かった。その為、南王国ユダがアッシリアの侵略を免れたという見方もできる。そして、生き残ったユダヤ人の見地からイスラエルの歴史は語られることになる。

南王国ユダも、その後、バビロニアによって滅ぼされ、ユダヤ人はそのエリート層を中心にバビロニアに捕囚されるのであるが、集団で移住することが許された結果、民族のアイデンティティーを失うことが免れ、後にバビロニアがペルシャによって滅ぼされたとき、ペルシャ王はユダヤ人の母国への帰還を許したので、どうにかユダヤ人は民族としてのアイデンティティーを保って生き延びることができたのである。そして、このバビロン捕囚期前後から、ユダヤ人は民族のアイデンティティーを維持する為に、後に旧約聖書としてまとめ上げられる諸文書の創作を開始するのである。従って、イスラエルの歴史はユダヤ人の観点から描かれることになった。そもそもイスラエル民族は一神教徒などではなかったのであるが、最終的に残った南王国ユダの主神である Yhwh が元々民族全体の統一神であったかのようにされたのである。

尚、ガリラヤの地を受け継いだのは、ゼブルン族とされている。

### 第3章

#### 安息日に手の萎えた人をいやす (3:1~6)

(マタイ 12:9~14、ルカ 6:6~11)

<sup>1</sup> イエスが次に会堂に入ったとき、そこに手の不自由な人がいた。<sup>2</sup> ファリサイ派の人々は、律法に違反するイエスの行為を糾弾しようと思っていて、イエスが安息日にこの人の病気を癒そうとするかどうか見続けていた。<sup>3</sup> イエスは、手の不自由な人に、皆が彼を見ることが出来る場所に立つように言った。<sup>4</sup> そして、イエスは「安息日には、僕たちは良い行いをすべきなのかい、それとも悪い行いをすべきなのかい。僕たちは人の命を救うべきなのかい、それとも命を奪うべきなのかい」と彼らに尋ねた。しかし、誰も何も言わなかった。<sup>5</sup> イエスは人々を見回して怒った。しかし、イエスは彼らが余りに頑なだったので彼らを気の毒に思った。そして、その人に、「手を伸ばしなさい」と言った。彼が手を伸ばすと、その不自由だった手は癒された。<sup>6</sup> ファリサイ派の人々は去り、その後すぐに、彼らはヘロデ派の人々と一緒に、イエスを殺す計画を立て始めた。

1. 「会堂 (meeting place:synagogue)」 集会所のギリシャ語訳が synagogue

4. 「命」 「魂」とも訳せる。

6. 「ヘロデ派 (ヘロデ党:Herod's party)」 ガリラヤ及びベレア領主ヘロデ・アンティパスを信奉するユダヤ人グループとされるが、この箇所とマルコ 12:13 及びマタイ 22:16 以外の文書 (聖書外文書も含めて) には登場しないので、どういったグループなのかを特定することはできない。ヘロデ・アンティパスはヘロデ大王の息子の一人で、領地を前 4 年~39 年まで支配。ヘロデ・アンティパスの正式称号は四分領主 (tetrarch) であるが、しばしば王と記された (マタイ 14:9)。

#### 湖の岸辺の群衆 (3:7~12)

(マタイ 4:24~25,12:15~16、ルカ 6:17~19)

<sup>7</sup> イエスは弟子たちを連れて湖の岸の方へ行った。大勢の民衆がガリラヤからイエスに従い、ユダヤ、<sup>8</sup> エルサレム (からも従った)。イドマヤからも、ヨルダン川の東側の他の場所からも同様に、人々が (大勢) やってきた。民衆はティルスやシドンといった都市の周辺からも、イエスが何を行っているのか聞こうとやってきた。<sup>9</sup> (それで)、イエスは、民衆に押しつぶされないようにする為、弟子たちに小舟を用意するように伝えなければならないほどだった。<sup>10</sup> イエスがは多くの病人を癒したので、他の病人達はイエスに触れさせてもらおうと懇願した。<sup>11</sup> 悪霊らは、イエスを見るといつもひれ伏して、「おまえは神の子だ」と叫んだ。<sup>12</sup> しかし、イエスは、これらの霊に、自分が誰であるかを話さないように注意した。

8. 「イドマヤ (Idumea)」 イドマヤはエドムのギリシャ語読みによる。第二神殿時代に、ユダヤ丘陵地南部からネゲブ砂漠北部に至るまで、ユダヤに支配されたイドマヤ人の領土。最も重要なイドマヤ人の町はヘブロン (Hebron) である。前 587 年バビロニアの Nebuchadnezzar によってエルサレムが破壊された後、ユダヤ南部にイドマヤ人が進入してきたものと思われる。ハスモン王朝のヨハネ・ヒルカノス 1 世 (John Hyrcanus I) が前 129 年にイドマヤを征服し、住民 (非ユダヤ人) に割礼を強制した (マカバイ記 1 4:36~59, マカバイ記 2 10:1~8, ユダヤ古代誌 13:9:1, ユダヤ戦記 1:63)。ハスモン王朝の Alexander Jannaeus の下で、アンティパル (Antipater) というイドマヤ人がイドマヤ総督に任じられ、アンティパルの息子で同じ名前のアンティパルもイドマヤ総督に任じられた。ハスモン王朝内の抗争に乗じてローマと手を結んだアンティパルが台頭し、遂にその息子であるヘロデ (大王) がローマによってユダヤ王として承認され、ここに半ユダヤ人であるイドマヤ人がユダヤ人を支配するという状況に至るのである。

エドム人は、イスラエル 12 部族の始祖とされるヤコブ (イスラエルと称された:「イスラエル」というのは「神と戦う」という意味である) の兄エサウの子孫とされ、イスラエル人とは敵対する関係にあったが、伝説の王ダビデの時代に服従させられたということになっている。尚、ヤコブは部族の相続権を父であるイサクを騙して兄エサウから奪ってしまう人物である。

8. 「ヨルダン川の東側」 「ヨルダン川の向こう側」つまりは、ベレアを指す。この時代ベレアもユダヤ人の土地として認識されていた。ベレアにはヘレニズム期にギリシャ人の入植が進み、ユダヤ人はマイノリティと化した。ハスモン朝の時代に占領し、ユダヤ人も多数居住するようになり、ヘロデ大王の時代もその領土とされ、その死後に、息子の一人であるヘロデ・アンティパスがガリラヤと共に領有を許された。

8. 「ティルス (Tyre)」 古代から栄えてきた地中海に臨むフェニキア人の重要な港湾都市の1つ。

フェニキアという名前はギリシャ人がそう呼んだので自分たちがどう呼んでいたかは不明である。フェニキアは現在のレバノンにほぼ相当し、フェニキア人は地中海の海上交易で栄え、各地にその植民都市を造ったが、特に有名なのはカルタゴである。フェニキア人はセム語系の民族であり、カナン人及びヘブライ人(イスラエル人・ユダヤ人)と同系である。フェニキア文字は原カナン文字から生まれたが、この文字からギリシャ文字やヘブライ文字が発生することになる。地中海東岸のフェニキア人の都市国家は、アレクサンダー大王によって滅ぼされ、カルタゴもローマによって滅ぼされるので、それ以降はフェニキア人は歴史の中に完全に埋没することになる。

8. 「シドン (Sidon)」 古代から栄えてきた地中海に臨むフェニキア人の重要な港湾都市の1つ。ティルスの北方 35km のところにシドンがある。

イエス、12 弟子を選ぶ (3:13 ~ 19)

(マタイ 10:1 ~ 4、ルカ 6:12 ~ 16)

<sup>13</sup> イエスは、弟子達の内の何人かに自分と共に山に登るように命じて、一緒に山に登った。<sup>14</sup> そこで、イエスは、彼らの中から、自分が派遣することになる 12 人を選んだので、この 12 人はイエスと一緒にいるようになった。イエスは彼らを (人々に) 教えを説く為に送りだそうと思ひ、<sup>15</sup> 悪霊を追い出す為に (送りだそうと思った)。<sup>16</sup> シモンは 12 人の一人であったが、イエスはシモンをペトロと名付けた。<sup>17</sup> ゼベダイの二人の子ヤコブとヨハネが (12 人の中に) いたが、イエスは、この二人を、「雷 (の子ら)」を意味するボアネルゲスと名付けた。<sup>18</sup> アンデレ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、タダイも派遣される弟子であった。他には、熱心党员として知られたシモンがいた。<sup>19</sup> そして、イスカリオテのユダ (がいた)。このユダが後にイエスを裏切ったのである。

14. 「派遣することになる 12 人を選んだ」 特別の任務を与えられ派遣された弟子を指して「使徒 (apostles)」と訳して、「12 使徒を選んだ」とする訳もあるが、ここではその後、称号として用いられることになる「使徒 (apostles)」が選ばれたのではない。そして、いくつかの写本には「使徒と名付けられた」という部分は欠落している。尚、マルコに記載されている「使徒 (apostles)」という言葉は、この箇所以外には 6:30 だけである。そして、6:30 で通常訳されている「使徒 (apostles)」というのは文字通り派遣された者という意味であり称号ではない。従って、いくつかの写本に見られる「使徒と名付けられた」というのは後生書き加えられた可能性が高い。尚、12 というのはイスラエル 12 部族と同じ数である。

16. 「ペテロ」 アラム語のケファ(岩を意味する)のギリシャ語訳。パウロ書簡ではシモンとは一度も呼ばれていない。ガラテヤ書 2:7,8 でペテロと呼ばれている箇所以外は全てケファである。

16. 「ヤコブの兄弟ヨハネ」 ヤコブとヨハネはヘブライ語名である。

17. 「ボアネルゲス (Boanerges)」 アラム語で「雷の子ら」または「震える子ら」を意味するとされる。しかし、何故、同じ意味のギリシャ語に置換されなかったかは不明である。ゼベダイの子であるヤコブとヨハネ兄弟は激しやすかった為か (ルカ 9:54)。この兄弟はイエスにイエスが栄光の座に就くとき左右の座に座らせて欲しいと頼んで (マタイ 2:20 ~ 21 によるとこの兄弟の母親がイエスに頼んだということになっている) 他の弟子から怒りをかっている (マルコ 10:35 ~ 37)。このとき、イエスから自分の受ける洗礼を受けることができるか (このことはイエスと同様に殉教することを意味する) と問われ、二人はできると答えてしまうのであるが、実際にヤコブは 12 弟子の中の最初の殉教者になってしまう (使徒 12:2)。

18. 「フィリポ (Philip)」はギリシャ語名。

18. 「バルトロマイ (Bartholomew)」はヘブライ語名。「タルマイの子」を意味する。

18. 「マタイ (Mattaïos)」はアラム語名の Matthai にギリシャ風の名詞語尾 -os を付けたもの。尚、Matthai は、ヘブライ語名のマタテヤ (Mattiheyah, Matthattha) の省略形でユダヤ人にはポピュラーな名前である。例えば、ユダ・マカバイ (ユダス・マカバイオス) の父親の名前がマタテヤである。マタイ 9:9 を参照することで、マルコ 2:14 に登場するアルファイの子レビと同一人物とする説もあるが、分からない。

18. 「トマス」 ギリシャ語名。ヨハネ福音書に「ディドモとよばれるトマス」という箇所がある (11:16, 20:14, 21:2)。「ディドモ」というのはギリシャ語で「双生児」という意味である。アラム語で「双子の一人」は Theoma となるので、トマスというのは本当の名前ではなく、あだ名である「双子」から来ている可能性がある。尚、「トマス行伝」や「トマス福音書」ではユダス・トマスという形が登場するので、本来はユダ (Judas) という名前だったのかも知れない。そして、他のユダと区別する為に敢えてトマスと呼ばれたのかも知れない。

18. 「アルファイの子ヤコブ」 収税人レビもアルファイの子であるが、この二人に関係は見られないとするのが普通である。

18. 「タダイ」 ギリシャ名テオドトス (Theodotos) の省略形。使徒 5:36 に登場するテウダも同じ語の省略形である。西方系の写本の中にはタダイの代わりにレバイ (Lebbaios) としているものもある。尚、ルカ福音書では、十二弟子に、タダイの名はなく、その代わりにヤコブの子ユダが入っている。

18. 「熱心党」 「熱心党 (Zealots)」というのは後のユダヤ戦争の時代にローマに抵抗し戦ったユダヤ人勢力に与えられた名称である。しかし、ここではギリシャ語の ζηλωτής (熱心党) は使われず (ルカ福音書ではこの言葉を使っている)、アラム語の単語を使っている。これはマルコが福音書を著したのが第 1 次ユダヤ戦争直後ということであり、反ローマを鮮明にした熱心党員が有力な弟子の一人になっては拙いと考えて、ギリシャ語しか解せない者には理解できない言葉を使ったものと思われる。

19. 「イスカリオテのユダ (Judas Iscariot)」 新約では 5 つの異なった言葉で記述されている。即ち、(a) Judas : ヘブライ名の「イエフダ」から来る: (マルコ 14:43; マタイ 26:25, 47; 27:3; ルカ 22:47f; 使徒 1:16, 25; ヨハネ 13:29; 18:2f, 5)、(b) Judas Iscariot : セム語形: (マルコ 3:19; 14:10; ルカ 6:16; and as v 1 マタイ 10:4, ルカ 22:47)、(c) Judas Iscariot : ギリシャ語形: (Matt 10:3; 26:14; Luke 22:3; John 6:71; 12:4; 13:2, 26; 14:22、(d) Judas, the one called Judas Iscariot : (マタイ 26:14; ルカ 22:3; ヨハネ 6:71)、(e) Judas, son of Simon Iscariot : (ヨハネ 6:71; 13:2, 26) の 5 種類である。

Schwarz は、このイスカリオテという言葉は 9 種類に解釈できるとした。尚、これらは次の主な 4 種に分類できる。

- (1) イスカリオテというのはユダがシカリ (Sicarii) 派 (短刀を隠しもって暗殺を行うグループ) に属していたので、ここから来るという解釈。そうであれば、ユダは熱心党 (Zealot party) の一員ということになる。
- (2) ヘブライ語で「裏切りもの」を意味する「サカール」に由来するという解釈。ユダの特徴は、騙しと裏切りにあるので、あだ名もそうなったとする。
- (3) ユダの「引き渡す」という行為のヘブライ語の語幹 (skr) に由来するという解釈。
- (4) ユダの出身地を示しているという解釈。おそらくユダだけがユダ出身であったのではないか。ユダは、ユダのカリユオト (Kerioth) 村 (ヨシュア記 15:25 に名前が登場) の出身であったのではないかとする (イス (isch) はヘブライ語で人であるから、イスカリオテはカリオテ人となる)。

20. 「裏切った」 原意は「引き渡した」とされる。

#### ベルゼベル論争 (3:20 ~ 30)

(マタイ 12:22 ~ 32、ルカ 11:14 ~ 23 及び 12:10)

<sup>20</sup> イエスが家に戻ると、大勢の民衆がまた集まっていて、食事さえ摂れない状況になっていた。<sup>21</sup> イエスの家族は、イエスがしていることを聞いて、彼らはイエスが狂っていると思って、イエスを制して連れ戻そうとした。<sup>22</sup> 何人かの律法学者たちがエルサレムからやって来て、「この男は悪霊の頭であるベルゼブルの支配下にある。彼はベルゼブルの助けで悪霊を追い出しているのだ。」と言った。<sup>23</sup> イエスは、その周りに集まった人々に話した。イエスは彼らになぞかけをして語った。「どうして、サタンがサタン自らを追い出せるんだい。<sup>24</sup> 国民同士が争っているような国は余り長くは保たないよね。<sup>25</sup> そして、身内で争っているような家も長くは保たないよね。<sup>26</sup> だから、自分と争っているようなサタンなら、いずれ終焉を迎えることになるだろうね。<sup>27</sup> 屈強な人を縛り上げないで、その人の家に押し入って、その人の持ち物を盗むことは誰にもできないよね。まず (屈強な人を縛ってから)、その家を略奪することができるよね。<sup>28</sup> 君らが話したり行ったりする (ことで生じる) どのような罪も、それらがどんなに悪い罪であったとしても、必ず赦される筈だよ。<sup>29</sup> でも、君らが聖霊を攻撃するんだったら、君らはけっして赦されないよ。」<sup>30</sup> イエスがこう言ったのは、イエスが悪霊に取りつかれていると人々が言っていたからである。

20. 「家」 「シモンの姑の家」か。

21. マルコの時代は未だイエスの一族が運動の後継者の中心的存在として権威を保っていたか、その影響が強かったと考えられる。

22. 「ベルゼブル (Beelzebul)」 ベール・セブブやパール・ゼブブと同じ。デーモンのプリンスの名前で、サタンのこと。ベール・セブブは、ペリシテ人の町エクロン (Ekron) の神 (列王記下 1:2,3,6,16)。パール・ゼブブとは「蠅の神」で、Akkron の神とされる (ユダヤ古代誌 9:2、Akkron は Ekron と同じか)。パールはフェニキア人やカナン人の神である。ゼブルは、ゼブルン族 (レアとヤコブとの間に生まれた 6 番目の息子ゼブルンを始祖とする一族:ゼブルン族が領有したのがガリラヤである) や士師記 (9:25) に登場するゼブル (Zebul)、イゼベル (Jezebel:シドン人の王エトパール (ethbaal) の娘、北王国のオムリ王の息子アハズ王の妻となった。彼女によりイスラエルにパール神の祭壇やアシェラ像が設置されたようになったとされる) と何らかのつながりがあるのではないかとされる。

29. 「聖霊 (pneguma hagion)」 この世で働く神の力。

30. 「悪霊 (evil spirit)」 悪霊はサタンの為に働くと理解されていた。「汚れた霊に取りつかれている」人は不浄とされ、共に食事することも、礼拝に出席することも許されなかった。ユダヤ人は悪霊によって引き起こされる病は移ると恐れていたため、不浄とされた人々は共同体から孤立して暮らさなければならなかった。

### イエスの母、兄弟 (3:31 ~ 35) (マタイ 12:46 ~ 50、ルカ 8:19 ~ 21)

<sup>31</sup> イエスの母と兄弟たちが来て (家の) 外に立った。そして、彼らはイエスに家族の元に帰るようにと伝えて欲しいとある人に頼んだ。<sup>32</sup> イエスの周りに座っていた大勢の民衆はイエスに、「お母さんと兄弟姉妹がたが外にいて会いたがっていますよ」と言った。<sup>33</sup> イエスは、「僕の母とは誰で、僕の兄弟とは誰なの」と (人々に) 尋ねた。<sup>34</sup> そして、イエスの周りに座っている人々を見回して言った。「ここに僕の母や兄弟たちがいるんだ。<sup>35</sup> 誰でも、神に従う人が、僕の兄弟であり、姉妹であり、母なんだ」。

31. 「イエスの母と兄弟たち …」 ここに「父」が登場しないのは、父ヨセフはイエスが幼少のうちに死んでしまったからであると考え、ここに登場するイエスの兄弟達は、イエスの異父兄弟である可能性が高いということになる。

31. 「イエスの母」 マルコ福音書にはイエスの誕生物語は収録されていないが、母の名前がマリアであることについては、1 箇所だけ 6:3 に記している。しかし、イエスが十字架につけられた時に見守った婦人の一人として、小ヤコブとヨセの母マリアの名 (マルコ 15:40) が、イエスの死後、その遺体を見つめていた婦人の一人として、ヨセの母マリアの名 (マルコ 15:47) が、墓に安置されたイエスの遺体に油を塗りに行こうとする婦人達の一人として、ヤコブの母マリアの名 (マルコ 16:1) が記されている。ヤコブもヨセもイエスの兄弟の名前 (マルコ 6:3) であるから、これら 3 箇所に登場するマリアはイエスの母マリアであると推測できる。

31. 「兄弟たち」 マルコ 6:3 に、イエスはヨセフとマリアの息子であり、その兄弟にヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン、他に複数の姉妹がいたことが記されている。ただし、姉妹達の名前は未記載となっている。これより、マリアはイエス以外に少なくとも 6 人以上の子供をもうけたことにされている。尚、コリント書 I(9:5) から、イエスの兄弟の内何人かは妻帯してイエスの運動に連なったことが分かる。

32. 「兄弟姉妹がたが」 写本によると「兄弟たちが」となっているものもある。

34. 「周りに座っている人々を」は、マタイ (12:49) では巧妙に書き換えられ「弟子たちの方を指して」とされ、マルコと異なり民衆ではなく弟子をして「私の母、私の兄弟」としている。

35. 「誰でも、神に従う人が、僕の兄弟であり、姉妹であり、母なんだ」 マルコの時代、イエスの運動の後継者として重要な位置にあったのが、ヤコブを中心とするイエスの一族であった (エルサレム教会の代表はヤコブであり、ヤコブの死後はイエスの親戚の者が後を引き継いだ)。マルコは、この血統主義に対してかなり批判的であったのである。これは、後に正統派となる一派が原始キリスト教団から分離独立していったことの現れである。

## 第4章

### 「種を蒔く人」のたとえ (4:1~9) (マタイ 13:1~9、ルカ 8:4~8)

<sup>1</sup> 次にイエスが湖のほとりで教え説いているとき、夥しい数の民衆が集まった。集まった人数が極めて多かったので、イエスは湖に浮かべた舟に乗りそこに腰を下ろさなければならなかったほどであった。一方で、民衆は、湖畔に立っていた。<sup>2</sup> イエスは人々に多くのことを教えるのにたとえ話をを用いた。この話はイエスが教えた一部である。<sup>3</sup> 「さあ聞きなさい。あるお百姓さんが畑に種を蒔きに出かけたんだ。<sup>4</sup> 蒔いていると、種のいくつかは道の途中に落ち鳥に食べられちゃったんだ。<sup>5</sup> 他の種は、薄い土が被さった岩地に落ち、そこは土が余り深くないのですぐに育ったんだ。<sup>6</sup> でも、太陽が昇ると、(成長した)植物は乾いて枯れたんだ。それらには根が十分に育たなかったからなんだね。<sup>7</sup> 他の種は棘のある植物が育ち植物の生育を阻む土地に落ちたんだ。だから、これらの植物は実を結ばなかったんだよ。<sup>8</sup> でも、その三十倍・六十倍・百倍以上に育つような良い土地に、わずかなんだけれど種はまかれたんだ。」<sup>9</sup> そして、「(聞く)耳を持つてる人は、ちゃんと聞きなさい。」と言った。

1. 「湖」 = 「ガリラヤ湖」

1. 「湖のほとり」 原本は「海辺」。勿論、ガリラヤの海とはガリラヤ湖のことに他ならない。

1. 「舟に乗って」 大勢の民衆が迫ってきたので舟に乗ったのである。

1. 「腰を下ろさなければ…」 古代イスラエルでは教師は座って教えを説いたのである。

2. 「たとえでいろいろと」 写本により「多くのたとえ話で」となっているものもある。

5. 「岩地」 土の下は殆ど岩で、岩の上に薄く土が被さっているような土地。

7. 「棘のある植物」 アザミなど棘のついた草などを指す。

### たとえを用いて話す理由 (4:10~12) (マタイ 13:10~17、ルカ 8:9~10)

<sup>10</sup> イエスが12弟子と他の何人かとだけいたとき、彼らはイエスにこれらのたとえ話について尋ねた。<sup>11</sup> そこで、イエスは答えた。「僕は君らに神の国に関する秘密を打ち明けるんだけれど、他の人々にはたとえ話で(教えを)説くだけにしておこうと思ってる。<sup>12</sup> それはね、彼らが見ようとしては見るんだけれど、けっして理解できないからなんだ。彼らは聞こうとしては聞くんだけれど、けっして理解できないからなんだ。もし彼らが理解できるんだしたら、そしたら彼らは神様に立ち返れるっていうことになり、神様も彼らのことを赦すだろうにね。」

11. 「神の国」 = 「神の王国」とは「神による永遠の支配」を意味する。つまり、この世的な支配が終了した後の絶対的な神による支配を指す。

12. 七十人訳聖書のイザヤ書 6:9~10 による。<sup>9</sup> そして彼(主)は言った、「行って、この人々に言え、『あなた方は聞くには聞くが、理解できない、見るには見るが悟らない。』と。<sup>10</sup> この人々の心は頑なになっていて、彼らの耳は鈍くなり、彼らは目を閉じてしまい、それ故目で見ること、耳で聞くこともできなく、心で理解することも、悔い改めれば癒すことができただろうに、悔い改めることもできなくなってしまったのだ。」

ヘブライ語聖書によるイザヤ書では、「<sup>9</sup> 主は言われた、『行け、この民に言うがよい/よく聞け、しかし理解するな/よく見よ、しかし悟るな、と。<sup>10</sup> この民の心をかたくなにし/耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく/その心で理解することなく/悔い改めていやされることのないために。』となっている。

### 「種を蒔く人」のたとえの説明 (4:13~20) (マタイ 13:18~23、ルカ 8:11~15)



<sup>13</sup> イエスは彼らに言った。「君らは、このたとえ話を理解できないんだったら、他のたとえ話なんか理解できないだろうね。<sup>14</sup> お百姓さんが蒔くのは、実に(神の)王国に関するメッセージのことなんだ。<sup>15</sup> 道の途中に落ちた種ってのは、このメッセージを聞く人々のことなんだけれど、サタンがすぐやって来て、彼らからメッセージを強奪するってことになるわけ。<sup>16</sup> 岩地に落ちた種ってのは、喜んでメッセージを聞きすぐに受け入れる人々のことなんだけれど、<sup>17</sup> 彼らには根がないんで、彼らは余り長続きしないんだ。生活が厳しくなったり、メッセージが彼らに問題を起こすようになっちゃうと、すぐに彼らは諦めてしまうと思うよ。<sup>18</sup> 棘のある植物の間にまかれた種も、メッセージを聞く人々なんだ。<sup>19</sup> だけど、彼らはこの世で必要になるものについて心配し始めちゃうのさ。彼らは豊かになりたがって、あらゆる物を得ようとする欲望に惑わされるから、メッセージが詰まっちゃって、彼らは何も生み出さなくなるんだよ。<sup>20</sup> 良い土地にまかれた種ってというのは、メッセージを聞いてこれを受け入れる人たちのことだよ。彼らは、自分が受けた三十倍・六十倍・百倍以上のものを生み出すことになるのさ。」

13. 「彼ら」 イエスと一緒にいた 12 弟子とその他の人々

「ともし火」のたとえ (4:21 ~ 23)  
(マタイ 5:15、ルカ 8:16 ~ 17)

<sup>21</sup> イエスは、また、言った。「君らは、ともし火の灯りを、まさか土の器やベッドの下には置かないよね。ともし火は、勿論、燭台の上に置くよね。<sup>22</sup> 隠されているもので、明るみに出ないものなんてないよ。それに、秘密になっているもので、明らかにされないものなんてのもないんだよ。<sup>23</sup>(聞く) 耳を持つて人は、ちゃんと聞きなさい。

21. 「ともし火」 イエスの時代、オリーブ油を使って粘土製の小さなランプで灯りをとった。尚、詩編 (119:105) には、神の言葉は、道の光であり歩みを照らす灯にたとえられている。

21. 「土の器」 「土の器」は上からかぶせて灯火を消すのにも使用できる。「土の器」は「升」とも訳され、これはギリシャ語はラテン語の *modius* からの借用語である。マルコはラテン語を用いているので、福音書はローマで書いたという人がいるが、度量衡の単位やそれに関する言葉が支配民族の言葉から借用して被支配民族が使うことはよくあることである。

「秤」のたとえ (4:24 ~ 25)  
(マタイ 7:2、ルカ 8:18,6:38)

<sup>24</sup> 注意してちゃんと聞きなさい。君らはさあ、君らが接している他の人から、君らが接しているのと同様に、でもひょっとしたら、それ以下で扱われちゃうってことあるよね。<sup>25</sup> 沢山持つてる人はもっと物持ちになってね、少ししか持つてない人は今持つてるものまで失っちゃうんだね。」

24. 「君らはさあ、君らが接している他の人から、君らがその人に接しているのと同様に、でもひょっとしたら、それ以下で扱われちゃうってことあるよね」 「あなたがたは自分の量の秤で量り与えられ」は当時に諺と考えられる。

25. 「金持ちはますます裕福になり、貧乏人はますます貧乏になる」という当時の諺と考えられる。

「成長する種」のたとえ (4:26 ~ 29)

<sup>26</sup> 再び、イエスは言った。「神の国ってのはね、お百姓さんが畑に種をまくときにどんなことが起こるかってことに似てるんだね。<sup>27</sup> お百姓さんは夜寝て、日中は起きてるでしょ。でも(まかれた)種は芽を出して成長し続けるんだけれど、お百姓さんは(詳しい)訳なんて知らない。<sup>28</sup> 土が種を発芽させ実がなるように育てるって訳さ。<sup>29</sup> そして、収穫のシーズンが来て実が熟すと、お百姓さんは、鎌で刈り取る(ってことになる)。」

26. 「神の国」

27. 「訳なんて知らない」 当時の農民は、どういうメカニズムで芽が出て、作物として育つかまでは知らない、ということ。

「からし種」のたとえ (4:30~32)  
(マタイ 13:31~32、ルカ 13:18~19)

<sup>30</sup>最後に、イエスは言った。「神の王国ってのはどう言ったらいいんだろう。神の王国を説明するのにどんな話をしようか。<sup>31</sup>それは、からし種が土に植えられたときに起こることに似てるね。からし種ってのは、この世で一番小さい種だね。<sup>32</sup>でも、それが植えられると、どんな野菜よりも大きくなって、陰に鳥が巣を作れるほどの大きな茎さえできるんだな。」

30. 「この世で一番小さい種だね」 イエスの時代、最も小さいものとして辛種が引き合いに出された。

31. 「からし種 (mustard seed)」 「からし」はガリラヤ湖畔に沿って育つ植物で、長く香料・調味料として利用する為に植えられてきた。種の直径は凡そ 1mm。1 年草で高さが 60cm~2m 近くまでなり、茎から大きな葉が伸び、黄色い花を咲かせ、その実がからし油として用いられる。

32. 「野菜」 「庭で栽培される植物」の意味。

32. 「どんな野菜よりも大きくなって」 「からし」がどんな栽培植物よりも大きく育つということはありません。

32. 「大きな茎」 原語では「おおきな枝」であるが、からしは 1 年草であるから、枝ではなく正確には茎というべきである。しかし、からしの茎は大人の腕くらいの太さにはなる。

たとえを用いて語る (4:33~34)  
(マタイ 13:34~35)

<sup>33</sup>イエスは、人々に話すとき他にも多くたとえ話を用いた。イエスは人々の理解力に合わせて教えを説いた。<sup>34</sup>イエスは人々にたとえ話を用いないで教えることはなかった。しかし、イエスは弟子たちと一緒にいるときだけは、彼らに全てを説明した。

34. 「弟子たちと一緒にいるときだけは、彼らに全てを説明した」 イエスは民衆にはたとえを用いて「神の国」について話をしたが、弟子達には他の人達には内密にその全ての意味を説明した、ということになる。しかし、イエスの説明を受けた弟子達は、結局のところ、イエスの生前には、それを理解することはなかったということになる。

風を静める (4:35~41)  
(マタイ 8:23~27、ルカ 8:22~25)

<sup>35</sup>その日の夕方、イエスは、「渡って向こう岸に行こう」と弟子たちに言った。<sup>36</sup>それで、イエスの一行は民衆をそこに残し、弟子たちはイエスと一緒に舟に乗り、漕ぎ始めた。そして、他の何艘かの舟もその後を追った。<sup>37</sup>突然、嵐が湖を襲った。波が舟の中まで入ってきて、舟は沈みかけようとしていた。<sup>38</sup>イエスは頭を枕の上に置き舟の後ろにいて、眠っていた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、我々が溺れかけていても構わないのですか」と言った。<sup>39</sup>イエスは起き上がって、風と波に静まるように命じた。風はやみ、何もかも穏やかになった。<sup>40</sup>イエスは弟子たちに尋ねた。「どうして怖がるんだ。君らには信仰がないのか」<sup>41</sup>弟子たちは以前よりも増して恐れて、「この人は誰なんだろう。風や波さえこの人に従うんだから」と互いに言い合った。

35. 「その日の夕方」

35. 「向こう岸」 カファルナウムではない別の岸辺。

39. 「風と波に静まるように命じた」 旧約聖書では、神は暴風や荒海を鎮める存在としても登場する (詩編 77:19, 89:10, 107:29~30, ハバクク書 3:8,10,15 など)。その際に、神は「叱りつける」場合もある (詩編 104:7,106:9)。

## 第5章

悪霊に取りつかれたゲラサの人をいやす (5:1 ~ 5:20)  
(マタイ 8:28 ~ 34、ルカ 8:26 ~ 39)

<sup>1</sup> イエスと弟子たちはガリラヤ湖を渡ってゲラサ人の町近くの海岸にやってきた。<sup>2</sup> イエスが舟から降りようとしていたとき、悪霊に取りつかれた男が(墓場から)急いでイエスの下に走り寄ってきた。<sup>3</sup> この男は墓場に住んでいた。誰もこの男を、鎖を使ってさえ、縛りあげておくことができなかったのである。<sup>4</sup> この男はこれまで度々鎖や鉄の足枷で繋がれたけれど、鎖を引きちぎり足枷を砕いたのである。誰もこの男を制することはできなかったのである。<sup>5</sup> 昼も夜もこの男は墓場や丘の上において、叫んだり、石で自分を傷つけたりしていた。<sup>6</sup> (しかし、) この男は遠くにいるイエスを見ると、走り寄ってきて<sup>ひざまづ</sup>、大声で「天の神の子イエスよ、おまえは俺に何をしたいんだ。俺を苦しめないよう、神の名でもって約束してくれ」と叫んだ。<sup>8</sup> この男がこう言ったのは、イエスが、悪霊にこの男から出て行くように言ったからである。<sup>9</sup> イエスが、「君の名は何と言うんだい」と尋ねると、この男は「俺の名はレギオン。俺には大勢の悪霊が取り憑いているからな」と答えた。<sup>10</sup> この男は、悪霊たち追ひ払わないよう、イエスに懇願した。<sup>11</sup> 丘の中腹では、豚の大群がえさをあさっていた。<sup>12</sup> それで悪霊どもはイエスに、「俺たちを豚の中に送り込んでくれ。俺たちをそいつらのところに行かせてくれ」と懇願した。<sup>13</sup> イエスがそうさせたので、悪霊どもはこの男から出て、豚の中に入った。(すると、)二千匹ほどの豚の群れの全てが、猛然と崖を下って湖になだれ込んで、溺れてしまった。<sup>14</sup> 豚を飼育していた男たちは町や里に走って行き、この出来事が知れ渡った。それで、人々は何が起こったのか見にやって来た。<sup>15</sup> 彼らがイエスのところに来て、かつて大勢の悪霊に取りつかれていた男をことを見た。この男が服を着て正気になって座っていたので、人々は怯えた。<sup>16</sup> 何が起こったかを見ていた人々は、悪霊に取りつかれたこの男と豚のことを(他の人々に)語った。<sup>17</sup> そこで、人々はイエスに彼らの国の居住地から出て行ってもらいたいと言いだした。<sup>18</sup> イエスが舟に乗ろうとしていると、(悪霊に取りつかれていた)この男が、一緒に行きたいと懇願した。<sup>19</sup> しかし、イエスはそれを許さないで、その代わり「君の家族のいる家に帰りなさい。そして、主がいかに多くのことを君にしたか、主がいかに君を憐れんだかを、家族の人に伝えなさい」と言った。<sup>20</sup> この男はデカポリスとして知られた10の都市のある地域に立ち去って行き、いかに多くのことをイエスは自分にしてくれたかを全ての人に語り始めた。(すると)何が起こったかを聞いた全ての人々は皆驚いた。

1. 「ゲラサ (Gerasa)」 並行箇所であるマタイ 8:28 ではガダラ (Gadara) になっている (ルカ 8:26 ではゲラサ)。Gerasa(今日の Jerash) はガリラヤ湖南東 60km に位置する都市 (デカポリスの中心都市でその住民はギリシャ人) で、マルコ及びルカ福音書に記されているゲサラは該当しない。また、マタイ福音書の並行箇所にあるガダラ (Gadara:今日の Um Queis) はガリラヤ湖南東 8km に位置する町で、これも記述内容には合致しない。マルコ福音書の記述に合致する場所として唯一考えられる場所は今日の El Kursi である。ただし、この場所は、ガリラヤ湖の東岸にあり、マルコの記述と場所的には矛盾するが、この場所については、マタイでは「湖の他の岸」とし、ルカでは「湖を横切ったところの」としているの、必ずしもカファルナウムの対岸ということではないのかも知れない。尚、いくつかの写本では、「Gadara」または「Gergesa」となっている。

1. 「ゲラサ人」は、「ゲラサ」がデカポリスの1つを指す場合は、ギリシャ人ということになる。「海の向こう岸にあるゲラサ人の地方」とは、カファルナウムから最も離れた岸はデカポリス地方であり、デカポリスはギリシャ人の植民都市を中心とする地方なので、デカポリス地方のギリシャ人が住む地域を指しているという可能性がある。

2. 「悪霊に取りつかれた男」 精神的におかしくなった状態にある男。この男の周りの人々(この場合は非ユダヤ人と考えられる)は、この男が度々異常な行動を取るの、その都度縛りつけたと思われる。

3. 「墓場」はユダヤ人にとって不浄の場所とされた。イザヤ書 65:4 を参照すること。

9. 「レギオン (Legion)」 legion はローマの軍団で、5000 ~ 6000 人の歩兵、100 ~ 200 人の騎兵から構成されていた。1世紀のローマは25の軍団 (legion) を持っており、その内4つの軍団がシリア州に配置されていた。

9. 「俺の名はレギオン。俺には大勢の悪霊が取り憑いているからな」 汚れた霊の名前をレギオンとしたのは、大勢だからというだけではなく、ユダヤ人を支配していたローマ人を侮蔑する意図が込められていると思われる。

11. 「豚」 ユダヤの律法では、4つ足動物で食することができるのは、反芻し蹄が2つに分かれているものだけである。豚は、この類でないので、不浄とされ、犠牲として捧げることも食することが禁じられていた。ただし、旧約にも豚肉を食することや豚の血を捧げることは忌まわしいとされていたので、このような習慣を持つ民族ないしは集団と接していたと思われる。また、新約にも「豚飼い」が登場するので、豚を飼育してこれを食していた人々が律法を守る人々の周囲で暮らしていたことが窺える。

13 共にユダヤ人にとって忌むべき存在である悪霊も不浄な生き物とされた豚も死んだということである。

14. 「人々」 14~17の「人々」とは、豚を食する異邦人を指すと思われる。

17 この「人々」とは、豚を食する異邦の民(ギリシャ人?)である。イエスに飼育していた豚を殺されたので、人々はイエスを彼らの土地から追い出したのである。

20. 「デカポリス (Decapolis)」 ギリシャ語で「10の都市」の意味。ヘレニズム期にギリシャ人の植民都市として別々に建設されたが、前63年にローマの将軍ポンペイウスによって征服された後は、十都市連盟として大幅な自治権が与えられ、イエスの時代もローマ帝国の直轄地とはされず、シリア総督の監督下に置かれた。デカポリスには少数のユダヤ人もいたが、住民の大半はギリシャ人であり、ユダヤ人にとっては異邦人の地域であった。ガリラヤからペレアに行くにはデカポリス地方を通らなければならなかった。

#### ヤイロの娘の癒し (5:21 ~ 5:43)

(マタイ 9:18 ~ 26、ルカ 8:40 ~ 56)

<sup>21</sup> イエスは再度舟に乗ってガリラヤ湖を渡った。イエスが岸に降り立つと、大勢の民衆がイエスの周りに集まった。<sup>22</sup> 会堂長もそこにいた。彼の名はヤイロといい、ヤイロはイエスを見るとイエスの前に進み出て、その足もとに跪いて、<sup>23</sup> イエスに助けを求めて懇願し始めた。ヤイロは「(私の) 娘が死にそうです。どうか、来て下さってあの娘に触れて下さい。そうしてもらえれば、娘は治って(またちゃんと)生活できるようになるでしょう」と言った。<sup>24</sup> そこで、イエスはヤイロと一緒に出かけに行った。大勢の民衆も、イエスの後を付いて行き、周りは民衆で溢れた状態が続いた。<sup>25</sup> 民衆の中に、12年間、出血の止まらない女がいた。<sup>26</sup> 彼女は、多くの医者のところに行ったけれど、医者たちは彼女に多くの苦痛のみをもたらすだけで何もできなかった。彼女は医者に見てもらうために全財産を使ったけれど、良くなることはなく悪くなる一方であった。<sup>27</sup> 彼女はイエスのことを聞いて、民衆の中に紛れ込んで、どうにか背後からイエスの服に触れることができた。<sup>28</sup> 彼女は自分自身に「この人の服に触れることができたなら、きっと良くなるわ」と言い聞かせた。<sup>29</sup> 彼女がイエスの服に触れるとすぐ、出血が止まって病気が治ったことが分かった。<sup>30</sup> その瞬間、イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいた。イエスは民衆の方を振り向いて、「僕の服に触ったのは誰？」と尋ねた。<sup>31</sup> 弟子たちは、イエスに「先生、周りを取り囲んでいる大勢の民衆を見て下さいよ。誰が先生に触ったと言われてもねえ」と答えた。<sup>32</sup> しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、見回した。<sup>33</sup> その女性は自分の身に何が起こったことを知っていた。恐ろしさの余り震えながら進み出てイエスの前に跪いた。それで、彼女は全てをイエスに話した。<sup>34</sup> イエスは彼女に「君はね、今、君の信仰によって良くなったんだよ。神が平安を与えて下さいますように。君は治ったんだ。君はもう苦しまなくてもいいんだよ」と言った。<sup>35</sup> イエスがまだ話しているとき、ヤイロの家から何人かが来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすことはないでしょう。」<sup>36</sup> イエスは彼らの話を聞いて、「心配しないでいいよ。ただ信じなさい」とヤイロに言った。<sup>37</sup> イエスは、ペトロと二人の兄弟、つまりヤコブとヨハネの以外は、誰も一緒に行かせなかった。<sup>38</sup> 彼らはヤイロを伴って彼の家に行ったのであるが、イエスは人々が泣きわめいて騒いでいるのを見て、<sup>39</sup> 家の中に入り、彼らに言った。「なぜ、泣き騒いでいるの。その子は死んでなんていないよ。眠っているだけさ。」<sup>40</sup> 人々はイエス(の言葉)に失笑した。イエスは皆を外に出した後、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、その子のいる所へ行った。<sup>41~42</sup> イエスは12歳になる少女の手を取って、「タリタ、クム」と言った。これは、「お嬢ちゃん、起きなさい」という意味である。少女はすぐに起き上がった

て、歩きだした。人々は非常に驚いた。<sup>43</sup>しかし、イエスは彼らに何が起こったかを誰にも話さないように命じた。そして、イエスは「この子に何か食べ物をあげてね」と言った。

22. 「会堂長」 シナゴークの責任者。因みに、イエスの時代にガリラヤにはシナゴークはなかったとされている。

23. 「ヤイロ (Jairus)」 ヘブライ名ヤイル (Jair 民数記 32:41, 申命記 3:14, ヨシュア記 13:30, 士師記 10:3, エステル記 2:5) のギリシャ語形。

25. 「12年間、出血の止まらない女」 出血する女は不浄とされた。

39. 「その子は死んでなんていないよ。眠っているだけさ」とイエスが人々に言ったのであるが、それは人々に希望を与える為で、実際にはこの少女は死んでいたということになる。

41. 「タリタ、クム (Talitha, koum)」 アラム語で「お嬢ちゃん、起きて」の意味と一般的にはされる。尚、マタイの並行箇所にはこの言葉はなく、ルカの並行箇所では、この言葉はギリシャ語に置換されている。

42. 「少女はすぐに起き上がって」は、眠りから覚めて起き上がったのではなく、死から蘇ったことを意味する。つまり、イエスは死者を蘇らせた奇跡を行ったと理解すべきである。

## 第6章

### 故郷で受け入れられない (6:1~6) (マタイ 13:54~58、ルカ 4:16~30)

<sup>1</sup> イエスはそこを去って、弟子たちと共に自分の生まれ故郷に戻った。<sup>2</sup>(戻った後の) 次の安息日に、イエスは会堂(シナゴグ)で教えを説いた。その教えを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この男は、どうしてこんなことができるんだろう。こんなにいろんな不思議なことができる知恵と力を、この男はどこで身につけたんだろう。<sup>3</sup> この男は大工で、マリアの息子だろう。この男は、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟だろうし、妹たちだって、俺たちの町にまだ居るだろうが。」人々はイエスの行いに対して非常に疑問に思っていた。<sup>4</sup> しかし、イエスは、「預言者は全ての人に敬われるけど、自分の故郷の人たち、親戚や家族からは別だね」と言った。<sup>5</sup> 生まれ故郷でイエスは、わずかの病人に手を置いて彼らを癒しただけで、そのほかは何も奇跡を行うことはなかった。<sup>6</sup> イエスにとって、彼らが自分のことを信頼しないのは、とても意外であった。

1. 「生まれ故郷」 ガリラヤのナザレとされる。
2. 「大工」 家だけではなく様々な道具を造る職人。職人は最下層に属する。
3. 「マリアの息子」 父親である誰々の子という表現で人物は紹介されるのが普通である。尚、マルコ福音書にはマタイ・ルカに登場する父親の名前「ヨセフ」は登場しない。父ヨセフはイエスが成人する前に亡くなっていると見ることもできる。また、ヨセフはマリアよりもかなり年長ではないかとする見方もできる。新約外典の原ヤコブ福音書 9:2 には、ヨセフはマリアと結婚したとき年老いていて、既に子供もあったということが記されている。また、大工ヨセフの履歴(物語)という文書には、マリアと結婚する前にヨセフには既に6人の子供があったが、ヨセフの最初の配偶者が亡くなった後、ヨセフはマリアと結婚し、その2年後にイエスが誕生したが、イエスが12歳になったときに、父ヨセフは亡くなったという話が記されている。
3. 「この男は、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟だろうし、妹たちだって、俺たちの町にまだ居るだろうが」 マリアはヨセフの後妻に入り、イエス以外に子供はいなかった。そして、これら兄弟姉妹たちはヨセフの先妻の子供たちであるとする意見がある。そして、「イエスの姉たち」という箇所は原文では「イエスの姉妹たち」となっていて、必ずしも妹を指してはいない。しかし、ナザレはあったとしてもごく小さい集落であるから、その集落内で結婚して暮らしていたとは考えにくい。つまりは、姉妹たちは未婚ということになり、それは即ち、この姉妹たちはマリアの実の娘たちということになるから、イエスにとっては妹たちということになるのである。
3. 「ヤコブ」 所謂「主の兄弟ヤコブ」、義人ヤコブとも呼ばれ、後にエルサレム教会のリーダーとなった。使徒言行録及びガラテヤ書では、「主の兄弟」と表現されている。このヤコブについて、伝統的にカトリックではイエスの異母兄、プロテスタントでは同母弟、ギリシャ正教では従兄弟と扱っている。尚、義人ヤコブについては、ヨセフスもその著書に記している。
3. 「ヨセ」 マタイ(13:55)では「ヨセフ」となっている。イエスが十字架につけられたときに見守っていた婦人の一人に小ヤコブとヨセの母マリアとある(マルコ 15:40)。尚、イエスの4人の兄弟の名前が見られるのは、マルコとマタイのみで、ルカとヨハネには記されていない。
3. 「人々はイエスにイエスの行いに対して非常に疑問に思っていた」「イエスに躰いたままであった」と訳されるのが一般的。要するに、人々はイエスに信頼できなかった、或いは、不信仰の状態にあったというように解されている箇所である。
6. 「彼らが自分のことを信頼しないことは、とても意外であった」「人々が不信仰であった為、大いに驚いた」というふうに訳するのが一般的である。

### 12弟子の派遣 (6:6~13) (マタイ 10:1,10:5~15、ルカ 9:1~6,10:1~12)

<sup>6</sup> イエスは付近の全ての村々で教えを説いた。<sup>7</sup> そして、12人を呼び集め、悪霊を支配する力を授け、二人一組にして派遣した。<sup>8</sup> イエスは弟子たちに言った。「君たちは杖を一本持って行ってもいいけど、食べ物も袋もお金も持って行ってはだめだよ。<sup>9</sup> でも、履物は履いていいけど、着替えは持って行ってはだめだよ。<sup>10</sup> 受け入れて貰える家があったら、その町を去るまでそこに居なさい。<sup>11</sup> でも、君らを受け入れないで、君らのメッセージを聞かないような(人たちの居る)ところだったら、そこを出て行って、

その人たちに対する警告の意味で足の裏の埃を払い落としなさい。」<sup>12</sup> 弟子たちは出かけて行き、神に立ち帰るように全ての人に教え始めた。<sup>13</sup> 彼らは、多くの悪霊を追い出して、油を塗って多くの病人を治した。

8. 「杖を一本」 護身の為と思われる。マタイ・ルカの並行箇所では杖を持っていくことを許していない。
9. 「履物」 マタイ・ルカの並行箇所では履物を持っていくことを許していない。
11. 「足の裏の埃を払い落としなさい」 決定的な絶縁の表し方。使徒 18:6 を参照すること。
12. 「神に立ち帰る」 「悔い改める」と訳するのが一般的であるが、神の命に背いて生活した者が、神に従って生きようにするという意味なので、敢えてこう訳した。
13. 「油を塗って多くの病人を治した」 当時のユダヤ人の風習とされる。

#### 洗礼者ヨハネの殺害物語 (6:14~29)

(マタイ 14:1~12、ルカ 9:7~9)

<sup>14</sup> イエスは非常に有名になったので、領主ヘロデもその名を知るようになった。人々の中には、イエスは洗礼者ヨハネで、生き返って奇跡を行うのだと考える者もいた。<sup>15</sup> そのほか、イエスはエリヤだとする者もいれば、大昔の預言者だとする者もいた。<sup>16</sup> しかし、ヘロデはイエスのことを聞いて、「あやつはヨハネに違いない。わしはヨハネの首をはねたんだが、あやつは生き返ったのだ」と言った。<sup>17~18</sup> ヘロデは、自分の兄弟フィリポの以前は妻だったヘロディアと結婚したのであるが、ヨハネは「おまえが兄弟の妻を娶るのは良くない」と言っていたので、ヘロデは(そう指摘されて不満であった)ヘロディアを満足させる為に、ヨハネを捕らえさせ、牢につないだのである。<sup>19</sup> ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、そうすることはできなかった。<sup>20</sup> なぜなら、ヘロデは、ヨハネを恐れていて、ヨハネをかばったからである。ヘロデはヨハネが善人で信心深い人間であることを知っていたのである。ヘロデはヨハネが語ったことに当惑はしたが、ヨハネの教えを好ましく思ってしばしば聞きいていた。<sup>21</sup> ところが、ヘロデが自分の誕生日の祝宴を催し、自分の高官や将校、ガリラヤの有力者など招いたとき、ヘロディアに好機が訪れることになった。<sup>22</sup> ヘロディアの娘が(祝宴の場)入って来て、ヘロデと客たちの為に踊りをおどった。この娘は一同を喜ばせたので、ヘロデは、「欲しいものがあれば申し出よ。それをお前にやろう」と言い、<sup>23</sup> 更に、「お前が望むんだったら、わしの領土の半分だっておまえにやると誓ってもよいぞ」と言ったのである。<sup>24</sup> 娘は座を外して、母親に、「私は何を申し出ればいいのか」と言った。そこで娘の母親(ヘロディア)は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。<sup>25</sup> 娘は急いで戻ってきて、ヘロデに、「今すぐ盆に、洗礼者ヨハネの首をいただきとうございます」と申し出た。<sup>26</sup> ヘロデは自分が言ったことを非常に悔やんだが、客の前で誓ったことを破る訳にはいかなかった。<sup>27</sup> 即刻、ヘロデは衛兵に牢獄でヨハネの首をはねるように命じた。<sup>28</sup> 衛兵は首を盆に載せて持って来てこの娘に渡した。そして、娘はそれを母親に渡した。<sup>29</sup> ヨハネの弟子たちはヨハネが殺されたことを聞き、ヨハネの遺体を引き取り、墓に埋葬した。

14. 「領主ヘロデ」 「ヘロデ王」と一般的には訳されるが、ヘロデ・アンティパス、ヘロデ大王の息子の一人で、ガリラヤ・ペレア領主(tetrarch)。四分領主(tetrarch)であるから実際には王ではない。

14. 「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」 この記述から、イエスの名前が広く知られるようになったのは、洗礼者ヨハネの死後ということになる。

15. 「エリヤ」 エリヤは旧約の預言者で、民衆に最も人気があり、終末の前には再来すると考えられていた(マラキ書 3:23)。

16. 「あやつはヨハネに違いない」 ヘロデ・アンティパスがこの物語に書いてあるように洗礼者ヨハネを殺害できたなら、その領民でありヨハネ同様不穏分子であるイエスも容易に殺害できたと思われる。イエスがヘロデ・アンティパスにより殺されなかったのは、巧妙に逃れていたためかも知れない。

17. 「フィリポ(Philip)」 ヘロデ・フィリポ。ヘロデ大王の息子の一人で、その妻がサロメである。しかし、ヘロディアの最初の夫はヘロデ・ポエトスでヘロデ・フィリポではない。ヨセフスはユダ

ヤ古代誌 (18:5:1) で、ヘロデ・アンティパスとナバテア王アレタス (Aretas) との争いに関して記しているのであるが、ここにはヘロディアの最初の夫はヘロデ・ポエートス (ヘロデ・アンティパスの異母兄弟で、その母はマリアンメ 2 世) であると記しているのである。そして、このヘロデ・ポエートスがサロメの父であるとはっきり記しているのである。通常、このヨセフスの記述と福音書の記述を併せて、ピリポをヘロデ・フィリポとしているのである。しかし、並行箇所であるルカ 3:19 で写本 D のような最上の写本及びラテン語版のマタイ 14:3 には、ピリポの名前はない。マルコは、ヘロデ大王の息子の一人で、母がクレオパトラ (Cleopatra) であるフィリポ (四分領主) とヘロデ・ポエートスとを間違えて記したようである。このフィリポはサロメの夫であり、ヘロディアの義理の息子になる。

ヘロデ大王 - アリストプロス - ヘロディア

サロメ

ヘロデ・ポエートス (ヘロディアの最初の夫)

ヘロデ・アンティパス (ヘロディアの 2 番目の夫)

ヘロデ・フィリポ (サロメの夫)

17~18. 「ヨハネを捕らえさせ」 ヨセフスによれば、ヘロデ・アンティパスが洗礼者ヨハネを逮捕したのは、律法に違反したことを告発された為ではなく、民衆に対するヨハネの影響を恐れた為である。尚、ヘロデ・アンティパスが洗礼者ヨハネを逮捕できたということは、ヨハネはユダヤではなくペレアないしはガリラヤの人であったということになる。

17~18. 「ヘロディア (Herodias)」 ヘロデ大王の息子のアリストプロス (Aristobulus) の娘 (母はヘロデ大王の妹のサロメの娘の Bernice)。父アリストプロスが前 7 年に死去する少し前に生まれ、ヘロデ大王の息子 (つまりはヘロディアの叔父) のヘロデ・ポエートスと婚約させられている。この最初の夫ヘロデ・ポエートスとの間にできた娘の名前をヨセフスはサロメと記している。後にヘロデ・アンティパスに好意を抱くようになり、夫ヘロデ・ポエートスと離婚したとヨセフスは記している。ヘロディアは再婚したとき 40 歳近くになっていたのであるが、彼女はヘロデ・アンティパスの姪であり (ただし、最初の夫にとっても姪である)、この結婚はユダヤの律法では禁じられている (レビ記では、18:16 及び 21 で、兄弟が生きている限りは兄弟の妻との結婚を禁止しており、20:21 では兄弟の妻を娶るのは汚らしいことであるとしている)。

因みに、イエスは夫と離婚して他の男と結婚するのは姦通の罪になり (マルコ 10:12)、不法な結婚ではない場合に離婚し新たに結婚するのは姦通の罪になる (マタイ 19:9) と言っている。しかし、モーセは離縁を許可しているとされている (マタイ 19:7~8)。

尚、ヘロデ・アンティパスは、ナバテア王アレタスの娘と結婚した (これは政略結婚である) が、離婚してヘロディアを娶った。この離婚がナバテアとの関係を悪くし、36 年にアンティパスはアレタス (このアレタスは、第 2 コリント 11:32 に、パウロを捕らえようとしたダマスカスの代官の主としてその名前が記載されている) と争って敗れることになる。因みに、ヨセフスはアンティパスの敗戦の理由を、洗礼者ヨハネを殺害した為であると「ユダヤ古代誌」に記している。

ヘロディアは、兄弟であるアグリッパ 1 世がユダヤ王の称号を授与されたのを妬み、同様の称号を夫に授与されるのを願ったが、結局夫のヘロデ・アンティパスは失脚し、夫婦共にローマ皇帝ガイウスによって追放されてしまうのである。

20. 「ヨハネが語ったことに当惑はしたが」 いくつかの写本では、「ヨハネが言ったことにより多くのことを行って」となっている。

22. 「ヘロディア」 写本のいくつかでは「ヘロデ」となっている。

22. 「ヘロディアの娘」 ヨセフスは名前を「サロメ」としている (ユダヤ古代誌 18:136)。しかし、「サロメ」という名前は新約には記されていない。

22. 「この娘は一同を喜ばせたので」 ユダヤの王族の娘が客の前で (猥らな) 踊りをおどるということは、ユダヤ人社会ではおよそあり得ないことであるが、ヘレニズム文化の影響下ではあり得る。

23. 「わしの領土の半分だっておまえにやると」 現実的には、ローマの主権下にあるヘロデ・アンティパスに、領土を自由にやり取りする権限はない。

27. 「牢獄」 ヨセフスの著した「ユダヤ古代誌」(18:119) によると、ヨハネが幽閉され殺害されたのは、ペレア南部にあるマカイロス要塞としている。この物語では、宴席の間に、領主の命令で首をはねて、その首を宴席の場に持って来させていることになっているので、洗礼者ヨハネ殺害はヘロデ・アンティパスのいたティベリウス (尚、ティベリウスは墓地の上に建設されたので、墓地を不浄とするユダヤ人は居住しなかったとされる) での出来事とされている。

弟子の帰還 (6:30~31)

(ルカ 9:10a)



<sup>30</sup> 派遣されていた弟子たちがイエスのところに戻ってきた後、自分たちが行ったことや教えたことを全て報告した。<sup>31</sup> しかし、非常に多くの人々がイエスのところ代わる代わるやってきたので、イエスと弟子たちは食事を摂ることさえできなかった。そこで、イエスは、「僕らだけで居られるところへ行ってそこで少し休もうよ」と言った。

30. 「派遣されていた弟子」「使徒」と一般に訳されているが、この時はそのような称号は無かったと思われる。

イエス、五千人に食べ物を与える (6:32～44)  
(マタイ 14:31～21,9:36、ルカ 9:10b～17、ヨハネ 6:1～14)

<sup>32</sup> そこで、彼らは舟に乗って、自分たちだけで居られる場所に行った。<sup>33</sup> しかし、多くの人々が、彼らが出かけて行くのを見て、彼らがどこに行こうとしているか察知した。だから、すべての町から人々が駆けつけ、彼らより先にそこに着いたのである。<sup>34</sup> イエスは、舟から降りた時、大勢の民衆がまるで羊飼いのいない羊の群れのような状態になっているのを見た。イエスは人々を気の毒に思い、彼らに多くのことを教え始められた。<sup>35</sup> その日の夕方、弟子たちがイエスのところにやって来て言った。「ここは荒れ野のようなところで、もう時間も遅くなりました。<sup>36</sup> 人々を解散させましょう。そうすれば、彼らはこの近くの里や村へ行って、何か食べる物が買えますから。」<sup>37</sup> これに対してイエスは、「君らがこの人たちに何か食べる物をあげるのがいいんじゃない」と答えた。そこで、弟子たちは、イエスに「この人たち全ての食事を賄うには200デナリオンも要るんですよ。分かってるんですか」と聞き返した。<sup>38</sup> そこで、イエスは言った。「君ら、パンは幾つ持っているの。行って見てきて。」弟子たちは調べて、答えた。「パンが5つで魚が2匹です。」<sup>39</sup> イエスは弟子たちに人々を青草の上に座らせるように命じた。<sup>40</sup> 人々は、百人とか、五十人とかずつまとまって腰を下ろした。<sup>41</sup> イエスは5つのパンと2匹の魚を取り、天を仰いで食物に感謝の祈りを捧げ、パンを裂いて、人々に渡るように弟子たちに配った。イエスは2匹の魚も分けて配った。<sup>42</sup> 皆が食べて満腹した後、<sup>43</sup> 弟子たちが残ったパンと魚を集めたところ、12の籠がいっぱいになった。<sup>44</sup> 食事を摂った男はその場に五千人いた(にもかかわらずである)。

34. 「飼い主のいない羊」民数記 27:17、列王記上 22:17、ゼカリヤ書 10:2 などに出てくる表現で、飼い主(牧者)がいない羊の群れは大混乱に見舞われ、故に滅ぶ。

37. 「デナリオン」1デナリオンは銀貨1枚で1日分の労働者の賃金に相当する。1デナリ(denarii)は3.4gとされる。

39. 「青草の上に座らせる」食事をする姿勢を示している。

41. 「感謝の祈りを捧げ、パンを裂いて」は、最後の晚餐の場面と同じ用語が用いられている。

43. 「12の籠」12はイスラエル12部族を表す数字である。

43. 「残ったパンと魚を集めたところ、12の籠がいっぱいになった」これは「お話」である。

44. 「男はその場に五千人いた」人数を数えるときは男の数を数えたので、実際は女や子供も含めると、一万人以上はいたということになる。尚、ガリラヤで万の単位の間人が集合すれば、それは騒乱状態であると認識され、軍隊が派遣されるであろうから、これは「お話」ということになる。

イエス、湖の上を歩く (6:45～52)  
(マタイ 14:22～33、ヨハネ 6:15～21)

<sup>45</sup> それからすぐ、イエスは弟子たちを舟に乗せ、(湖を)渡ってベトサイダに戻らせた。しかし、イエスは民衆が解散するまでそこに留まった。<sup>46</sup> イエスは民衆に別れをつけてから、祈るために山の中腹に登った。<sup>47</sup> 夕方遅く、イエスはまだその場にいたのであるが、舟が湖の真ん中あたりにあった。<sup>48</sup> 逆風であったので、弟子たちが必死に漕いでいるのがイエスには分かった。夜が明ける頃、イエスが弟子たちの方にやって来た。イエスは湖の上を歩いていて、舟を通り過ぎようとしていたのである。<sup>49</sup> 弟子たちは、イエスが湖の上を歩いているのを見て、幽霊だと思い、大声で叫び出した。<sup>50</sup> 弟子たちは皆はイエスを見て恐ろしくなったのである。しかし、すぐに、イエスは彼らに、「心配しないで。僕だよ、イエスだよ。怖がらないで」と言った。<sup>51</sup> イエスが舟に乗り込むと、風は静まったのである。それで、弟子

たちは完全に当惑してしまったのである。<sup>52</sup> 彼らは、心が閉じていて、パンのことの本当の意味が分からなかったのである。

45. 「ベトサイダ (Bethsaida)」 ガリラヤ湖北岸にあったとされる集落で、その名前は「漁師の家」からくるとされている。アンデレとペテロの兄弟はベトサイダ出身である (ヨハネ 1:44)。

48. 「夜が明けるころ」 夜をローマ式に4つに区分したときの4番目の時間帯を指している。従って、午前3時~6時頃を指す。

48. 「イエスは湖の上を歩いて」 人は水の上を歩くことはできないので、この記事は、イエスがいかに偉大な存在だったかを伝えるための「お話」ということになる。

52. 「心が閉じていて」 イエスを信頼しきって無かった為 or 信仰がなかった為

イエス、ゲネサレトで病人を癒す (6:53~56)

(マタイ 14:34~36)

<sup>53</sup> イエスと弟子たちは湖を渡り、ゲネサレトの町の近くの岸に着いた。<sup>54</sup> 彼らが舟から降りるとすぐに人々はイエスがやってきたことが分かった。<sup>55</sup> それで、人々はその地方のいたるところを走り回って、病人を床に乗せてイエスのところへ運んできた。人々はイエスがどこにいても、それを聞く度に病人を運んできた。<sup>56</sup> 村でも里でも市の立つ町でも、イエスが行く全てのところに、病人を運んできた。彼らはイエスの服に触らせてくれるようにイエスに懇願し、服に触った人は全て病が治った。

53. 「ゲネサレト (Gennesaret)」 Tiberias とカファルナウムの間にある、ガリラヤ湖北西岸の町。

——— ヘロデ大王の一族 ———

ヘロデ大王 = パレスチナを前40年から前4年まで支配した。

ヘロデ・アルケラオス = ヘロデ大王の死後、ユダヤ・サマリア・イドマヤの領主 (前4年~後6年)

ヘロデ・アンティパス = ヘロデ大王の死後、ガリラヤ・ペレアの領主 (前4年~後39年)

ヘロデ・フィリポ = ヘロデ大王の死後、バタネア・トラコニティス・オーラニティスの領主 (前4年~後33or34年)

ヘロデ・アグリッパ1世 = 後41年~44年、パレスチナを支配し、ユダヤ王を名乗ること許される。

ヘロデ・アグリッパ2世 = 後50年~66年、パレスチナの一部を支配を許される。

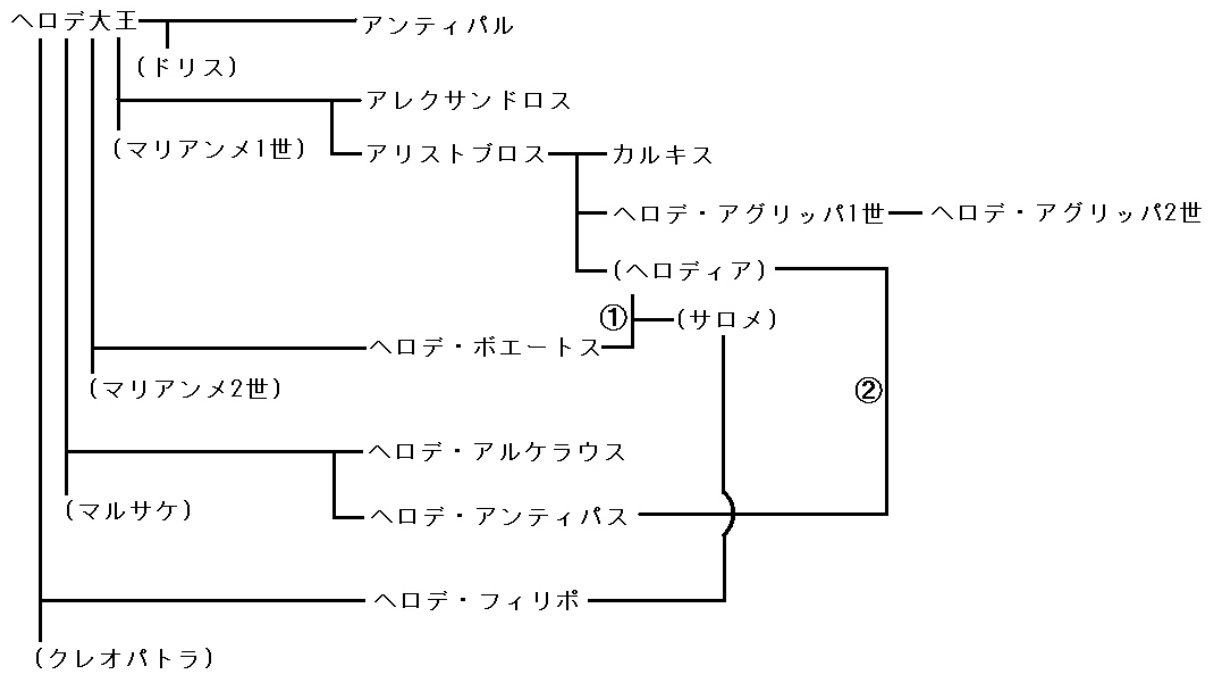


Fig. 1: ヘロデ家系図



Fig. 2: 新約時代のパレスチナ略図

## 第7章

### 祖先の教え (7:1~13)

(マタイ 15:1~9)

<sup>1</sup> 何人かのファリサイ派の人たちと律法学者たちがエルサレムからやってきて、イエスの周りに集まった。<sup>2</sup> 彼らは、イエスの弟子の何人かが食事の前に手を洗わないことに気づいた。<sup>3</sup> ファリサイ派の人たちと多くの者たちは、祖先の教えに従ったのである。彼らは、食事の前に、適切なやり方で常々手を洗っていたのである。<sup>4</sup> 彼らの中の誰もが市場で買って来た食物を洗わないで食べることはなかった。彼らは、(食事に使う) 杯や壺や器は(食前に) 洗わなければならないというような他の多くの教えにも従っていたのである。<sup>5</sup> ファリサイ派の人たちと律法学者たちは、「何故、おまえの弟子たちは、祖先が我々に教えた通りのことをしないのか。何故、あいつらは手を洗わないで食事するのか」とイエスに詰問した。<sup>6</sup> イエスは答えた。「君らは、知ったかぶりをしてるだけだ。預言者イザヤが『あなた方全てが言葉で私を讃えるけれど、あなた方は私のことを本当に思ってなどいない。あなた方が人間によって作られた規則を教えるとき、私を崇めることがあなた方にとっては無駄になるのだ』と神が言ったことを書いたのは正しかった。<sup>8</sup> 君らは人間の教えに従おうとして神の命令に背いているんだ。<sup>9</sup> 君らは神の命令を拒むのが上手だから自分たちの教えに従っているのかも知れないね。<sup>10</sup> モーセは君らに両親を敬いなさいとは言わなかったのかい？ モーセは両親を呪う者は全員死罪だって言わなかった？<sup>11</sup> でも、君らは、人々が両親を助けなければならなかったときにそうさせなかったんだ。自分たちが持っているものは神に捧げられたものなんですって答えろって言ったんだ。<sup>12</sup> 君らは、彼らに両親を助けさせはしなかった。<sup>13</sup> そして、君らは自分たちの教えに従おうとして神の命令を無視しているんだ。君らはこれと同じくらい悪いことを他にもたくさんしてるんだよ。

2. 「食事の前に手を洗わない」 律法では、食事の前に手を洗うことになっている。これは、衛生上の理由からではなく、単に宗教的行為である。食事の前に不浄なものに触れた場合、その人が触れる食物も不浄とされたのである。

3. 「ファリサイ派の人たちと多くの者たち」 「ファリサイ派の人たち、つまり全てのユダヤ人」と訳すこともできる。ただし、ファリサイ派がユダヤ人を主導できるようになったのは、第1次ユダヤ戦争後のことである。そして、この記述から、マルコ福音書は、第1次ユダヤ戦争後の時代状況で、この話を語っているということが分かる。

3. 「適切なやり方で」 ギリシャ語では「握り拳で」という表現がなされている。

4. 「市場で買って来た食物を洗わないで食べることはなかった」 市場で買って来たものは何でも、他の不浄なものと同様に接触して不浄になったものは、洗う必要があるとユダヤ人は考えている。

4. 「杯や壺や器は(食前に) 洗わなければならない」 不浄なものに触れた杯や壺、器に入れた食物は不浄になるとされた。

4. 「器」 写本によっては、「器と寝床」とするものもある。

7. 「あなた方全てが言葉で私を讃えるけれど、あなた方は私のことを本当に思ってなどいない。あなた方が人間によって作られた規則を教えるとき、私を崇めることがあなた方にとっては無駄になるのだ」 七十人訳イザヤ書 29:13 「主は言った。『これらの人々は私を引き付けようとする。彼らは口で私を讃えるが、彼らの心は私から遠くにあり、彼らが私を崇める行為は空しい。』」

10. 「モーセ」 エジプトにあって虐げられていたイスラエルの人々を、エジプトからシナイ地域に脱出させた伝説上の人物。旧約聖書の創世記に始まる最初の5つの書物は、律法五書(トーラー) 或いは律法とされ、これらはモーセが書き著したものであると長らく信じられてきた。勿論、そのようなことはあり得ないことは現在では分かっている。

10. 「両親を敬いなさい」 七十人訳出エジプト記 20:12: 両親を敬わなくて、ずっと前の祖先の教えを守るとするのは理に適わないということになる。つまり、ファリサイ派や律法学者たちは、自分たちの両親を蔑ろにしても律法だけは守ろうとしていたということをイエスは看破していたということである。

10. 「両親を呪う者は全員死罪だ」 七十人訳出エジプト記 21:15

11. 「神に捧げられたもの」 神に捧げられたものは他の誰にも差し出すことはできない。よって、それがたとえ両親を助けることになるものでも、神に捧げられたものは両親に与えることもできないのだ、と律法学者は言っているとしている。

## 人々を本当に不浄にするもの (7:14～23)

(マタイ 15:10～20)

<sup>14</sup> イエスは民衆を再び集めて言った。「よくよく注意して僕が言わんとするところを理解しようとしてね。」<sup>15-16</sup> 口の中に入れる食べ物君らを不浄にすることなんてないし、それが神を崇めないことになるなんてことはないよ。(寧ろ)君らの口から出てくる悪い言葉が君らを不浄にするんだ。」<sup>17</sup> イエスと弟子たちが民衆の下を去り家に入った後、イエスの言ったこれらのことが何を意味するのかを弟子たちはイエスに尋ねた。<sup>18</sup>(そこで)イエスは答えた。「たった今話したことが分からないの? 口の中に入れたものが君らを不浄にするなんてことはないということはちゃんと分かってね。<sup>19</sup> 口から入ったものは心の中に入らないで、胃の中に入り、そして体から出ていくでしょ。」こう言って、イエスは食べ物は全て食べられるのだということを諭した。<sup>20</sup> さらに、イエスは言った。「君らの心から来るものが君らを不浄にするものなんだ。<sup>21</sup> 君らの心から、邪悪な考え、下品な行為、盗み、殺人、<sup>22</sup> 姦淫、どん欲、卑劣、偽り、好色、嫉妬、侮辱、高慢、無分別が来るんだよ。これらみんなが君らの心から出てくるものなんだよ。そして、これらのせいで、神を崇めることが君らに適わなくなるんだ。」

15～16. 「聞く耳のある人はよく聞きなさい」が加えられている写本もある。しかし、これは後世挿入されたものである。

19. 「食べ物は全て食べられる」「食べられるもの」というのは「清いもの」であるとユダヤ人には認識されているので、「全ての食べ物は清い」と訳すのが一般的ではある。

尚、ユダヤ人にとっては、食べていい物と、食べてはいけない物がある。この食物に関する規定(律法)は、普通コーシェルと呼ばれ、この言葉はヘブライ語のカシェル(清い)から来ている。ユダヤ人が豚肉を食さないのは、豚が不潔な生き物であるからという訳ではなく、「蹄が分かれていて・反芻する」生き物ではないからである。また、コーシェルはバビロン捕囚期にユダヤ民族のアイデンティティを保つ為に守られるようになったとされている。

22. 「姦淫」 婚姻関係にあるときの不実な行為。不義密通。

## 女性の信仰 (7:24～30)

(マタイ 15:21～28)

<sup>24</sup> イエスは(その場を)去り、ティルス近くの地方へ行き、そこである人の家に滞在した。イエスは自分がそこにいることを人々には知られたくなかったが、彼らは結局のところイエス(の居場所)を捜しだしてしまったのである。<sup>25</sup> 悪霊に取り憑かれた娘を持つ一人の女性がいて、彼女はイエスの居場所を聞くに及んで、すぐにやってきてイエスの足下に跪いた。<sup>26</sup> この女性はギリシャ人で、シリアの一地域となっているフェニキアの出身であった。彼女は娘から悪魔を追い払ってもらおうとイエスに懇願した。<sup>27</sup> しかし、イエスは「食べ物は、先ず最初に、子供たちにあげなくちゃならないんだ。子供たちから食べ物を奪って、それを犬に与えるってのは正しくないからね」と言った。<sup>28</sup> この女性は、「主よ、犬だって、子供たちが食卓から落としたパンくずを食べることはあります」と言い返した。<sup>29</sup> そこで、イエスは「その通りだね。すぐに帰るといい、悪魔はお嬢さんから出て行った筈だからね」と答えた。<sup>30</sup> 女性が家に戻ると、子供は床に横たわっていたけれど、悪魔は出て行ったことが分かった。

24. 「ティルス」 フェニキア地方のポリス。

26. 「ギリシャ人」 ギリシャ人はヘレニズム期にパレスチナに移住してきた。ギリシャ人は、勿論、ユダヤ人にとっては異邦人(Gemtile)であった。

26. 「フェニキア」 イエスの時代、フェニキアの大多数の住民は異邦人であり、船乗りや商人、漁民として生活していた。

27. 「食べ物」 神が施すもの、つまりは神の恵み。

27. 「子供たち」 イスラエルの子どもたち、即ち、ユダヤ人。

27. 「犬」 イエスの時代、ユダヤ人は異邦人のこと意地悪く犬になぞらえていたのである。

29. 「その通りだね」 イエスは女性のその熱心さに感服したことを表す。

イエス、耳が聞こえず話しのできない人を治す (7:31～37)  
(マタイ 15:29～31)

<sup>31</sup> イエスはティルス周辺の地方を去り、シドンを経由してガリラヤ湖に向かった。途中、イエスは、デカポリスという10のポリスからなる地域を通って行った。<sup>32</sup> 何人かの人たちが、イエスのところへ耳が聞こえず話しのできない人を連れてきた。人々は、この人に触れてくれるようにとイエスに懇願した。<sup>33</sup> イエスは、人々の中からこの人を連れだして、この人の耳に自分の指を差し込み、唾を吐いてそれをこの人の舌に付けた。<sup>34</sup> イエスは天を見上げて、「エファタ」、これは「開け」を意味するのであるが、と呻くように言った。<sup>35</sup> すると、この人は聞こえるようになり、ちゃんと話すのに不自由することはなくなった。<sup>36</sup> イエスは、自分が行ったことについて何も言わないようにと人々を戒めた。しかし、イエスが人々にそう言えば言うほど、人々はこのことを語るようになったのである。<sup>37</sup> 人々はすっかり驚いて、「この人がすることは良いことばかりだ。この人は耳が聞こえず話しのできない人でさえ治してしまうんだから」と言った。

31. 「シドン」 ティルスの北方にあるフェニキアの都市。

31. 「デカポリス」 ギリシャ人の植民都市で、それぞれのポリスは自治権を獲得していた。しかし、少数派としてユダヤ人も都市の内外に居住していたものと思われる。

31. 「デカポリスという10のポリスからなる地域を通って行った」 この通りだとすると、イエスは、シリアを通ってから南下して、ヘロデ・フィリポ(ヘロデ・アンティパスの兄弟)の領地を通って、デカポリス地方へ出て、そこから舟でガリラヤ湖を渡って、出発地(カフェルナウム)に戻ったということになり、何故、このような大きな迂回をせずに、シドンからまっすぐに南下してカフェルナウムに行かなかったのかという不自然さが見られる。この記述をもってマルコは、ガリラヤ及び広くパレスチナの地理に不案内であったという指摘もなされている。

34. 「エファタ」 アラム語。イエスの時代、パレスチナではアラム語(ヘブライ語やフェニキア語と同じ北西セム語)が話されていた。イエスもアラム語で話しをしていたのである。

## 第8章

### イエス、4000人に食物を与える(8:1~10) (マタイ 15:32~39)

<sup>1</sup> ある時、別の大勢の民衆がイエスの周りに集まった。彼らは何も食糧を携えていなかったの、イエスは弟子たちを呼び集めて言った。<sup>2</sup> 「僕はこの人たちに申し訳ないって思うんだ。この人たちは食べる物もないまま僕と3日間も一緒にいるんだから。<sup>3</sup> 中には遠くから来てる人たちもいる。もしお腹を空せたままで、この人たちを家に帰したら、途中で倒れちゃうかも知れない。」<sup>4</sup> 弟子たちは「ここは荒野みたいな場所ですよ。この人たちに食べさす食べ物をどこで見つかるって言うんですか」と尋ねた。イエスは弟子たちにどれくらい食糧があるかを尋ねた。弟子たちは「小さなパンが7個だけです」と答えた。<sup>6</sup> イエスは民衆を座らせた後、7つのパンを取り、感謝して、パンを裂いて弟子たちに手渡した。そして弟子たちはこれらのパンを民衆に分け与えた。<sup>7</sup> 弟子たちは小魚を少し持っていたので、イエスはこれらを取り、感謝して、小魚が民衆に渡るように弟子たちに命じた。<sup>8~9</sup> およそ4000人の民衆が食事を摂って満足したのであるが、残った食べ物で7つのおおきな籠が一杯になった。イエスは人々を立ち退かせるとすぐ、<sup>10</sup> 弟子たちと一緒に舟に乗り込み、ダルマヌタの近くの地方に行った。

10. 「ダルマヌタ (Dalmanutha)」は、ガリラヤ湖の西岸にあったと思われるが、語源は不明。尚、様々な写本で、「マガダン (Magadan)」、「Magedan(マゲダン)」、「Magdala(マグダラ)」とされている。また、マタイの並行箇所では「マガダン」となっている。ダルマヌクはマグダラの近くの地名なのかも知れない。

### 天からのしるし(8:11~13) (マタイ 16:1~4)

<sup>11</sup> ファリサイ派の人たちがやってきてイエスと議論し始めた。彼らは天からのしるしを所望したいと言ってイエスを試そうとしたのである。<sup>12</sup> イエスはうなるようにして「君らは何故いつもしるしを求めようとするんだい。君らにしるしは与えられないってことは確約できるよ」と言った。<sup>13</sup> そしてイエスは彼らの元を去ったのである。イエスは再び舟に乗り込み、ガリラヤ湖を通過して他の岸に向かった。

11. 「天からのしるし」 神から権威を持っている証拠。

11. 「天からのしるしを所望したい」 つまり、イエスの(奇跡などの)行いが神の権威によって行われているかどうかその証拠を見たい(得たい)ということ。

### ファリサイ派とヘロデのパン種(酵母)(8:14~21) (マタイ 16:5~12)

<sup>14</sup> 弟子たちがパンを持ってくるのを忘れてしまったので、舟にはパンが1つしかなかった。<sup>15</sup> イエスは弟子たちに、「気をつけなさい。ファリサイ派とヘロデのパン種(酵母)に警戒しなさい」と警告した。<sup>16</sup> 弟子たちは、「俺たちがパンを持ってないからこう言ったんだ」と互いに言い合った。<sup>17</sup> イエスは、彼らが何を考えているのか分かったので、尋ねて言った。「君らは、何故、パンを持っていないことについて言い合っているんだい。分からないのかい。君らの心はまだ閉じているのかい。<sup>18</sup> 君らの目は盲目になっていて、君らの耳は聞こえなくなっているのかい。覚えていないのかい、<sup>19</sup> 僕がたった5つのパンであの五千人の人たちに食事を提供したとき、その残りを集めたらどれだけのかごが一杯になったかを」弟子たちは「ええ」と答え、「かご12個分でした」と言った。<sup>20</sup> イエスは更に「あの四千人の人たちの為に7つの小さなパンを割いたとき、その残りを集めたらどれだけのかごが一杯になったんだい」と尋ねた。「7つです」と弟子たちは答えた。<sup>21</sup> 「僕が何を話しているのか分からないのかい」とイエスは弟子たちに尋ねた。



15. 「ファリサイ派とヘロデのパン種 (酵母) に警戒しなさい」 パン種がパン生地全体をふくらませるように、ファリサイ派の教えやヘロデの支配は人々全体に及ぶ。従って、この場合、パン種は影響力の大きい邪悪なものだとおぼえている。

18. 「君らの目は盲目になっていて、君らの耳は聞こえなくなっているのかい」 マルコ 4:12 を見よ。

#### イエス、ベトサイダで盲人を治す (8:22 ~ 26)

<sup>22</sup> イエスとその弟子たちがベトサイダに入ると、何人かの人々が一人の盲人をイエスの下に連れてきて、この男に触って欲しいと願った。<sup>23</sup> イエスはこの男の手を取り、村 (集落) の外に連れていき、そこで盲人の目に唾を付けた。イエスは盲人に手を置いて何が見えるかどうか聞いた。<sup>24</sup> この男は見上げて、「人が見えるけど、みんな歩いている木のように見えるね」と答えた。<sup>25</sup> イエスは、もう一度、この男の目に手を置いた。すると、今度はよく見えるようになった。盲人の目は治り、この男は全てをはっきり見れるようになった。<sup>26</sup> イエスは、この男に「さあ家に帰っていいよ。でも、村には行かないようにね」と言った。

22. 「ベトサイダ」 マルコ 6:45 参照。

26. 「村には行かないようにね」 この盲人だった男は村の中心から外れた集落に住んでいたと思われる。イエスは、この男に、自分が行った癒しを他の人たちに触れ回らないように戒めたのである。しかし、恐らく、この男は、村に行き自分授けられたことを多くの人たちに話したであろうことを読み手に悟って欲しいとマルコは考えたと思われる。

#### イエスとは何者か (8:27 ~ 30)

(マタイ 16:13 ~ 20、 ルカ 9:18 ~ 21)

<sup>27</sup> イエスとその弟子たちがカイサリア・フィリッピの町の近くの村に入った。彼らが歩いていると、イエスは弟子たちに「僕のことみんなは何て言っているんだい」と尋ねた。<sup>28</sup> (そこで) 弟子たちは「ある人たちは、洗礼者ヨハネかたぶんエリヤって言ってますし、別の人たちは預言者の一人って言ってますよ」と答えた。<sup>29</sup> すると、イエスは弟子たちに「でも、君らは僕を何者だと言ってらんだい」と尋ねた。(これに対して) ペテロが「あなたはメシアです」と答えた。<sup>30</sup> イエスは、自分のことは誰にも話さないように、弟子たちに注意した。

27. 「カイサリア・フィリッピ (Caesarea Philippi)」 フィリポ・カエサリア。ガリラヤ湖の北、約 40km にある Batanea の町。ヘルモン山の裾野にあり、ヨルダン川の源流の一つがある。地中海に面した港湾都市のカイサリア (カエサリア:ユダヤ・サマリア総督府があった都市で、ピラトなどの総督はここに常駐していた) とは別の都市。ヘロデ大王がカエサルから授かった地で、ヘロデ大王の死後はヘロデ・フィリッピ (フィリポ) が領有し、前 3 年に町を再建し、カエサルと自分の名を冠した名前の都市とした。

28. 「洗礼者ヨハネ」 マルコ 1:4 を見よ。

28. 「エリヤ (Elijah)」 マルコ 6:15 を見よ。

29. 「メシア」 メシアはヘブライ語で「選ばれし者」を意味する。この「選ばれし者」のギリシャ語が「キリスト」である。

29. 「あなたはメシアです」 ペテロはイエスを「神が選んだ者」と呼んだことになるが、ペテロにはその真の意味は分からなかった筈である。

#### イエス、受難について語る (8:31 ~ 9:1)

(マタイ 16:21 ~ 28、 ルカ 9:22 ~ 27)

<sup>31</sup> イエスは自分に今後起こることを弟子たちに語り始めた。イエスは「為政者たちや祭司長たち、律法学者たちは人の子をひどく苦しめるだろう。人の子は (人々に) 拒まれ殺されるだろうけれど、3 日後に蘇るだろう」と言った。<sup>32</sup> そして、イエスはその意味することを明確に説明した。ペテロはイエスをその場から連れ出して、そのような話をするのを止めるように諫めた。<sup>33</sup> しかし、イエスは (元の場所

に) 戻って弟子たちを見て、ペテロを窘めた。イエスはペテロに「サタンよ、僕から出ていけ。君は神のようにではなく他のみんなのように考えているんだ」と言った。<sup>34</sup> それからイエスは民衆と弟子たちを呼び寄せて言った。「君らの中で僕に従おうと思う人は、自分自身のことは忘れなくちゃいけない。その人は、自分の十字架を背負って僕に従わなければならないんだ。<sup>35</sup> 君がもし自分の命を救いたければ、その命を失うことになるだろうけれど、僕と福音(良き知らせ)の為にその命を捧げるなら、その命を救うことになるんだよ。<sup>36</sup> もし全世界を手に入れるにしても、自分自身をだめにするんだったら、何を得心ことになるんだい。<sup>37</sup> 自分の魂を取り戻すのと引き換えにできることって何があるんだい。<sup>38</sup> 僕のことと、これら不信仰で罪深い人々の間で話した僕のメッセージとを、恥ずかしいと思わないでね。君らが恥ずかしいと思うんだったら、人の子が聖なる天使と一緒に父の栄光を受けてやってくる時、(人の子も) 君らを恥ずかしいと思うようになるからね。

9<sup>1</sup> ここに立っている何人かの人たちは、神の王国が力強くやって来るのを見るまでは死ぬことはないって断言できるよ。」

31. 「為政者たち」 最高法院(サンヘドリン)の議員たちのことか。ローマ側は、日常に於ける些細なことを処理する権限を、サンヘドリンに与えた。

31. 「3日後」 古代の数え方では、当日から数えるので、今日の数え方では2日後ということになる。

34. 「十字架」 ローマが罪人や謀反人を処刑するのに使った最も一般的な処刑の仕方が十字架刑である。十字架刑に処せられると非常にゆっくり且つ大きな痛みを伴って死に至ることになる。

37. 「魂」 霊 or 魂

38. 「不信仰」 神ならぬ者を神として崇めること。広い意味での偶像崇拜。

## 第9章

### イエスの本当の栄光 (1:2~13) (マタイ 17:1~13、ルカ 9:28~36)

<sup>2</sup>6日後、イエスはペテロとヤコブとヨハネを連れて、高い山に登った。そこでは彼らだけであることができた。イエスは、弟子達の目の前にいたのであるが、そこでイエスは完全に変貌した姿になった。<sup>3</sup>イエスの服はこの世でどのように脱色して得られる白よりも白くなった。<sup>4</sup>そのとき、モーセとエリヤが現れ、イエスと語りあった。<sup>5</sup>ペテロはイエスに「先生、我々がここにいるのはすばらしいことです。1つは先生の為に、1つはモーセの為に、もう1つはエリヤの為に3つの住居(幕屋)を設けましょう」と言った。<sup>6</sup>しかし、ペテロと弟子たちはひどく恐れており、イエスが何を話しているのかわからなかった。<sup>7</sup>雲の影が現れて弟子たちを覆い、雲の中から「この者は私の愛する息子で、私は息子を愛している。息子の言うことに耳を傾けよ」という声が聞こえた。<sup>8</sup>この声が発せられると同時に弟子たちはあたりを見回したのだけれど、イエス以外は誰も見えなかった。<sup>9</sup>イエスと弟子たちが山を下りるとき、イエスは弟子たちに、人の子が死から蘇るまで、彼らが見たことについて何も言わないように諭した。<sup>10</sup>それで、弟子たちは、このことは自分たちだけの胸の内に納めておくことにした。しかし、弟子たちは、イエスが話した「死から蘇る」という言葉の意味については怪訝に思った。<sup>11</sup>弟子たちはイエスに「メシアが現れる前にエリヤが来る筈であると律法学者たちは言いませんでしたか」と尋ねた。<sup>12</sup>イエスは「エリヤは確かに全てが整えられた後で現れる。でも、聖書には、人の子はひどい苦しみを受け拒まなければならないとは書いてないかい。<sup>13</sup>僕は、エリヤは既にやってきていると断言できるよ。そして、聖書が言っている通り、人々はエリヤを彼らが思うがままにあしらったのさ。」

2. 「6日後」 出エジプト記 24:15~16 に、モーセがシナイ山に登ったとき、6日間雲(神の臨在を暗示)が山を覆ったという記述がある。

2. 「ヤコブとヨハネ」 ゼベダイの子のヤコブとヨハネ。マルコ 1:19 を参照。

2~7 第2ペテロ 1:18 に、このことに関する記述がある。

2. 「高い山」 フィリポ・カエサリア近くの高い山であるので、ヘルモン山が考えられる。

2. 「完全に変貌した姿になった」 イエスが姿を変えたというのは、復活後にも見られる(マルコ 16:12)。ただし、この記述は古い写本には見られない。

3. 「脱色して得られる白」 マルコ(或いはその当時の人々)は布(繊維)を脱色すれば白くなると考えたようであるが、当たり前であるが色素を除去しても白くなる訳ではない。

4. 「モーセ」 エジプトの地で奴隷状態にあったイスラエルの民を引き連れてエジプトを脱出した人物。神から十戒を授かった人物である。

4. 「エリヤ(Elijah)」 エリヤは前 899 年~850 年頃のイスラエルの預言者。このとき既に、イスラエルは南北二つの国家に分裂していた。尚、北王国はイスラエルと呼ばれ、南王国はユダと呼ばれていた。エリヤの時代、北のイスラエル王国では、多くの民がバール(Baal)神やアシュラ(Asherah)神(この二神はカナン人の男神と女神である)といった異邦の神を崇めていたとされている。尚、これらの神は、(オムリ王の息子の)アハブ王のとき、王とその后として迎えられたファニキア人(シドン人の王エトバアルの娘)であるイゼベルによって崇拝が奨励されたとされている。エリヤはこれに様々な方法で対抗したとされる。エリヤは様々な奇蹟を起こしたことで知られている。エリヤは干ばつを予言し(列王記上 17:1)、食物が底をついたときに食べ物を提供し(列王記上 17:14)、死人を甦らせ(列王記上 17:17~24)、天から火を降らせた(列王記上 18:36~38)。尚、列王記下(2:11)によると、エリヤは生きたまま天に昇ったとされ、この話によりエリヤが再び天からやって来るといふ信仰が人々に植え付けられたのであると考えられる。人々の間では、洗礼者ヨハネがエリヤではないかもされたし、イエスもエリヤであるとされたようである。

5. 「住居(幕屋)」 イスラエルの神は、イスラエルの民がカナンの地に定住するまで、幕屋(テント)と共に移動し、そこが神殿として機能した。

5. 「3つの住居(幕屋)を設けましょう」 これは、ペテロはこの素晴らしい状況が続くように願ったから、こう言ったのである。

7. 「雲の影が現れて」 神が降りてくることを象徴的に表す古よりの表現。

7. 「息子の言うことに耳を傾けよ」 七十人訳申命記 18:15 にある。

10. 「怪訝に思った」 弟子達はイエスをユダヤの解放者として捉えていたので、「死から蘇る」というイエスの言葉は理解できなかったのである。因みに、ユダヤ民族(イスラエルの民)には死後の世界という概念は元来持ち合わせてはいなかった(個人的な復活よりもイスラエルという国家の復興が大切であった)が、ヘレニズム期以降にこの概念が持ち込まれることになる。しかし、イエスの時代のサドカイ派にとって、死後の世界も蘇りもあり得ないことであった。

11. 「メシアが現れる前にエリヤが来る筈である」 七十人訳マラキ書 4:4

12. 「聖書」 旧約聖書(七十人訳聖書)を指す。

13. 「人々はエリヤを彼らが思うがままにあしらった」 エリヤは洗礼者ヨハネとして再臨したが、殺害されてしまったということをマルコは訴えている。

#### イエス、悪霊に取り憑かれた少年を治す(9:14~29)

(マタイ 17:14~20、ルカ 9:37~43a)

<sup>14</sup> イエスと3人の弟子たちが戻って来ると、大勢の大勢の民衆が他の弟子たちの周りに集まっていた。(そして)律法学者が弟子たちと議論していた。<sup>15</sup> 大勢の民衆はイエスを見ると本当に驚き、イエスに挨拶しようと急いでやってきた。<sup>16</sup> イエスは「何について議論しているんだい」と尋ねた。<sup>17</sup> 群衆の中の誰かが言った。「先生、倅をあんたのところに連れてきた。悪魔が倅にものを言えなくしてるんです。<sup>18</sup> 悪魔が倅を襲うといつも、倅は地面に叩き付けられ口から泡を吹き苦痛で歯ぎしりさせられるんです。それで、あいつはガチンガチンになっちゃうんです。俺はあんたのお弟子さんたちに悪魔を追い出して欲しいと頼んだんだけど、でもできませんでした。<sup>19</sup>(そこで) イエスは弟子たちに「君らには信仰がないのかい。いったいどれだけの間、僕は君らと一緒にいなければならないんだい。どうして僕は君らに耐えなくちゃいけないんだい。その少年を僕のところ連れて来なさい」と言った。<sup>20</sup> 弟子たちは少年を連れてきたのであるが、悪魔がイエスを見ると直ぐ、悪魔は少年を激しく痙攣させた。少年は倒れて泡を吹きながら地面を転がり始めた。<sup>21</sup> イエスは少年の父親に「このようになってどれくらい経つんだい」と尋ねた。父親は答えた。「倅が小さい頃からです。<sup>22</sup> 悪魔はしょっちゅう倅を火の中や水の中に投げつけて殺そうとしたんです。どうか憐れんでやって、できるんだったら俺たちを助けて下さい。」<sup>23</sup> イエスは、「なぜ『できるんだったら』って言うんだい。信じる者は何でもできるんだよ」と答えた。<sup>24</sup>(すると)直ぐに少年の父親は「信じるよ。もっと信じれるように、どうか助けてくれ」と叫んだ。<sup>25</sup> 民衆がどんどん集まっているのを見たイエスは、少年を口を聞けなく耳も聞こえなくしていた悪霊に対して厳しく話した。(そして、)イエスは「この子から出て行け。もうこの子を煩わすんじゃない」と言った。<sup>26</sup>(すると)その(悪)霊は悲鳴を上げて、少年を激しく痙攣させた。そして、悪霊は少年から出て行った。少年は死んだようだった。実際、(それを見た)殆ど全ての人が少年は死んでると言った位である。<sup>27</sup> しかし、イエスは少年の手を取り、彼を起き上がらせた。<sup>28</sup> イエスと弟子たちが家に帰り彼らだけになったとき、弟子たちはイエスに「どうして俺たちには悪魔を追い出せなかったんですかね」と尋ねた。<sup>29</sup>(そこで)イエスは「祈りによってのみ悪魔の類は追い出すことができるんだよ」と答えた。

18. 「倅は地面に叩き付けられ口から泡を吹き苦痛で歯ぎしりさせられる」 少年はてんかんを患っていたと思われる。

18. 「でもできませんでした」 マルコ 6:13 では、イエスから宣教の為に派遣された弟子たちは、多くの悪霊を追い出し、多くの病人を治したとされているのであるが。

23. 「信じる者は何でもできるんだよ」 マルコ 2:5 を参照すること。イエスが人々の病を治す力はその人々の信仰によって発揮されるのである。

#### イエス、再び、自らの死について話す(9:30~32)

(マタイ 17:22,23、ルカ 9:43b~45)

<sup>30</sup> イエスは弟子たちと一緒に(その町を)去ってガリラヤに向かって旅立った。イエスは誰にも知られなくなかった。<sup>31</sup> というのは、イエスは、弟子たちに、人の子を殺そうとする人々に引き渡されるであろうということを教えていたからである。しかし、(死後)3日後にイエスは復活するのだった。<sup>32</sup> 弟子たちにはイエスが意味することが理解できなかった。そして、(その意味するところを)イエスに怖くて尋ねることができなかつたのである。

30. 「ガリラヤに向かって」 フィリポ・カエサリアから約 40km 南下するとカフェルナウムの町に到着できる。

32. 「弟子たちにはイエスが意味することが理解できなかった」 このことはマルコが一貫して述べていることである。

誰が一番偉いのか (9:33 ~ 37)  
(マタイ 18:1 ~ 5、ルカ 9:46 ~ 48)

<sup>33</sup> イエスと弟子たちはカファルナウムにあるイエスの家に戻った。一行が家の中にいたとき、イエスは弟子たちに「君らは道すがら何を論じていたんだい」と尋ねた。<sup>34</sup> 弟子たちは、彼らの中で誰が一番偉いのか論じていたのであったので、弟子たちは(イエスの質問に)答えなかった。<sup>35</sup> イエスが座ってその周りに 12 弟子を集めた後、イエスは「栄誉を得たいと思うなら、僕<sup>しもべ</sup>となって他の者に仕えなさい」と言った。<sup>36</sup> そして、イエスは子供をその近くに立たせ、腕にその子を抱いて言った。<sup>37</sup> 「僕の為に、この子供でさえ受け入れる人は、僕を受け入れる人だよ。そして、僕を受け入れる人は僕を遣わした方を受け入れる人なんだよ。」

33. 「カファルナウムにあるイエスの家」 カファルナウムはイエスが伝道を開始した町である。イエスは、ある時期から、この町に住居(拠点)を構えることになったとも考えられる。

34. 「誰が一番偉いのか論じていた」 弟子たちは、イエスをユダヤ民族の解放者と捉えていたので、イエスがローマ帝国からユダヤを解放してユダヤ民族の王国を築いた後には、それなりのポストに就けると考えていたと思われる。そして、その中でトップ(国王になるのは勿論、ダビデの末裔であるイエスであるが)になるのは誰なのか話し合っていたものと思われる。

尚、ルカによると、弟子たちのこの議論は、最後の晩餐のときに起きたとされる。

35. マルコ 10:43 ~ 44 にも記されている。身分の別なく社会(共同体)の為に奉仕すべしとイエスは説いている。マタイ 20:26 ~ 27, 23:11 ~ 12, ルカ 9:48, 22:26 を見よ。

敵対しない者は見方である (9:38 ~ 41)  
(ルカ 9:49, 50)

<sup>38</sup> ヨハネは言った、「先生、先生の名前を語って人々から悪魔を追い出してる男がいます。でも、そいつは俺たちの中の者じゃないです。俺たちはそいつに止めるように言ったのですが。」<sup>39</sup> イエスは弟子たちに語った。「止めさせなくてもいいよ。僕の名前で不思議なことを行う人は、直ぐに態度を変えて僕の悪口を言うことはできないだろうから。<sup>40</sup> 僕に反対しない人は誰でも僕の見方だよ。<sup>41</sup> そして、僕の名前で一杯の水を君らに飲ませてくれる人は誰でも、まさに僕の仲間(弟子)ってことになるから、きちんと報われるだろうね。」

41. 「報われる」 水を飲ませてくれたことに対して、報償が与えられるということ。

罪への誘惑 (9:42 ~ 50)  
(マタイ 18:6 ~ 9、ルカ 17:1, 2)

<sup>42</sup> 「僕に従う小さな者たちの内の一人に罪を犯させる奴らは恐ろしい目に遭うことになるよ。そういう奴らは、首に大きな重しを付けて海に放り込まれた方がいい位なんだ。<sup>43 ~ 44</sup> だから、もし君らの片方の手が君らに罪を犯させるなら、その手を切りなさい。両手があっても、決して抜け出すことができない地獄で炎の中に放り込まれるよりは、手が不自由でも命に至る方がましなんじゃないのかい。<sup>45 ~ 46</sup> もし、君らの片方の足が君らに罪を犯させるなら、その足をぶった切りなさい。両足があっても地獄に落とされるよりも、足が不自由でも命に至る方がましなんじゃないのかい。<sup>47</sup> もし、君らの片方の目が君らに罪を犯させるなら、そっちの目を取っちゃいなさい。両目があっても地獄に落とされるよりも、片目であっても神の王国に入る方がましなんじゃないのかい。<sup>48</sup> 地獄では、蛆虫はけっして死ぬことはないし、炎が消えることもけっしてないんだ。<sup>49</sup> (地獄じゃあ) みんな炎と一緒に塩を振りかけられなくちゃいけない。<sup>50</sup> 塩はいいものなんだ。でも、塩に塩のような味がなかったとしたら、どんなふうにして塩を再び塩辛いものにできるんだい。(だから)君らは自分の中に塩を持って、お互いに平和に暮らして行きなさい。」

42. 「小さな者たち」 子供たち。

42. 「罪を犯させる」 実際に罪を犯すのは、子供の方では勿論ない。

42. 「大きな重し」 ラバに引かせて回す大きな挽き臼を指す。

43～44. 「地獄」 ゲヘナ (gehenna)。ヒンノムの谷 (ge-hinnom) がなまってゲヘナと呼ばれるようになった。ヒンノムの谷とは、元々、エルサレムの南西に伸びる谷 (この谷がユダ族とベニヤミン族の境界線の一部になっていた) で、ここではユダ王国時代に、聖なる高台 (地方聖所) が置かれ、異邦のモレク神に生贄として捧げる為に子供達が焼き殺された (歴代誌下 28:3,33:6、エレミヤ書 7:31,32:35)。しかし、ヨシヤ王の時代に、聖なる高台は破壊され、この習慣は廃止された (エレミヤ書 7:32,19:6)。この忌まわしい過去からヒンノムの谷を地獄に喩えているのである。

45～46. 「足」 男性生殖器の婉曲的表現とする見方が可能。

48. 「蛆虫はけっして死ぬことはないし、炎が消えることもけっしてないんだ」 七十人訳イザヤ書 66:24。

49. 「炎と一緒に塩を振りかけられなくちゃいけない」 神に穀物を捧げるときは塩を振りかける必要があった (レビ記 2:13)。

50. 「君らは自分の中に塩を持って、お互いに平和に暮らして行きなさい」 塩は友情と契約のしるしであった (民数記 18:19、レビ記 2:13、歴代誌下 13:5)。

## 第10章

### 離婚について (10:1~12)

(マタイ 19:1~9)

<sup>1</sup> イエスは(ガリラヤの地を)去って、ユダヤとヨルダン川の向こう側の地(即ち、ペレア)に行った。再び、大勢の民衆がイエスの処にやって来たのであるが、イエスはいつものように人々に教えを説いた。<sup>2</sup> 何人かのファリサイ派の者達がイエスを試そうと、イエスの処に近づいてきて、人がその妻と離婚するのは(モーセの律法に照らして)正しいかどうか質問した。<sup>3</sup>(そこで)イエスは(逆に)彼らに、「モーセの律法はそのことについて何て言ってるんだい」と尋ねた。<sup>4</sup> ファリサイ派の者たちは、「モーセは離縁状を書いて妻に送りつけることを許してるが」と答えた。<sup>5</sup> イエスは言った、「モーセがこの律法を君らに与えたのは、君らがあんまり思いやりに欠けるからなんだよ。<sup>6</sup> でも、初めに神は男と女を造ったんだけど、<sup>7</sup>それは、両親から離れて結婚するからなんだよ。<sup>8</sup> 男はその妻と一緒にになって一個の人間になれるんだ。結婚後は、もう夫婦は二人ではなく一つの身なんだ。<sup>9</sup> そして、神が結びつけた二人を引き離すことは誰もすべきじゃないんだ」。<sup>10</sup> イエスとその弟子たちが(宿泊先の)家に戻った後、弟子達はイエスにイエスが話したことについて尋ねた。<sup>11</sup> イエスは弟子たちに話した。「妻を離縁して他の誰かと結婚するというのは妻に対する背信なんだ。<sup>12</sup> 夫と離婚して再婚するのも夫に対する背信なんだよ」。

1 これより、イエスはガリラヤの地を去って、エルサレムへ旅立つことになる。

1. 「ユダヤとヨルダン川の向こう側の地」 イエスはユダヤとペレアの双方の地域に行ったのか、ユダヤの東にあってヨルダン川の向こう側になるペレアの地に行ったのか、そのどちらかは不明である。

4. 「モーセは離縁状を書いて妻に送りつけることを許してる」 申命記 24:1~4 では、恥ずべき行為をした妻を夫は離縁できるとしている。ただし、この女が再婚して、更にその後一人身になったとしても、元の夫はこの女と再婚することはできないとしている。そして、その理由は、この女が汚れているからだとしている。

6. 「初めに神が男と女を造った」 創世記 1:27 では、神は人間を自分の姿にかたどって、男と女に創造したとしている。

7. 「両親から離れて結婚する」 創世記 2:23~24 では、女は男のあばら骨から造られたから、男は父母を離れて女と結婚するとしている。尚、創世記 2章に於ける人間の創造主は Yahaweh(主)であり、創世記 1章では創造主は神となっていて、創世記には創造物語が2つ別個に記されている。

11. 「背信」 通常は、「姦淫」と訳される。

11・12 パウロも、第1コリント 7:10~11 で、離婚を認めていない。イエスもパウロもモーセと異なり、結婚がいかに大切かを説いていることになる。

12 妻が夫に離縁状を叩き付けるというのは男性優位のユダヤ人社会ではあり得ない。このような状況があり得るヘレニズム文化の影響を受けた為に、こうした記述ができるのだと思われる。ローマでも妻が夫を離縁する権利を認めている。

### イエス、幼い子供たちを祝福する (10:13~16)

(マタイ 19:13~15、ルカ 18:15~17)

<sup>13</sup> ある人たちが、イエスに手を当てて貰って祝福して貰おうと、彼らの子供たちをイエスの処に連れてきた。しかし、イエスの弟子たちは、人々にイエスを煩わせないように注意した。<sup>14</sup> イエスは、これを見て怒って言った。「子供たちを僕のところに来させなさい。あの人たちを止めようとしなさい。こういう幼い子供たちのような人たちが神の王国の国民なんだよ。<sup>15</sup> 君らは子供が(素直に)受け入れるように受け入れなければ、神の王国になって入れやしないんだよ」。<sup>16</sup> そして、イエスは子供たちを腕に抱いて子供たちに手を当てて祝福した。

14. 「こういう幼い子」 イエスは、力も賢さも持ち合わせていない人間という意味で幼子を例示している。そして、そういう人間が神の王国、つまり天国に入れるのだと説いているのである。

### 金持ちの男 (10:17~31)

(マタイ 19:16~30、ルカ 18:18~30)

17 イエスが道を歩いていると、一人の男が駆け寄ってきた。この男は跪き、イエスに「大先生、永遠の命を得るには何をすれば良いでしょうか」と尋ねた。18 イエスは答えた。「君は何故僕のことを大先生なんて呼ぶんだい。偉大なのは神様だけなんだよ。19 君は、『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、いかさまをするな、父母を敬え』っていうモーセの戒めは知ってるね。20 すると、その男は、「先生、これらの戒律は若い頃より守ってきました」と答えた。21 イエスはその男の顔をしっかりと見た。そしてイエスはその男が気に入ったので言った、「まだ必要なことが1つあるんだ。君が持っているものを全て売り払って、そのお金を貧しい人たちに施しなさい。そうすれば君は天国で豊かになれるよ。それから僕について来なさい」。22 男はイエスがこういったのを聞いて、暗く悲しい気分になった。というのは、彼は財産を沢山持っていたからである。23 イエスは辺りを見回して弟子たちに「金持ちが神の王国に入るのはとても難しいんだ」と言った。24 弟子たちはこの話しを聞いてショックを受けた。それで、イエスが弟子たちに再び語った。「神の王国に入るのはもの凄く難しいんだ。25 金持ちが神の王国に入るよりも駱駝が針の穴を通る方が易しい位なんだ」。26(それで) イエスの弟子たちは更に驚いた。彼らは互いに「誰が救われるんだろう」と言い合った。27 イエスは弟子たちを見つめて「人間にはできないこともあるけれど、神様は何でもできるんだ」と言った。28 ペテロは「俺たちは全てを捨てて従ったってことは覚えてますよね」と答えた。29 イエスはペテロに言った。「僕と福音の為に、家や兄弟姉妹や両親、子供たち、土地を捨てた者は誰でも30 報われるっていうのは確かなことなんだよ。この世でも、そういう人は、迫害されるだろうけれど、何百倍もの家や兄弟姉妹や母や子供たちや土地が与えられ、来るべき世界では永遠の命を持つようになるんだ。31 でも、今先頭にいる人の多くは最後になり、今最後にいる人の多くは先頭になるんだよ」。

17. 「男」 マタイの並行箇所 (19:20) では「若い男 (青年)」となっている。また、ルカの並行箇所 (18:18) では、この男は地位の高い男とされている。

17. 「永遠の命」 イエスの時代、人々は永遠の命を得ることを望むようになっていた。ユダヤ人がこのような考えを持つようになったのは、ヘレニズム文化の影響であると思われる。ただし、サドカイ派の者たちは、死後の世界や永遠の命、復活などは信じなかった。モーセの律法に書かれていない為である。

19. 「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、いかさまをするな、父母を敬え」 出エジプト記 20:12~16。尚、モーセの十戒は、順番に、Yahwehのみを神とせよ・偶像を造るな・神の名をみだりに唱えるな・安息日を守れ・父母を敬え・殺すな・姦淫するな・盗むな・偽証するな・隣人の家をむさぼるな (これがいかさまをするなという意味なのか)、である (七十人訳でもこうである) から、イエスは (つまりマルコは) 最初の4つの戒めを割愛していることになる。

23. 「金持ちが神の王国に入るのはとても難しい」 いくつかの写本では「富みに頼っている人は神の王国に入るのは難しい」とされているが、こちらの表現は、金持ちが天国に入れないのは困ると考えた者たちが、後世になって書き直されたものと思われる。

マルコが福音書を著した少し前まで、ユダヤの資産家階級は聖都エルサレムに住んでいた訳であるが、第1次ユダヤ戦争により彼らは資産も証文も悉く失い、生命さえ失うことになった。資産があっても哀れな末路をたどることがマルコにまざまざと見せつけられたのである (マルコは崩壊後のエルサレムを見てはいない筈)。

25. 「駱駝が針の穴を通る」 エルサレムの城門に「針の穴」と呼ばれる門があり、そこは荷物を背負っていない駱駝が辛うじて通れる位の狭い門だったという説がある。しかし、そのような狭い城門があったという証拠は何もない。このような説を好んで唱える者 (金持ち乃至は金持ちを志向する者) は、金持ちであっても天国に行けると考えたい者たちである。このようなことを説く牧師などにはよくよく注意した方が良い (というかそもそもそういう輩とは関わりを持つべきではない)。

25. 「金持ちが神の王国に入るよりも駱駝が針の穴を通る方が易しい」 この記述は、マタイやルカの並行箇所にもこの通り記されている。

イエス、自らの死と復活を語る (10:32~34)

(マタイ 20:17~19、ルカ 18:31~34)

32 イエスは弟子たちをエルサレムに (向けて) 連れて行ったので、弟子たちは戸惑い、イエスに従う別の者たちは恐れをなした。再度、イエスは弟子たちを傍らに集めて、自分に起こることになることを語っ



た。イエスは言った。<sup>33</sup>「今、僕らはエルサレムに行く途中にあるんだ。エルサレムでは人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡されることになるんだ。彼らは、人の子に死刑の判決を言い渡し、異邦人たちに引き渡すつもりなんだ。<sup>34</sup>異邦人たちは、人の子を笑いものにして唾をかけるだろう。彼らは人の子を殴って殺すだろう。でも、3日後に人の子は蘇ることになるんだ。」

32. 「戸惑い」 急にエルサレムに登ることになった為か?

32. 「恐れをなした」 ガリラヤやペレアとは異なり、エルサレムはローマ総督が支配する地域である。

33. 「人の子」 旧約聖書では「人の子」というのは単に「人」を指すのが大部分であるが、ダニエル書(7:13)では、神が送る救い主(メシア=神に選ばれし者)を指す。

33. 「律法学者」 モーセの律法を主にシナゴグで人々に教える教師で、ファリサイ派が多かった。しかし、ファリサイ派の教師がシナゴグで人々に律法を説くようになるのは、第1次ユダヤ戦争以降のことである。

33. 「異邦人」 イエスの時代、ユダヤを支配していたローマ人(ローマの軍属)を指す。

### ゼベダイの子ヤコブとヨハネの願い(10:35~45)

(マタイ 20:20~28)

<sup>35</sup>ゼベダイの子であるヤコブとヨハネがイエスのところに近寄ってきて「先生、お願いがあるんですが」と申し出た。<sup>36</sup>イエスは二人が何を望んでいるのか尋ねたので、<sup>37</sup>二人は「先生が栄光の座に着いたとき、俺たちをその左右の座に着けさせてください」と願い出た。<sup>38</sup>(そこで)イエスは二人に「君らは何を願ってるのか本当に知らないんだね。僕がまもなく飲む杯を飲み、僕が受けなくちゃいけない洗礼を受けることができるのかい」と言った。<sup>39</sup>「できますとも」とヤコブとヨハネは答えた。(これに)イエスは言い返した。「確かに、君らは僕が飲まなくちゃいけない杯を飲み、僕が受けなくちゃいけないように洗礼を受けるようになるだろうけれど、<sup>40</sup>でも、僕の左右の座に誰が着くのかは、僕が口をはさむことじゃないんだ。それを決めるのは神様なんだよ。」<sup>41</sup>他の10人の弟子たちはこのことを聞いて、ヤコブとヨハネに腹を立てた。<sup>42</sup>しかし、イエスは(そういう)弟子たちを呼び集め言った。「君らは、王を名乗って周りの人々に指図するのが好きな異邦人たちがいるのは知っているよね。そして、その中で最も偉い奴らが全権力を握っていて人々を支配しているよね。<sup>43</sup>でも、彼らのようにしてはいけないよ。君らが偉くなりたいと思ったら、他のみんなに仕える人にならないといけないよ。<sup>44</sup>そして、君らが一番偉くなりたかったら、みんなの僕しもべにならないといけないんだ。<sup>45</sup>人の子は僕の主しもべあるじとしてやってくるんじゃないよ、自分の命を捧げて多くの人たちを救うような僕しもべとしてやってくるんだよ。」

37. 「先生が栄光の座に着いたとき」 ヤコブとヨハネはイエスがエルサレムに上り、ユダ王国を再建しその王の座に着くと考えていたとしていることになる。

37. 「左右の座」 国王を補佐する役職の地位。

38. 「僕がまもなく飲む杯を飲み」 杯は受難を表す。

38. 「僕が受けなくちゃいけない洗礼を受ける」 イエスが十字架刑に処せられることを示唆している。杯と洗礼は同様の意味。

43. 「でも、彼らのようにしてはいけないよ」 イエスはこの世を支配する権力者と関係を持つことははっきり拒んだのである。

43. 「偉くなりたい」 偉大な存在になりたい。

44. 「僕」 実際には「下僕」や「召使い」というような意味合いよりも「奴隷」を意味する。勿論、家事を行う奴隷も存在した。イエスの時代、奴隷の子として生まれた者は奴隷となった。また、戦争捕虜も奴隷とされた。また、生活の為に自分の身を売って奴隷となった者もいた。ただ、教養のある奴隷もいて、主の子弟の教育にあたった者もいた。しかし、奴隷には自由がなく、主は奴隷をどのように扱ってもよかった。また、奴隷が30歳になると自由の身になれたし、金を支払って自由の身になることもできた。

45. 「命を捧げて」 「命を身代金として与えて」が原意。この場合の「身代金」とは戦争捕虜や奴隷を釈放してもらう為に支払う金を指す。

イエス盲人バルティマイを治す (10:46~52)

(マタイ 20:29~34、ルカ 18:35~43)

<sup>46</sup>(その後) イエスと弟子たちはエリコに行ったのであるが、一行がそこを去るとき、大勢の民衆が従った。(途中) ティマイの子で、バルティマイという名の盲人の乞食が道端に座っていた。<sup>47</sup> ナザレのイエスであると聞くと、この男は「ダビデの子イエスなんだろう、俺を憐れんでくれ」と叫んだ。<sup>48</sup> 多くの人々がこの男に(叫ぶのを) 止めさせようとしたのであるが、男は更に大声を上げて、「ダビデの子なんだろう、俺を憐れんでくれよ」と叫んだ。<sup>49</sup>(そこで) イエスは立ち止まって、「あの人を呼んできて」と言った。人々は盲人の男を呼び出して「恐れることはない。こっちに來い。あの人がおまえのことを呼んでるぞ」と言った。<sup>50</sup>(そこで) 男は上着を脱いで、飛び上がってイエスのところへ走ってきた。<sup>51</sup> イエスは「僕に何をしてもらいたいんだい」と尋ねた。盲人の男は「先生、俺は目が見えるようになりたいんだ」と答えた。<sup>52</sup>(それで) イエスは男に「行っていいよ。君の信仰が君の目を治したんだよ」と言った。(すると) 直ぐにその男は目が見えるようになり、男はイエスと一緒に旅立って行った。

46 マルコ及びマタイではイエスの一行がエリコを去るときに、道端で癒しを求める盲人の乞食に出会うということになっているが、ルカでは、一行がエリコに近づくときにこの乞食(名前は記されていない)に出会うというように書き換えられている。尚、マタイでは二人の盲人を治す話に書き換えられていて、盲人たちの名前は記されていない。

46. 「エリコ (Jericho)」 死海に注ぐヨルダン川河口から北西約 15km にあった町で、海拔 -250m の低地にあった。エリコの位置はエルサレムからはその北東約 50km になる。エリコの町は(旧約) 聖書にも登場し、モーセの後を継いだ指導者ヨシュア(因みにイエスのヘブライ語名がヨシュアである) がヨルダン川の東から侵入して、エリコを崩壊させたとある。しかし、発掘の結果、ヨシュアの時代(前 13 世紀中頃とされている) にエリコの町が崩壊したような形跡は見られない。ヨシュアの時代の遙か以前にエリコの町は既に崩壊していたことが現在分かっている。

46. 「バルティマイ (Bartimaeus)」 マルコ福音書では、イエスが癒した人で名前の記述がある唯一の人物である。その名が福音書に記されているバルティマイなる人物はイエスの弟子になり、初代教会では名が知られた人物であったと考えられる。

尚、バルティマイ (bar Timae) とは、テマイの子という意味である。

47. 「ダビデの子」 バルティマイはイエスをユダヤの民が待ち望んでいた救世主であると思ったから、このように呼んだのであるとマルコはしている。イエスの時代、ユダヤ人は、自分たちを支配する異邦人たちから自分たちを解放してくれる救世主が出現することを待ち望んでいたのである。そして、この救世主はダビデの子孫から出現すると考えていたのである。バルティマイはイエスに従う一般民衆の気持ちを代弁しているのである。

51. 「先生」 原語はアラム語に於けるラビ(私の先生、私の主)の意味。

## 第 11 章

### エルサレム入城 (11:1 ~ 12)

(マタイ 21:1 ~ 11, ルカ 19:28 ~ 40、ヨハネ 12:12 ~ 19)

<sup>1</sup> イエスと弟子たちはオリーブ山の近くにあるベトファゲとベタニアまでやってきた。一行はエルサレムに近づいたので、イエスは先に二人の弟子を使いに出した。<sup>2</sup> イエスは二人に言った。「次の村まで行きなさい。村に入ると直ぐ、まだ誰も乗せたことのない子ロバがいるのが分かるからね。そのロバを繋いでいる綱をほどいてここに連れてきなさい。<sup>3</sup> もし、誰かがなぜそんなことをするんだと尋ねたら、『<sup>あるし</sup>主が必要なんです。主は直ぐに戻しますから』と言いなさい」。<sup>4</sup> 弟子たちはその場を去り (指示された村に行き) 通りに面した (家の) 戸の傍に繋がれているロバを見つけた。二人が綱をほどいていると、<sup>5</sup> (そこに) 立っていた何人かの人たちが「おまえら、どうしてそのロバの綱をほどくんだ」と言った。<sup>6</sup> 二人はイエスが言った通りこの人たちに説明したので、この人たちは二人に (綱をほどくのを) 許した。<sup>7</sup> (そして) 二人の弟子たちはそのロバをイエスのもとに連れてきた。彼らはロバの背に自分たちの服をかけたので、イエスは (ロバの背に) 乗った。<sup>8</sup> 多くの人たちが彼らの服を道に敷き、別の人たちは野原から枝を切ってきてそれを道に敷いた。<sup>9</sup> イエスの前後にいて、イエスに付いてきた人々は口々に叫んだ。「我々を救い給え、主の名前でやって来る者に祝福を。<sup>10</sup> 我らが祖ダビデの来るべき王国に祝福を。天にいます神よ、我々を救い給え」。<sup>11</sup> イエスは、エルサレムに入ると、神殿に行き、その全ての様子を見回した。しかし、日も暮れようとしていたので、<sup>12</sup> 弟子と共にベタニアに引き返した。

1. 「オリーブ山」 エルサレムの東約 1km にある山 (丘)。オリーブの成長には適した山である。ラビの伝承によると、ノアが放した鳩がオリーブの枝を加えた戻ったとき、このオリーブの枝はオリーブ山のものだったということになっている。オリーブ山の西斜面はゲッセマネ (ヘブル語で「油を絞る」に由来) と呼ばれている。エルサレムへの巡礼者は市内に宿泊することはできなかったので、オリーブ山に宿営したものも多かったと思われる。また、オリーブ山からは、ここがエルサレム市街地より 100 ~ 150m 高いので、エルサレムの市内を見通すことができるし、エルサレムに接近する者も監視することができる。

1. 「ベトファゲ (Bethphage)」 「(熟していない) 無花果の家」の意。エリコからエルサレムに至る街道上 (オリーブ山の上) にあった小さな集落と考えられるが、その正確な位置は不明である。

1. 「ベタニア (Bethany)」 エルサレムの東約 3km (ヨハネ 11:18 で、エルサレムから 15 スタディオンの距離ということになっている) で、オリーブ山の東の斜面にあった小さな集落。エリコからエルサレムに至る街道を抜けて、オリーブ山の麓を行くとベタニアに抜けることができる。

1. 「一行はエルサレムに近づいた」 エリコから歩いて来た場合、エルサレムに先ず接近し、更に東南に進むとベタニアに達するから、マルコの記述は実際の地理とは若干異なる。

2. 「ロバ」 ユダヤの民は、乗り物として、或いは荷物の運搬用として、馬や駱駝よりもロバを用いた。ロバは挽き臼を回すのにも用いられた。

7. 「イエスは (ロバの背に) 乗った」 ゼカリヤ書 9:9 に、王はエルサレムに雌ロバの子であるロバに乗ってやって来るとある。

8. 「服を道に敷き」 王を迎えるしきたりを表す。列王記下 9:13 参照。

9. 「我々を救い給え」 「Hosanna」 (ヘブル語で「我々を救い給え」の意)。詩編 118:25 にある。

11. 「イエスは、エルサレムに入ると」 イエスがエルサレムに入ったのは日曜日である。

### イエス、無花果の木を呪う (11:12 ~ 14)

(マタイ 21:18,19)

<sup>12</sup> 翌朝、イエスと弟子たちはベタニアから出て行ったのであるが、イエスは空腹であった。<sup>13</sup> イエスには遠くに葉を生い茂らせた無花果の木が 1 本あるのが見えたので、その木に無花果 (の実) があるかどうか見に行った。しかし、無花果の季節ではなかったため、その木には実がなっていなかった。<sup>14</sup> それでイエスはその無花果の木に向かって「もう、この木から実を食べる人は絶対いないんだよ」と言った。弟子たちはイエスがこういうのを聞いた。

12. 「翌朝」 月曜日の朝。

13. 「無花果」 無花果の実は年に1~2回なる。

13. 「その木には実がなっていなかった」 無花果の木は神殿乃至はイスラエルの喩えである。

14. 「もう、この木から実を食べる人は絶対いないんだよ」 マタイ福音書の並行箇所では、イエスはこの無花果の木に対して「今後、実がならないように」と言い、こう言った途端無花果の木はすっかり枯れてしまったと記されており、次いで、何故無花果の木がたちどころに枯れてしまったかを尋ねた弟子たちに対して、信仰があれば何でも可能であるという主旨の言葉をイエスは語ったと記されている。マルコは、主なるイエスがイスラエル(ユダヤ)の民に実(悔い改め=神に立ち帰ること)を求めたが、イスラエルの民はイエスを拒んだ結果、イスラエルの民は神から見放される(事実として、マルコの時代には、ユダヤ戦争の結果、都のエルサレムは崩壊している)ことを、この無花果の木を呪うという話にしたのであるが、マタイは、マルコの意図を理解することが出来なかった為か、これを全く無視して、信仰があれば全てが可能となるという話に書き換えているのである。

#### 神殿でのイエス (11:15~19)

(マタイ 21:12~17、ルカ 19:45~48、ヨハネ 2:13~22)

<sup>15</sup> イエスと弟子たちがエルサレムに到着すると、イエスは神殿内に入って行き、売買をしていた全ての人を追い出し始めた。イエスは両替商のテーブルや鳩を売っている者たちの椅子をひっくり返した。

<sup>16</sup> イエスは神殿内で品物を運ぶことを誰にもさせたくなかったのである。<sup>17</sup> それからイエスは人々に教えを説いて「聖書は『私の家は、国の全ての民が礼拝する場所と呼ばれなければならない。しかし、あなたがたは私の家を盗賊の隠れ家にしてている』と言ってるよ」と言った。<sup>18</sup> 祭司長と律法学者たちはイエスが言ったことを耳にしたので、イエスを殺す方法を算段し始めた。彼らはイエスを恐れていたのである。なぜならば民衆はイエスの教えに感服していたからである。<sup>19</sup> その日の夕方、イエスと弟子たちは都から外に出て行った。

15. 「両替商」 過越しの祭りや他の祭日には地方から大勢のユダヤ人がエルサレムに登ってきた。神殿では、神へ犠牲の動物と穀物を捧げることになっていた。犠牲の動物を捧げるときは、和解の為か贖罪の為かなど何の為に捧げるかで捧げる動物の種類は異なっていた(レビ記 3:1~13)。ここで犠牲の動物を売る商人が神殿内の庭(「異邦人の庭」)の外にそれぞれ店を構えていた。この庭には異邦人だけが入ることが許されており、そこには地方から出てきたユダヤ人を相手に、神殿内で使える特殊なコインに両替する両替商がいたのである。因みに、このコインは人々が神殿税を納めるときにも必要となった。両替商は、しばしば、適正な交換レートで両替を行わなかった。

19. 「その日の夕方」 月曜日の夕方。

#### 無花果の木の教訓 (11:20~26)

(マタイ 21:20~22)

<sup>20</sup> 翌朝、弟子たちは前に見た無花果の木を通り過ぎたのであるが、彼らは無花果の木が完全に枯れているのに気がついた。<sup>21</sup> ペテロは無花果の木に対してイエスが言ったことを思い出した。それで、ペテロは言った。「先生、見てくれ。あんたが呪った無花果の木はすっかり枯れているよ」。<sup>22</sup> イエスは弟子たちに話した。「神を信じなさい。<sup>23</sup> もし、君らに信仰があって神を疑わないんだしたら、この山に向かって、立ち上がって海の中に飛び込むように命じこともできるし、(命じたら) そうなるよ。<sup>24</sup> 君らに信仰がありさえすれば、祈りの中で求めたものは全て君らの物になるんだよ。<sup>25~26</sup> 君らが立ち上がって祈るときはいつでも、他の人が君らにしたことを許さなければならないよ。そうすれば天国の神様も君らの罪を許してくれるよ」。

20. 「翌朝」 火曜日の朝。

24. 「信仰」 神への信頼。

25~26. 「立ち上がって祈る」 イエスの時代、人々は神殿や集会所(シナゴグ)で神を礼拝したが、立ち上がって腕を上げて拝するのが伝統的作法であった。

#### イエスの権威 (11:27~33)

(マタイ 21:23~27、ルカ 20:1~8)

<sup>27</sup> イエスと弟子たちはエルサレムに戻ってきた。イエスが神殿内を歩いていると、祭司長や長老、律法学者たちがイエスに会いにやってきた。<sup>28</sup> 彼らは(イエスに)「おまえは何の権威でこういうことをするのだ。誰がそうする権威を与えたのだ」と詰問した。<sup>29</sup>(これに対して)イエスは答えた。「その前に一つ君らに質問があるんだけど、そして、もし、君らが僕の質問に答えるんだったら、こういうことをする権威を僕がどこから頂いたのか教えることにするよ。<sup>30</sup> ヨハネに洗礼を施す権威を与えたのは誰なのかな。それは天国の神様なのかな、それとも単に人間なのかな」。<sup>31</sup> 彼らはよくよく考えてお互いに言い合った。「我々は神がヨハネに権威を与えたとは答えられまい。(なぜなら)では何故我々はヨハネを信じなかったのかとイエスは尋ねるだろうから。<sup>32</sup> だがしかしだ、人々はヨハネは預言者であったと考えている。だから、我々は単なる人間がヨハネに洗礼を授ける権威を与えたと答えることもできない」。彼らは民衆を恐れていたので、<sup>33</sup> イエスに「我々には分からない」と答えた。そこで、イエスは「じゃあ、誰が、僕がこういうことを行う権威を、僕に与えたかは話せないね」と言った。

30. 「ヨハネ」 洗礼者ヨハネ。

## 第 12 章

悪しき農夫のたとえ (12:1~12)  
(マタイ 21:33~46, ルカ 20:9~19)

<sup>1</sup> それから、イエスは彼らにこの話をした。「ある人が、ある時、ブドウ畑を設けたんだ。彼はその周りに生け垣を作り、ブドウを絞る為の穴を掘もこしらえたんだ。彼は、監視櫓も建てたんだ。そうして、彼は自分のブドウ畑を(小作人に)貸し出して、自分は離れたところで暮らすことにしたんだ。<sup>2</sup> 収穫の時期になったので、彼はブドウの取り分を受け取らせる為に僕を使いとして送ったんだ。<sup>3</sup> (でも) 小作人たちはこの僕を捕らえて、したたか殴った後で、収穫の取り分を渡さないまま僕を送り返したんだ。<sup>4</sup> (そこで) ブドウ畑の持ち主は別の僕を使いとして送ったんだけど、小作人たちは僕の頭を殴ってひどく侮辱したんだ。<sup>5</sup> それで、その人は別の僕を送ったんだけど、小作人たちはこの男を殺してしまったんだ。ブドウ畑の主は次々に僕を送り続けたんだけど、小作人たちはある僕たちのことは殴り、別の僕たちは殺してしまったんだ。<sup>6</sup> 主にはとても大切にしていた息子が一人いたんだけど、結局、この主は小作人たちのところにこの息子を使いに出したんだ。小作人たちはこの息子だったら重んじるとおもったからなんだけれどもね。<sup>7</sup> でもね、小作人たちは自分たちに言い聞かせたのさ、「いつかこいつがこのブドウ畑を相続するだろうから、こいつを殺してしまおうぜ。そうすれば、ブドウ畑は全部俺たちのものになる」ってね。<sup>8</sup> それで、奴らは主の息子をつまえて殺して、死体をブドウ畑の外に投げ捨てたんだ。<sup>9</sup> イエスは尋ねた。「ブドウ畑の持ち主はどう思うと思う。彼は(ブドウ畑に)やって来て、これらの小作人を殺して、ブドウ畑を他の誰かに貸すだろうね。<sup>10</sup> 君らは聖書がこう言っているのは知ってるはずだ、『家を建てる者が投げ捨てた石が、今、全ての中で最も大切な石となっている。<sup>11</sup> これは、主(Yahweh)がしたこと、我々には驚くべきことである』<sup>12</sup> 長老たちはイエスがまさに自分たちのことを話していると分かったので、イエスを捕らえようと思ったのであるが、彼らは民衆を恐れていたの、イエスをそのままにして立ち去った。

1. 「ブドウ畑」 イザヤ書 5:1~7 を参照すること。ユダヤ(イスラエル)の国土を指す。
1. 「自分は離れたところで暮らす」 地主は土地を小作人たちに貸して、自らはエルサレムなどの都市に住んでいたのである。
2. 「僕」 預言者は神の僕であった。預言者はしばしば残忍な扱いを受けた(列王記上 19:1~3、歴代誌下 24:20~22, 36:15~16、ネヘミヤ記 9:26)。
3. 「小作人」 ユダヤの民を指す。
6. 「とても大切にしていた息子」 イエスを指す。
10. 「家を建てる者が投げ捨てた石が、今、全ての中で最も大切な石となっている」 詩編 118:22
11. 「これは、主(Yahweh)がしたこと、我々には驚くべきことである」 詩編 118:23

納税について (12:13~17)  
(マタイ 22:15~22、ルカ 20:20~26)

<sup>13</sup> ファリサイ派とヘロデ派が話し合っ、イエスが間違っことを言うようにし向ける為、イエスのところに何人かの者たちを遣わした。<sup>14</sup> 彼らはイエスのところに行き「先生、あんたが正直な人間であることは分かってる。あんたは、その人が誰であっても公平に扱ってるし、神様がみんなに何をしたいかということについて本当のところを教えてる。で、教えて貰いたいんだが、カエサルへの税金は納めるべきなんだろうか、それとも納めるべきでないんだろうか」と言った。<sup>15</sup> イエスは彼らが何か企んでいると分かったので、「どうして僕を試そうとするんだい。コインを見せなさい」と言った。<sup>16</sup> 彼らはイエスに1枚の銀貨を手渡したので、イエスは「誰の像と名前がここに彫ってあるんだい」と言った。(すると)彼らは「カエサルのだ」と答えた。<sup>17</sup> それでイエスは彼らに「カエサルのものはカエサルに返しなさい、そして、神のものは神に返しなさい」と告げた。(そこで)この者たちはイエスに感服したのである。

14. 「カエサル」 ローマ皇帝。

14. 「税金」 前6年に、ユダヤ・サマリア・イドマヤがローマの属州であるユダヤ属州になる。属州の支配者はシリア総督であり、シリア総督は前6年にユダヤ州の民に対して、人頭税を取る為に、人口調査を行っている。尚、この納税に反対してガリラヤ(或いはガマラ)のユダが反乱を起こしている。もし、イエスがローマ帝国への納税をすべきでないと答えた場合、反逆罪として死刑になったであろう。

16. 「銀貨」 デナリオン銀貨(デナリウス銀貨)。このコインの片面には、ティベリウス帝の像が刻まれており、反対面には「ティベリウス・カエサル、聖アウグストゥスの息子」と刻まれていた。このコインは納税用に使われていた。1 デナリオンは労働者 or 兵士1日分の給与に相当したとされる。尚、1 デナリウスは銀3.4g(?)であった。

#### 復活問答 (12:18 ~ 27)

(マタイ 22:23 ~ 33、ルカ 20:27 ~ 40)

<sup>18</sup> サドカイ派は死後の復活を信じていなかった。それで、彼らの内の何人かがイエスのところへやって来て言った。<sup>19</sup> 「先生、結婚していた男が死んで、この男に子が無かったなら、その弟が、夫に先立たれた女と結婚すべきであり、(この夫婦の)最初子は、亡くなった兄弟の子とすると、モーセは書き残している。<sup>20</sup> かつて7人の兄弟がいて、長男が結婚したけれど、子供を残さないで死んだので、<sup>21</sup> 次男が長男の妻だった女と結婚した。でも、次男も子を残さないで死んだ。同様のことが三男にも起こり、<sup>22</sup> 結局この7人の全てが子供を残さず死んで、最後に女も死んだ。<sup>23</sup> 神様が人々を死から復活させるとき、この女は誰の妻になるんだ? つまり、彼女は7人の兄弟全てと結婚したことになる訳だが」。

<sup>24</sup> イエスは答えた。「君らは完全に間違ってるよ。君らは聖書が教えていることを知らない。そして、君らは神様の力について何も知らない。<sup>25</sup> 神様が人々を復活させたとき、彼らは結婚したいなんて思わないんだ。彼らは天使のようになるんだよ。<sup>26</sup> 君らは復活した人たちのことを知っている筈だ。君らは、モーセの話の中の燃える柴のところを知っているよね。このところで、神様は『私はアブラハム、イサク、ヤコブが拝した神である』と言ってるよね。<sup>27</sup> 神様は死んだ者の神じゃなくて、生きている者の神なんだよ。君らサドカイ派の人たちは全て間違っているよ」。

18. 「サドカイ派」 Sadducees. サドカイ派は祭司職に関係し(使徒 5:17)ユダヤの富裕層の構成員である。サドカイ派という名前は、重要な祭司職に代々就いてきた「サドク(Zadok)」家に由来する。サドカイ派は、神殿で礼拝することとそこで生贄を捧げることが最も大切と考えおり、律法五書のみを認めたので、そこに記されていない復活や終末、最後の審判などは否定した。サドカイ派が復活を認めなかったことはヨセフスのユダヤ戦記(2:165)にも記載されている。サドカイ派は、エルサレム神殿の崩壊と共に、その存在意義を失ったので、マルコの時代には、その影響力は無かったものと思われる。

尚、ファリサイ派は死後の世界を信じていた。

19. 申命記 25:5 ~ 10 に、子を残さずして死んだ男に同居していた兄弟がいた場合、妻はこの兄弟と結婚しなければならぬとある。これは、一族の名を残そうとするイスラエルの習慣である。しかし、イエスの時代になると、このような掟は余り厳密には守られなかったようである。

24. イエスは、死後の世界は、この世とは全く異なっていると述べているのである。

26. 「燃える柴」 出エジプト記 3:2 ~ 6。

27. 「神様は死んだ者の神じゃなくて、生きている者の神なんだよ」 つまり、アブラハムもイサクもヤコブも、現在、死から蘇って生きているということである。

#### 最も大切な掟 (12:28 ~ 34)

(マタイ 22:34 ~ 40、ルカ 10:25 ~ 28)

<sup>28</sup> イエスとサドカイ派の者たちが議論しているとき、律法学者の一人が近づいてきた。この男は、イエスの素晴らしい答えを聞いて、イエスに「最も大切な掟は何か」と尋ねた。<sup>29</sup> イエスは答えた。「最も大切なものは、『イスラエルの人々よ、あなた方には唯一の主である神だけがある。<sup>30</sup> あなた方は、主なる神を、心を尽くして、魂を尽くして、精神を尽くして、力を尽くして愛さなければならない』ということなんだ。<sup>31</sup> 最も大切な第二の掟は、『自分を愛するように互いに愛し合いなさい』ということな

んだ。これらより大切な掟は他にないよ」。<sup>32</sup> この男は、こう言い返した。「先生、あんたが、神様は一人しかいないというのは確かに正しい。<sup>33</sup> 我々が、神を、心を尽くして、魂を尽くして、精神を尽くして、力を尽くして愛さなければならないということも、我々が自分を愛するようにお互いに愛し合わなければならないということも正しい。これらの掟は、我々にできるどんな犠牲や捧げ物よりも大切だ」。<sup>34</sup> イエスはこの男が聡明な答えを出したので、彼に「君は神の王国からそう遠くないよ」と話した。この後、誰もイエスにそれ以上質問しようとはしなくなった。

30. 申命記 6:4～5。

31. 「自分を愛するよう互いに愛し合いなさい」 レビ記 19:18

33. 「犠牲や捧げ物」 イエスの時代、ユダヤ人にとって大切なことは、エルサレムの神殿に行って礼拝し、犠牲や捧げ物を捧げることであったのである。ただ、預言者の中には、捧げものをするのが大切ではなく、正しいことを行い、互いに助け合うことが大切であるとした者もいた（イザヤ書 1:10～17、ホセア書 6:6、アモス書 5:21～24）。

#### ダビデの子について (12:35～37) (マタイ 22:41～46、ルカ 20:41～44)

<sup>35</sup> イエスが神殿で教えているとき、イエスはこう言った。「どうして、律法学者たちは、メシアはダビデ王家から出ると言んだらう。<sup>36</sup> 聖霊はダビデにこう言わせた。『主は私の主に言った。私がおまえの敵をおまえの足下にひれ伏させるときまで、私の右の座に座っていなさい』。<sup>37</sup> もし、ダビデがメシアを自分の主と呼んでるなら、どうしてメシアがダビデの子であり得るんだい」。大勢の民衆はイエスの教えを聞いて喜んだのである。

35. 「メシアはダビデ王家から出る」 サムエル記下 7:12～14、イザヤ書 9:5～6、11:1～5 に、救い主(メシア)がダビデの血統から出現するように記されている。しかし、マルコは、旧約のこの内容を否定していることになる。

36. 「主は私の主に言った」 最初の「主」は Yahweh である。「私の主」は、マルコによれば、イエスのことになる。

36. 「私がおまえの敵を」 「私」とは Yahweh を指し、「おまえ」とはイエスを指す。

#### イエス、律法学者を非難する (12:38～40) (マタイ 23:1～36、ルカ 20:45～47)

<sup>38</sup> イエスが教えていたとき、こう言った。「律法学者に対して警戒しなさい。彼らは、長い式服を着て歩き回り、市場で挨拶されることが好きなんだ。<sup>39</sup> 彼らは、会堂では正面の席、宴会では一番の席が好きなんだ。<sup>40</sup> でも、彼らは、夫に先立たれた女性たちの家を騙して取ったり、人々に見せびらかせる為に長い祈りをしてる。こういう輩は誰よりも厳しく罰せられることになるんだよ」。

38. 「律法学者に対して警戒しなさい」 律法学者(転記者・書記)は、己が教えている通り自らは行動しなかったからである。

38. 「長い式服」 律法学者は民衆が律法学者であると認識できるような式服を着ていた。

40. 「夫に先立たれた女性たちの家を騙して取ったり」 律法学者は寡婦にアドバイスを与えたり、寡婦の為に祈ったりする度に金銭を得ていた。その支払いの為、寡婦は家を売らねばならないこともあった。

#### 寡婦の献金 (12:41～44) (ルカ 21:1～4)

<sup>41</sup> イエスは神殿の献げ箱の近くに座って人々が捧げ物を入れるのを眺めていた。多くの金持ちたちが沢山のお金を献金した。<sup>42</sup> 最後に、夫に先立たれた一人の貧しい女性がやってきて、僅かな価値しかないレプトン銅貨二枚を入れた。<sup>43</sup> イエスは弟子たちを周りに集めてこう言った。「この貧しい女性は他の誰よりも多く献げたんだ。<sup>44</sup> 他のみんなは余ってるものを献げたんだ。でも、彼女はとても貧しいので、持ってるもの全てを献げたんだ。今、彼女には暮らしていくのに必要な僅かのお金もないんだよ」。



41. 「献げ箱」 神殿内の庭に木箱として設置されていた(?)。

41. 「夫に先立たれた一人の貧しい女性」 旧約聖書では、詩編 94:1~7、イザヤ書 9:1~2、ゼカリヤ書 7:10、マラキ書 3:5 で寡婦を虐げたり、食いものにしたりすることを戒めている。

42. 「レプトン銅貨」 レプトン (lepton) 銅貨はギリシャ通貨の中で最も小さなもの。レプトン銅貨 2 枚でローマの最小額通貨である 1 クオドランス (quadrans) に相当する。4 クオドランス = 1 アス。16 アス = 1 デナリオン (自由労働者一日分の賃金)。よって、レプトン銅貨 2 枚は、労働者一日分の賃金の 64 分の 1 の価値ということになる。尚、当時は、ユダヤなどの各地域では地域通貨が使用されており、これらの通貨はローマの通貨と交換可能であった。

43. 「この貧しい女性は他の誰よりも多く献げた」 この記述をもって、教会に対して、自らの持っているものの中でできるだけ多く献金することが素晴らしいことである、というように教えるのは以ての外である。大体に於いて、イエスは、教会なるシステムを作れなどということは言っていない。逆に、イエスはそのような戒律的なシステムを打破する為に活動したのである。

## 第 13 章

### 神殿崩壊の予言 (13:1~2)

(マタイ 24:1・2、ルカ 21:5・6)

<sup>1</sup> イエスが神殿から立ち去ろうとしたとき、弟子の一人がイエスに「先生、見てください。何とすばらしい石と立派な建物でしょう」と言った。<sup>2</sup> イエスは答えて「君はこの大きな建物を見てるのかい。(でも) これらの建物は必ず壊されることになるよ。この場には石一つ残らなくなるんだよ」。

1. 「神殿」 エルサレムの神殿は、伝承によるとイエスの時代の約 900 年前にソロモン王によって、その最初の神殿 (第 1 神殿と呼ばれる) が建設されたとされているが、バビロニアによってこの神殿はエルサレムと共に破壊されることになる。その後、バビロン捕囚から戻ってきたユダヤ人たちがエルサレムの再建に乗り出すが、神殿の再建についてはその詳細は明かではない (この時代に再建された筈の神殿を第 2 神殿という)。その後のハスモン王朝時代に神殿がどうなっていたかも分からない。ローマに媚び、ハスモン王朝の乗っ取りに成功したイドマヤ人 (イドマヤ人はハスモン朝時代にユダヤ人によって強制的に割礼を受けさせられたユダヤ人化された) ヘロデ大王によって、前 20 年から神殿の拡張建設 (ヘロデ神殿とも呼ばれる) が開始され、(前 4 年の) 大王の死後も建設が続けられ、イエスの時代も建設が続けられていた。神殿が完成したのは皮肉なことに第 1 次ユダヤ戦争直前のことである。

1. 「石」・「建物」 原文では複数形。

2. 「この場には石一つ残らなくなる」 この記述から、マルコ (と呼ばれることになる筆者) は、第 1 次ユダヤ戦争に於けるエルサレム神殿崩壊後 (後に皇帝となる将軍ティトスにより 70 年に破壊された) に、この福音書を著したものと思われるが、少なくともマルコはユダヤ戦争当時エルサレムには居住していなかったであろう (この戦争に於いて、原始キリスト教徒たちはユダヤ側に加担せず、戦争以前にエルサレムから退いているのである)。何故ならば、神殿は確かに殆ど崩壊したけれども、その壁は一部であるが現在に至るまで残っているからである。従って、マルコは、エルサレム崩壊を伝聞で知り、戦後もエルサレムを訪れてはいないことは確かである。

尚、第 1 次ユダヤ戦争は 66 年に、ローマの支配に対抗して起こったが、親ローマの拠点であったエルサレムは反乱軍の手に落ち、当初は反乱軍が勝利をおさめた。ローマ軍はエルサレム攻略に 4 年の歳月を費やすことになるが、結局 70 年にエルサレムはローマにより陥落する。この時代はユダヤ人どうしでもいがみ合い、地方でもユダヤ人が虐殺されたりもした。ユダヤの反乱軍に加担しなかった原始キリスト教団はエルサレムを離れ、ガリラヤまたはガリラヤ以北に逃れて暮らしていたと思われる。ガリラヤは、戦争初期にローマ軍により制圧されていたが、キリスト教徒とは言えユダヤ人であった原始キリスト教徒たちはローマや異邦人から迫害を受けなかったということはないと思われる。原始キリスト教徒たちは、同胞からも異邦人からも迫害されたものと思われる。こういう状況の下でマルコ福音書は執筆されることになったのである。

### 苦難についての警告 (13:3~13)

(マタイ 24:3~14、ルカ 21:7~19)

<sup>3</sup> その後、イエスが神殿を出てオリーブ山で座っていたときであるが、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレがこっそりとイエスの下にやってきた。<sup>4</sup> 彼らは「これらのことはいつ起こるんですか。起ころうとしているときにはどんな徴があるんです」と尋ねた。<sup>5</sup> イエスは答えて言った。「気をつけていなさい。誰かに騙されないようにしなさい。<sup>6</sup> 多くの者たちがやってきて、僕であるかのように吹聴するよ。彼らは僕の名を使って多くの人たちを騙そうとするよ。<sup>7</sup> 戦争や戦争するぞっていう脅しについて耳にすると、恐れてはいけないよ。これらのことは最初に起こることになってるんだけど、それは終わりの時ではないんだ。<sup>8</sup> 民どうし国どうしがお互いに争うことになるよ。多くの場所で地震も起こるし、人々は飢えて死ぬんだ。でも、これはまさに、(一連の) 苦しみの始まりなんだ。<sup>9</sup> 用心しなさい。君らは、法廷に連行されたり、会堂で鞭打たれたりするようになる。そして、君らは、僕の弟子だったから、支配者や王の前に立って君らの信仰について話さなければならなくなるんだ。<sup>10</sup> でも、終わりの時がやって来る前に、福音 (良き知らせ) が全ての民に教え伝えなければならぬんだ。<sup>11</sup> 君らが捕らえられたとき、君らはどう言おうかと心配することはないよ。その時がくれば、君らには適切な言葉が与えられる

よ。でも、実際に話しているのは君らじゃなくなるんだ。君らの言葉は聖霊によることになるからね。<sup>12</sup> 兄弟たちや姉妹たちは互いに裏切り、互いに相手を死に追いやることになるよ。親たちも自分たちの子供を裏切り、子供たちも自分の親に反抗して殺すことになるよ。<sup>13</sup> みんな、君らのことを、僕の為に憎むことになるよ。でも、君らが終わりの時まで信仰的に正しくあり続けるなら、君らは救われることになるよ。

3. 「オリーブ山」 マルコ 11:1 を参照すること。
3. 「ヤコブ、ヨハネ」 ゼベダイの子。マルコ 1:19 及び 3:17 を参照すること。
3. 「アンデレ」 ペテロの兄弟で、イエスの最初の弟子とされる。マルコ 1:16 を参照すること。
3. 「徴」 第1次ユダヤ戦争を念頭に置いていると思われる。
5. マルコ 13:5~37 は「小黙示録」と呼ばれる箇所である。
- 12 第1次ユダヤ戦争の時、イエスの教えに従う一派(原始キリスト教徒)は、ユダヤ側に加担しなかった為、ユダヤ人からは裏切り者扱いされたのである。
13. 「救われることになる」 「永遠の命を受けることになる」という意味。

#### 最後の艱難 (13:14~23)

(マタイ 24:15~21、ルカ 21:20~24)

<sup>14</sup> いつの日か、君らは、『身の毛のよだつもの』が立ってはならない場所に立っているのを見ることになるんだ。これを読む者はみんな悟って欲しい。もし、君がその時、ユダヤで暮らしていたら、山の方に逃げださないよ。<sup>15</sup> もし、屋根の上にいるなら、何かを取りだそうとして家の中に入ってはいけないよ。<sup>16</sup> もし、君が野原に出ているなら、上着を取りに戻ってはいけないよ。<sup>17</sup> 妊娠してたり、幼子を育てたりしている女性たちにとっては、ひどい時代になるね。<sup>18</sup> このことが冬に起こらないように祈りなさい。<sup>19</sup> 神が世界を創造して以降、最悪で、こんなひどいことは二度と起こらないくらいの苦難の時代がやってくるよ。<sup>20</sup> もし、主 (Yahweh) がその期間を短くしなかったら、誰も生き残らないだろうね。でも、主 (Yahweh) が選んだ特別な者たちの為に、主 (Yahweh) はその期間を短くしてくれる筈だよ。<sup>21</sup> もし、誰かが「ここにメシアがいるぞ」とか「そこにメシアがいるぞ」と言っても、信じちゃ駄目だよ。<sup>22</sup> 偽りのメシアや偽りの預言者がやって来て、不思議なことや(メシアや預言者であることを示す) 徴を行うことになるよ。そいつらは神が選んだ人達を騙そうとさえるよ。<sup>23</sup> でも、警戒しなさいね。だから、こういうことを今僕があなた方に話したんだ。

14. 「身の毛のよだつもの」 ローマ人を指す。
14. 「立ってはならない場所」 エルサレム神殿の至聖所。
14. 「これを読む者はみんな悟って欲しい」 マルコ福音書の読者に対するマルコからのメッセージか。
14. 前168年に、セレウコス朝の王安ティオコス4世エピファネス(在位:前175~前164)が、エジプト遠征から戻った時、その戦費を賄う為にエルサレム神殿を襲い、その宝物を略奪している。その後、エピファネスは、ユダヤ人に対して徹底的な宗教弾圧を開始し、割礼や律法に基づく生活を送ることを禁止し、エルサレム神殿にゼウス像を設置し、ユダヤ人に礼拝を強要したのである。このようなことが再び起こるであろうと言っているのである。ただし、当たり前のことではあるが、このことはローマ軍によって起こされた後に、マルコによって語られたことではある。
18. 「冬に起こらないように」 パレスチナの冬は、寒く、雨天の日が続くので、移動が困難となるのである。

#### 人の子が出現する時 (13:24~27)

(マタイ 24:29~31、ルカ 21:25~28)

<sup>24</sup> これらの日、苦難の時の直後、『太陽は暗くなり、月はもはや輝かなくなる。<sup>25</sup> 星は(天空から)落ち、天の(様々な)力は揺さぶられる』。<sup>26</sup> その時、人の子が偉大な力と栄光を持って雲の中に出現するのが見えるんだ。<sup>27</sup> 人の子は、天使を遣わして、彼が選んだ人達を全土から集めるんだ。

25. 「星は(天空から)落ち」 マルコ(ということは当時の人たちはということであるが)は、星は天空に張り付いていたと考えていたということになる。また、星は精神的な力をもった存在であると考えていたのである。

無花果の木の教え (13:28 ~ 31)  
(マタイ 24:32 ~ 35、ルカ 21:29 ~ 33)

<sup>28</sup> 無花果の木の教訓から学びなさい。その枝々に芽ができて、それらが成長して葉が茂ると、夏が近いってことが分かるよね。<sup>29</sup> だから、これら全てのことが起こることを見るときに、その時が既に来ていることが分かるんだよ。<sup>30</sup> これらの全てが起こるとき、今の世代の人たちの何人かがきっとまだ生きている筈なんだ。<sup>31</sup> 天と地は永遠ではないけど、僕の言葉は永遠なんだ。

<sup>30</sup> マルコは、つまりは原始キリスト教徒たちは、「終わりの日」は、ほぼ、自分たちの時代にやってくるかと信じていたことになる。原始キリスト教徒は、「終わりの日」がやってくることを渴望していたということになる。原始キリスト教徒たちの時代は彼らにとって余りに過酷な時代だったという訳である。

終末の日は誰にも分からない (13:32 ~ 37)  
(マタイ 24:36 ~ 44)

<sup>32</sup> 誰もその日その時を知ることはないよ。天の御使いも知らないし、子自身も知らないんだ。父だけが知っているんだ。<sup>33</sup> だから、気をつけて、準備していなさい。君らはその時が来る時を知らないからね。<sup>34</sup> これって、暫く旅に出る人が彼の召使いたちに全てを任せるときに起こることに似てるんだ。その人は召使い各々に何をすべきかを話し、守衛に警戒を怠らないように命ずる。<sup>35</sup> だから、油断しないようにね。君らは家の主が何時戻ってくるのかは知らないんだ。それは夕刻なのか真夜中なのか、夜明け前なのか朝なのかも知らないよ。<sup>36</sup> でも、主が突然戻ったとき、君らは寝ていることがないようにしてね。<sup>37</sup> 僕は君らに話したことをみんなに話す。油断しないでね。」

小黙示録

マルコ福音書 13:5 ~ 37 には、イエスのスピーチが綴られている。このスピーチは「黙示」(Apocalypse) という形式で話される。それ故、この部分を「小黙示録」と呼ぶことがある。尚、黙示とは、啓示のことであり、将来起こることを象徴的に示したものである。

この小黙示録に含まれる啓示は、終わりの日の始まりには

- ◎ 偽りのメシアや預言者が出現する
- ◎ 戦争や戦争の噂がなされる
- ◎ 地震と飢饉が起こる
- ◎ 迫害を受ける
- ◎ 『身の毛のよだつもの』が立ってはならない場所に立ってるの見る
- ◎ かつて経験しなかったような苦難の時代がやってくる
- ◎ 苦難の時代の後、天変地異が起こる

としており、終わりの日は、この世代の何人かが未だ生きている時代にやってくる、即ち、そう遠いことではないとしている。そして、終わりの日に、人の子が出現し、イエスを信じる者たちは救われるとしている。しかし、マルコがこう記したような現実はやって来なかったのである。

## 第14章

### イエスを殺す計画 (14:1~2)

(マタイ 26:1~5、ルカ 22:1~2、ヨハネ 11:45~53)

<sup>1</sup> 過越祭と除酵祭の2日前であった。祭司長たちと律法学者たちは姑息な手段をとってイエスをどのように捕らえ殺害しようかと計画していた。<sup>2</sup>(しかし、)彼らは「祭の間に動くのはまずい。民衆が暴動を起こすからな」と言っていた。

1. 「過越祭 (Passover)」 元来は遊牧民の牧草地移動にまつわる祭儀であったとされる。これが古代イスラエルで、「出エジプト」物語 (出エジプト記 12,13 章) に結びつけられ、それを記念する祭となった。モーセに率いられたイスラエル民族が隷属状態にあったエジプトの地を脱出しようとしたが、ファラオがこれを阻止しようとしたので、神はエジプトに10の災いをもたらしこれを懲らしめたのであるが、その10番目の災いとして、神が人間から家畜に至るまでその初子は皆殺しにすることにした。しかし、神はイスラエルの民だけはこの災いが被らないようにする為、その戸口にその印として屠られた羊の血を付けるように命じた。そしてこの災いが起こったとき、印を付けたイスラエルの家だけは、災いが通り過ぎることになったので、これを記念して「過越祭」が祝われるようになったとされる。ニサン (Nisan) の月 (現在の3月~4月に相当) の14日の午後にエルサレム神殿で羊を屠り、その夕方日没後、つまりユダヤ式日付では15日が始まるときに、この羊を家族で食する行事がその中心となる。過越祭はユダヤ人にとっての最大の祭りであり、ユダヤ人はエルサレムに赴き神殿で犠牲を捧げなければならなかったため、この祭りの期間中はエルサレムの人口が倍増したとされている。

1. 「除酵祭」 種 (イースト) なしパンの祭。その起源は、大麦の穂が出た頃に、収穫した大麦を神に奉納するカナン人の祭にあるとされる。このとき、古い酵母が始末されるので、1週間ほど種なしパンで過ごさなければならなかった。この習慣が「出エジプト」物語と結びつけられて、出エジプトを記念する行事となった。つまり、イスラエル民族がエジプトを脱出するときに、イーストを使って発酵させてから焼くという時間が無かったから種なしパンを食べたということにされたのである。過越祭に続いて (つまり、ニサンの月の第15日から) 1週間祝われる。しかし、本来は上述したように、過越祭と除酵祭は別々のものであった。

1. 「過越祭と除酵祭の2日前であった」 水曜日。

2. 「民衆が暴動を起こす」 過越祭の期間中はエルサレムには地方から多くのユダヤ人が訪れた、これが、しばしば騒乱が起こる原因となったので、ユダヤ総督は総督官邸のあったカイサリアから駐留軍を引き連れてエルサレムに駐屯し、騒乱が起こらないように牽制した。

### イエス、ベタニヤで香油を注がれる (14:3~9)

(マタイ 26:6~13、ヨハネ 12:1~8)

<sup>3</sup> イエスは、かつて重い皮膚病 (ハンセン病) に罹っていたベタニアのシモンの家で食事を摂っていたが、この時、一人の女性が非常に高価な香油の入った石膏の壺を持って入ってきた。そして、その壺を壊して香油をイエスの頭に注いだ。<sup>4</sup> 一緒にいた客の何人かがこれ見て腹を立てて、不平をこぼした。「どうしてそんな無駄使いをするんだ。<sup>5</sup> この香油を売れば銀貨300枚以上になり、そのお金を貧しい人たちに施せたのに」。そして、この者たちは、その女性に対して、酷い言葉を浴びせ出した。<sup>6</sup> しかし、イエスは言った。「そのままにさせなさい。どうして君らは彼女を困らせるんだ。彼女は僕の為にすばらしいことをしたんだよ。<sup>7</sup> 君らはいつでも貧しい人たちと一緒にいれるよね。だから、君らはいつでもしたいときに貧しい人たちに施しができる。でも、君らはここでいつでも僕と一緒にいるという訳にはいかなくなるんだ。<sup>8</sup> 彼女が私の体に香油を注いだのは、私の埋葬の準備をする為にできる全てのことを彼女はしたまでなんだ。<sup>9</sup> 福音 (良き知らせ) が世界中で語られるときはいつでも、人々はきっと彼女のしたことを忘れない筈だ。」

3. 「ベタニヤ」 11:1 を参照せよ。

3. 「一人の女性」 マタイも女性の名は記していないが、ヨハネ福音書では「マリア」とされている。

3. 「香油」 ナルドの香油とされる。ナルドの香油については雅歌 1:12 及 4:13 に記述が見られる。ナルドの香油はヒマラヤ (ブータン・ネパール・カシミール) 原産の香草である甘松 (spikenard) から作ったもので、ヘレニズム・ローマ世界で、富裕層に人気があった。

3. 「壺を壊して」 貴重な香油は封印して壺に保管されていた。香油を使うときは、壺の首の部分壊して取り出したのである。
3. 「香油をイエスの頭に注いだ」 マタイ福音書でも香油はイエスの頭に注がれたということになっているが、ヨハネ福音書では、マリアが香油をイエスの足に自分の髪を使って塗ったとされている。尚、頭に注ぐという行為は、王がその即位に当たり、頭に油を注がれたということ(サムエル記上 10:1 ~ 2、列王記下 9:6)が念頭に置かれて記されたものと考えられる。つまり、メシア(油注がれし者)の印ということになる。
5. 「銀貨 300 枚」 銀貨 1 枚(1 デナリオン)は自由労働者や兵士の一日分の給与に相当するとされたので、銀貨 300 枚は 1 年分の給与に相当することになる。
7. 申命記 15:11 を参照すること。
7. 「できる全てのことを彼女はしたまで」 原文では意味不明の箇所である。
8. 「埋葬の準備」 ユダヤ人を初めとする古代中近東に住んだ人々にとって、その死後に適切に埋葬されることはとても名誉なことであった。パレスチナ地域の気候を考えると、死後 24 時間以内に埋葬する必要がある。申命記(21:12)には、気にかけて死体はその日の内(つまり日没以前)に埋葬されなければならないとある。死体をさらしておいて、禿鷲や犬に食いちぎられるのは非常に不名誉なことであった。聖書では埋葬をどういう仕方で行うべきかについて詳細には記していないが、ユダヤ人の遺体の処理については、使徒言行録(9:37)により、遺体を清める(洗う)こと、ルカ(24:1)により、遺体に香料を注いだこと、マタイ(27:59)及びヨハネ(11:44)により、遺体は布でくるんだことが分かる。遺体を洞穴に入れ、その入り口を石で封印した。これが墓である。一つの墓に一つの遺体を納める場合もあるが、家族全員の遺体を一つの墓に納めることもあった。墓に納められた遺体が腐敗した後は、骨は拾われて骨壺(ossuary)に納められた。ギリシャ人やローマ人、カナン人はしばしば火葬したが、ユダヤ人にとって火葬は不名誉なことであった。よって、火葬は律法に従わなかった者には適用された。

ユダの裏切りの企て(14:10~11)  
(マタイ 26:14~16、ルカ 22:3~6)

<sup>10</sup> イスカリオテ (Iscariot) のユダは 12 弟子の一人であった。ユダは祭司長たちのところに行き、彼らがイエスを捕らえる手助けをしたいと申し出たのであった。<sup>11</sup> 祭司長たちはこれを聞いて喜び、ユダに金を与える約束をしたのである。それで、ユダはイエスを裏切る良いチャンスをうかがっていたのである。

10. 「イスカリオテ」 3:19 参照

11. 「金を与える約束」 マタイ福音書(26:15)では、銀貨 30 枚とされる。尚、ルカ福音書では金額は明記されていない。

過越の食事(14:12~21)  
(マタイ 26:17~25、ルカ 22:7~14,21~23、ヨハネ 13:21~30)

<sup>12</sup> 除酵祭の最初の日であった。そして、過越祭の為の羊が屠られた。イエスの弟子たちはイエスに「過越の食事をどこで用意すればいいですか」と尋ねた。<sup>13</sup> イエスは二人の弟子たちに言った。「(エルサレムの)街に入りなさい。すると、水瓶を持った男に会えるよ。その人について行って、<sup>14</sup> 彼が一軒の家に入ったら、その家の主に『私どもの先生が、弟子たちと過越の食事を摂る部屋があるかどうか知りたがっています』と言いなさい。<sup>15</sup> 家の主は、君らを二階に案内し、食卓の準備ができた大広間に通すだろうから、そこで食事の準備をきなさい。<sup>16</sup> 二人の弟子たちは街に入り、イエスが話した通りに全くなっていたので、過越の食事の準備をした。<sup>17~18</sup> イエスと 12 弟子たちが一緒に夕食を摂っていたとき、イエスは「僕と一緒に食事している一人が僕を裏切ることになる」と言った。<sup>19</sup> これを聞いた弟子たちは悲しんで、次々にイエスに「まさか俺じゃないでしょうね」と言った。<sup>20</sup> イエスは答えて言った。「12 弟子の中で僕と一緒に皿で食事してる人がその人なんだ。<sup>21</sup> 人の子は、聖書が言っている通り死ぬんだ。でも、僕を裏切る一人には酷いことが起こることになるよ。その人は生まれなかった方が良かったらうにね。」

12. 「除酵祭の最初の日であった。そして、過越祭の為の羊が屠られた」 除酵祭の最初の日は木曜日になる。過越の羊を屠る日はニサンの月の 14 日の午後であり、日没と同時に 15 日が始まり、こ

こから過越祭が始まる。除酵祭の最初の日はニサンの月の15日であるので、このマルコの記述は事実とは異なる。マルコはユダヤの律法に従って生活していた人物ではない可能性もある。或いはローマ式勘定の仕方、一日は朝から始まって、次の日の朝までとするという考え方をとったのかも知れない。マルコの時代、マルコが属していた共同体はローマ式に一日の始まりと終わりを決めていたのかも知れない。

13. 「水瓶を持った男」 水瓶を持つのは普通は女性である。従って、男が水瓶を持つということは目印になるということか？

19. 「僕と一緒に食事している一人が僕を裏切ることになる」 共観福音書では、その文脈から、ユダは会食後に裏切り行為に移ることになるが、ヨハネ福音書ではユダは食事中に席を離れるとされている。

21. 「人の子は、聖書が言っている通り死ぬ」 聖書にはこのような記述はない。ここでイエスが言っている、つまりはマルコが引き合いに出している「聖書」というのは所謂70人訳聖書そのものを指すというのではなく、この当時（ヘブライ語聖書もまとめられていなかった時代である）、ユダヤ人にとって権威を持っていた何かの文書を指す可能性がある。つまりは、マルコ福音書に書かれている「聖書」というのは、70人訳聖書（現在の旧約聖書と重なる部分があるギリシャ語訳聖書）を指しているのではないことになる。

### 主の晩餐 (14:22 ~ 26)

(マタイ 26:26 ~ 30、ルカ 22:14 ~ 23、コリント書一 11:23 ~ 25)

<sup>22</sup> 食事をしている時、イエスはパンを手に取り、パンへの感謝の祈りをしてそれを裂き、弟子たちに与えて言った。「取りなさい。これは僕の体だよ」。<sup>23</sup> イエスはワインの入った杯を取り、神へ感謝して、これを弟子たちに与えた。そして、弟子たちは皆このワインを飲んだ。<sup>24</sup> そこでイエスは言った。「これは、多くの人たちの為に注がれた僕の血なんだ。そして、この血をもって神様は契約したんだよ」。<sup>25</sup> 今後、僕は、神様の王国で新しいワインを飲む迄、ワインを飲むことはないんだ」。<sup>26</sup> そこで、彼らは賛美の歌を歌って、オリーブ山に向かった。

22. 「食事」 過越祭の食事であれば、ニサンの月の15日の日没後の食事になる。従って、この日は木曜日となる。尚、過越祭の食事で食されるのは、苦菜、種なしパン、羊の肉、ワインである。

また、マルコもマタイもルカも、イエスが弟子たちと摂る最後の食事が過越の食事（ニサンの月の15日：木曜日）であるとしているが、ヨハネ福音書では木曜日は過越祭の始まる前日であり、過越祭は金曜日から始まるとしている。

22~24 イエスがパンを取って「これは私の体だ」といい、ワインを飲んだ後「これは私の血だ」と言ったという記述は、マルコ・マタイ・ルカの共観福音書に記されていて、これが、後にキリスト教の中心的な典礼（聖餐式・聖体拝領）になる。しかし、ヨハネ福音書にはこうした記述はない。その代わりに、ヨハネ福音書には、イエスが弟子たちの足を洗い、互いに愛し合え、という新しい掟を与えることになっている。

尚、このときイエスと弟子たちは実際に食事をしたのであって、キリスト教が行っている典礼のような象徴的儀礼をしたのではない。

24. cf. モーセは血を民に降り注ぎ、これをもって民と Yahweh との契約の印とした（出エジプト記 24:8）。

### ペテロの誓い (14:27 ~ 31)

(マタイ 26:31 ~ 35、ルカ 22:31 ~ 34、ヨハネ 13:36 ~ 38)

<sup>27</sup> イエスは弟子たちに言った。「聖書がまさに『私は羊飼いを打ち、羊は散らされる』と言っている通り、君ら全員、僕を拒むことになる」。<sup>28</sup> でも、僕が蘇った後、僕は君らより先にガリラヤに行くことになる」。<sup>29</sup> ペテロは「たとえ他のみんなが拒んでも俺は絶対拒まない」と言った。イエスは答えて言った。「まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、君は僕を知らないと言ったことになるだろうね」<sup>31</sup> しかし、ペテロは「たとえ俺が先生と共に死ななくちゃならないことになっても、俺は先生を知らないなんて絶対言わないよ」と自信ありげに言った。他の全ての者も同様に言った。

27. 「私は羊飼いを打ち、羊は散らされる」 ゼカリヤ書 13:7

イエスの祈り (14:32～42)  
(マタイ 26:36～46、ルカ 22:39～46)

<sup>32</sup> イエスは弟子たちと共にゲッセマネ (Gethsemane) と呼ばれる場所に行って、彼らに「僕が祈っている間ここに座っていなさい」と話した。<sup>33</sup> イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れて行った。イエスは悲しみ心痛めて<sup>34</sup> 三人に「僕はとても悲しくて、まるで死んでるような感じがするんだ。ここに居て僕と一緒に起きていなさい」と話した。<sup>35～36</sup> イエスはほんの少し歩いて行った。そこで、イエスは地面に跪いて祈った。「父さん、もしできるんだしたら、僕にこのことが起こらないようにしてほしい。父さん、父さんはなんでもできる。苦しみをもたらすこの杯を飲ませないで欲しいんだ。でも、僕が望むことではなくて、父さんが望むことをしてください。<sup>37</sup> イエスが戻ってくると弟子たちは眠っていたので、イエスはシモン・ペテロに言った。「眠っているのかい。僅か1時間も目を覚ましてくれなかったのかい。<sup>38</sup> 起きていて、誘惑されないように祈りなさい。君は正しいことをしたいと思ってるけれど、君は弱いんだ。<sup>39</sup> イエスは戻って同じ祈りを祈った。<sup>40</sup> しかし、イエスが弟子たちのところに戻ってきたとき、彼らはまた眠っていたのであった。弟子たちは目を開けていることすらできなかったのだから、彼らは何と言って申し開きしていいのかわからなかったのである。<sup>41</sup> イエスが弟子たちのところに三度目に戻ってきた時言った。「君らはまだ眠って休んでいるのかい。もう十分じゃない。人の子が罪人に手渡される時が来たんだ。<sup>42</sup> さあ立ち上がって。行くよ。僕を裏切る一人もここにやって来てる」。

32. 「ゲッセマネ (Gethsemane)」 その正確な場所は不明。キドロン (Kidron) の谷の東側の地 (エルサレムから見るとオリブ山の方向でその西斜面) と考えられる。

35～36. 「父さん、父さんは」 最初の「父さん」はアラム語で、親しみを込めた「父」という表現で、次の「父さん」はギリシャ語で表記されている。

イエスの逮捕 (14:43～52)  
(マタイ 26:47～56、ルカ 22:47～53、ヨハネ 18:3～12)

<sup>43</sup> イエスがまだ話をしていると、裏切り者のユダがやってきた。ユダは12弟子の一人であり、剣と棍棒で武装した暴徒たちもユダと共にいた。彼らは祭司長たちや長老、律法学者たちから遣わされたのであった。<sup>44</sup> ユダは暴徒たちに予め「俺が口づけする男を捕まえる。この男をきつく縛りあげて連れていけ」と話しておいたのである。<sup>45</sup> ユダはイエスに近づいて来て、「やあ先生」と言って、イエスに口づけした。<sup>46</sup> そして、暴徒たちはイエスを掴み逮捕した。<sup>47</sup> そこにいた (弟子たちの) ある者が剣を抜き、大祭司の部下に斬りつけ、その耳を切り落とした。<sup>48</sup> イエスは暴徒たちに言った。「どうして君らは、剣と棍棒をもってやって来て、僕を犯罪人のように捕まえるんだ。<sup>49</sup> 毎日いつも、僕は君らと一緒にいて、神殿で教えていたんだけど、君らは僕を捕らえはしなかったね。でも、聖書が言っていることが成就しなければならなかったんだ。<sup>50</sup> イエスの弟子たちはイエスを置いたまま皆走り去ったのである。<sup>51</sup> 弟子たちと一緒に、亜麻布だけをまとった若者がいたのであるが、暴徒たちがイエスを捕まえると、<sup>52</sup> この若者はこの布を脱ぎ捨て裸で逃げて行った。

44. 「口づけする」 ユダヤ人は頬に口づけすることでお互いに挨拶を交わした。

47. 「(弟子たちの) ある者」 ヨハネ福音書のみ、ペテロとしている。

47. 「剣を抜き」 イエスの弟子は武装していたということになる。

47. 「大祭司の部下」 ヨハネ福音書 (18:10) によると、耳を切り落とされたのは、マルコスという名前の部下であったとされる。

47. 「耳を切り落とした」 このとき、イエスは、マタイ福音書 (26:52) では、弟子に剣を納めさせて、「剣を使う者は剣により滅ぶ」と語ったとされ、ルカ福音書では、弟子を制した後、負傷した者の耳を癒したとされ、ヨハネ福音書 (18:11) では、弟子を制した後、「父の杯は受けるべき」と語ったということにされている。

51. 「若者」 マルコ福音書のみ登場、誰であるのか不明である。尚、「若者」という言葉は、16:5にも登場し、そこでは、イエスの墓を訪れた女性たちが墓の中で白い衣をまとった若者に会うことになっているが、両者が同じ人物かどうかは不明である。



52. 着物を脱ぎ捨てて裸で逃げたという記述は、創世記 39:12 にヨセフ物語やアモス書 2:16 にもある。裸で逃げたという記述は、イエスの付き従ってきた者が自暴自棄になって逃げ出したということ象徴的に表しているのか?

#### 法廷での尋問 (14:53~65)

(マタイ 26:57~68、ルカ 22:54~55, 63~71、ヨハネ 18:13~14,19~24)

<sup>53</sup> イエスは大祭司のところに連れて行かれた。そこには、祭司長たちや長老たち、律法学者たちも集まっていた。<sup>54</sup> ペテロは、少し距離を置いて、後を追った。そして、大祭司の家の中庭までやって来て、ペテロは暖をとっていた番人と一緒に座った。<sup>55</sup> 祭司長たちと(サンヘドリンの)全議員たちは、イエスを死刑にする為、その罪を告発する者を探し出そうとした。しかし、イエスを告発する者を見いだすことはできなかった。<sup>56</sup> 多くの者たちがイエスに対して偽証をしたけれど、彼らの証言は食い違っていた。<sup>57</sup> 結局、何人かの者が立ち上がって、イエスについて偽証を述べた。この者たちは言った、<sup>58</sup> 「我々は、我々が建てたこの神殿をこの者は壊すということを聞いた。この者は、3日間で別の神殿をたった一人で建てることができるとも言っている」。<sup>59</sup> しかし、このときも、彼らの証言は食い違っていたのである。<sup>60</sup> 大祭司は議場で立ち上がって、イエスに尋ねた、「どうしておまえは自らを弁護しようと何か言わないのか。この者たちがおまえに対してしている告発が聞こえないのか」。<sup>61</sup> しかし、イエスは黙り続け一言も言葉を発しなかった。(そこで)大祭司は別の問いをイエスにした。「おまえは、輝かしい神の子であるメシアなのか」。<sup>62</sup>(すると)イエスは「そう、僕がそうだ」と答えた。「まもなく、君らは人の子が全能の神の右に座って、天の雲と一緒にやってくるのを見るようになる」。<sup>63</sup> そう答えると同時に、大祭司はその衣服を引き裂き叫んだ。「我々にこれ以上証人が必要であろうか」。<sup>64</sup> そちたちは、この者が神であると言い張ったのを聞いたな。どうするのだ」。彼らは皆、イエスを死罪にすることに同意した。<sup>65</sup> 何人かの者たちがイエスにつばを吐き出し、イエスに目隠しし、拳でイエスを殴って、「誰がおまえを殴ったか言ってみろ」と言った。それから、番人たちがイエスを監視することになったが、この者たちもイエスを殴ったのである。

53. 「イエスは大祭司のところに連れて行かれた」 ニサンの月の 15 日(木曜日)の夜にイエスは大祭司の邸宅に連行されたことになる。

53. 「ペテロは、少し距離を置いて、後を追った」 マルコによるとイエスが連行された後、弟子たちは皆逃げだし、辛うじてペテロだけが遠くからイエスの後を追う展開になっている。ただし、ヨハネ福音書(18:8)では、イエスが弟子たちを去らせたとしている。

54. 「大祭司の家」 伝承によると、この時代の祭司長はカヤパ(Caiaphas)で、カヤパはエルサレムの上の町(ここにはヘロデの宮殿、ハスモン朝の宮殿もあった)に大邸宅を構えていたということである。

54. 「ペテロは暖をとっていた番人と一緒に座った」 ヨハネ福音書(18:15)によると、シモン・ペテロは大祭司の知り合いであったので、中庭に入ることができたとされている。しかし、ペテロは一介の漁師に過ぎないので大祭司の知り合いであり得る筈はない。

55. ~ サンヘドリンが夜に開かれることはないし、サンヘドリンの全議員が大祭司邸に夜半に集まることもない筈である。

55. 律法(民数記 35:30)によると、死刑に処するには複数の者がその者の罪を告発しなければならない。

61. 「おまえは、輝かしい神の子であるメシアなのか」 メシアはイスラエル王を指すので、もしこれに yes と答えるのなら、勝手にイスラエル王だと名乗ることになり、それは即ちローマ帝国への反逆罪に当たるとなるので、大祭司はこのような問いかけをしたのである。

63. 「大祭司はその衣服を引き裂き」 ユダヤの律法(レビ記 10:6、21:10)では、大祭司は衣服を引き裂いてはならないとされている。イエスが自分は神の子であると言い張り、神を冒瀆したと考えた大祭司は、本来は許されない行為を敢えてすることで、その怒りを表したのである。

64. 「この者が神であると言い張った」 ユダヤの律法(レビ記 24:16)では、神を冒瀆する者は、石打の刑で死刑にされなければならないとされている。

#### ペテロ、イエスを知らないと言う (14:66~72)

(マタイ 26:69~75、ルカ 22:56~62、ヨハネ 18:15~18,25~27)

<sup>66</sup> ペテロがまだ中庭にいたとき、大祭司に仕える女中がやって来て、<sup>67</sup> ペテロが暖をとっているのを目にした。女中はペテロを見て驚いて「あんたはナザレのイエスと一緒にいたわよね」と言った。<sup>68</sup> ペテロは「違うよ。俺はあんたが何を言ってるのか分からないよ。俺にはあんたが言ってることが見当もつかないよ」と言った。(それから)ペテロは門を出ていくと、鶏が鳴いたのである。<sup>69</sup> 女中が再びペテロを見かけたので、そこに立っている人々に「この人、あの人たちの一人だわ」と言った。<sup>70</sup> 「違う。俺は違うよ」、ペテロはそう答えた。ほんの少し後で、この人々の中の何人かがペテロに言った、「おまえはあいつらの一人に違いない。おまえはガリラヤ人だからな」と。<sup>71</sup> この時、ペテロは己の状況を呪ったが誓うように言った、「俺はおまえさんたちが話している男なんて知らないよ」と。<sup>72</sup> するとすぐ、鶏が再び鳴いたのである。ペテロはイエスが彼に言った、「鶏が二度鳴く前、君は僕を知らないと言おうことになるだろうね」という話を思い出したのである。それで、ペテロは泣き出したのである。

68. 「鶏が鳴いたのである」 この箇所は最も重要な2つの写本にはない。14:30の「鶏が二度鳴く」という預言が文字通り成就しなければならないので、14:72の「鶏が再び鳴いた」の前に、後の転記者が、この部分を挿入したと思われる。因みに、本来、マルコが14:30に書いた「鶏が二度鳴く」というのは、それに該当する時刻の表現であって、鶏が別々の時刻に二度鳴くということをマルコは言いたかったのではなかったと思われる。

70. 「おまえはガリラヤ人だからな」 ガリラヤ人はガリラヤ人特有の方言(アラム語のガリラヤ方言)で話しをしていたので、(アラム語のユダヤ方言を話す)ユダヤ人と区別できたのである。

## 第 15 章

### ピラトの尋問 (15:1~5)

(マタイ 27:1,2,11~14、ルカ 23:1~5、ヨハネ 18:28~38)

<sup>1</sup> 翌朝早く、祭司長たち、長老たち、及び律法学者たちは最高法院 (サンヘドリン) に集まった。彼らはイエスを縛り上げてピラトの下に引き渡したのである。<sup>2</sup> ピラトはイエスに「おまえはユダヤ人どもの王なのか」と尋ねた。「それは君が言ってることに過ぎないね」とイエスは答えた。<sup>3</sup> 祭司長たちはイエスに対して多くの罪状を付けて告発したのである。<sup>4</sup> そこで、ピラトは再びイエスに尋ねた。「何も言わないのか。この者たちは、おまえがどのような罪を行ったかを喋っているのに、それが聞こえないのか。」<sup>5</sup> しかし、イエスは答えなかったので、ピラトはあきれたのである。

#### 1. 「翌朝早く」 金曜日

1. 「最高法院 (サンヘドリン)」 実際に、どのような身分の者たちが集まって、どういう権限を持っていたのかは不明である。

1. 「ピラト」 ポンティオ・ピラト (Pontius Pilate) は、ユダヤ総督であり、ティベリウス (Tiberius) 帝の時代 (14~37 年) の 26 年から 36 年までその任にあった。ローマの歴史家タキトゥス (Tacitus) は「年代記」にティベリウス帝の時代、ピラトによってイエスは処刑されたと記している。アレキサンドリアのユダヤ人哲学者フィロン (Philo) は、ピラトがエルサレムの宮殿に皇帝の名が刻まれた像を設置しそれを神として拝するようユダヤ人に強要したと記述している。また、ユダヤ人歴史家のヨセフスは、ピラトが皇帝の像をエルサレムに設置したこと、エルサレムに水道管を設置した代金として神殿から宝物をせしめたことを記している。

1. 「ピラトの下に引き渡した」 ローマは、ユダヤの掟を破った罪で処刑する権限をユダヤ人議会に与えていたが、ローマに対する反逆者に対しては、ローマ側 (つまりユダヤ総督) が直接反逆者を処刑した。

2. ピラトがイエスを尋問した場所をマルコは記述していないけれど、ユダヤ総督がエルサレムに滞在したときに用いていたのはヘロデ大王の宮殿であろうから、この宮殿で尋問した可能性がある。

2. 「それは君が言ってることに過ぎないね」 返答拒否の表現である。もし、ここでイエスが「そうだ」と答えれば、ローマの許可無く自分はユダヤの支配者であると答えたことになるので、即、ローマに対する反逆罪となる。

5. ピラトにはイエスを処刑する理由はないということになる。マタイ福音書 (27:19) には、ピラトの妻 (福音書にはその名前は記されていないが、後の伝承としてプロクラ (Procla) またはプロキュラ (Procula) という名前であったとされている) が登場し、ピラトの妻は、イエスは正しい人物であるから処罰しないようにと伝言したと書かれている。尚、ルカ福音書 (23:22) には、ガリラヤ領主ヘロデ・アンティパスをピラトの尋問場面に登場させ、イエスには死刑にする罪はないと言ったということが記されている。

また、マタイ福音書のみ、イエスの血 (つまり死) に対する責任をピラトが拒んで手を洗うという様子を記しており、イエスの血に対する責任はユダヤ人子々孫々までであるということを書いて、これがキリスト教徒がユダヤ人を迫害する根拠となり、多くのユダヤ人が虐殺される結果を生んだのである。

### 死刑判決 (15:6~15)

(マタイ 27:15~26、ルカ 23:13~25、ヨハネ 18:39~19:16)

<sup>6</sup> 過越し祭では、ピラトは民衆が願い出た囚人一人を釈放することになっていた。<sup>7</sup> そしてこのとき、バラバ (Barabbas) という名の囚人がいた。バラバ及び数名の者たちが騒乱の際に殺人を犯した罪により逮捕されていたのである。<sup>8</sup> さて、民衆はやって来てピラトにいつもの通り囚人を釈放するように願い出た。<sup>9</sup> ピラトは人々に「おまえたちはユダヤ人の王を釈放して欲しいのか」と尋ねた。<sup>10</sup> ピラトは、祭司長たちがイエスを妬んでいたのも、イエスを自分のもとに引き渡したことを知っていたのである。<sup>11</sup> しかし、祭司長たちは民衆にバラバを釈放して欲しいとピラトに願い出るように申し渡したのである。<sup>12</sup> そこでピラトは民衆に「おまえたちがユダヤ人の王であると言っているこの男をどうして欲しいと言うのか」と尋ねた。<sup>13</sup> (そこで) 彼らは「この男を十字架に打ちつけろ」と叫んだのである。<sup>14</sup> ピラトは (尚も) 尋ねた。「でも、この男はどんな罪を犯したのだ。」(すると) 民衆は更に大きな声で「この男を十

十字架に打ちつけろ」と叫んだのである。<sup>15</sup> ピラトは民衆を満足させようと思ったので、バラバを釈放し、兵士たちに命じてイエスを鞭で打って十字架に打ち付けるように命じたのである。

6. 歴史的にはユダヤ総督がこのようなことを行っていたことは確認できない。そもそも、ローマ帝国に対する反逆者を赦免するということがあり得ない。

7. 「バラバ」 アラム語で、bar Abba (父の子) という意味 (「神の子」を連想させる) で、本来は個人名ではない。尚、マタイ福音書 (27:16) では、この名をイエス・バラバとしている (ギリシャ語とアラム語の奇妙な組み合わせであり、本来であればイエシュア (ヨシュア) ・バル・アッパとすべきであろう)。ひょっとすると、バラバという名前の囚人はイエスそのものであり、実際に民衆は権力者に対して、バラバ即ちイエスを釈放するように要求したのかも知れない。しかし、この話 (マルコにとっては伝聞であるうけれど) を直接認め<sup>したた</sup>ることが叶わなかった為、話をこのように作り変えた可能性があると思われる。福音書の著者はいずれもローマに阿るような書き方をしている (せざるを得なかった) のである。

尚、ユダヤ人社会では、名前は誰々の子の何々という風に呼ばれる。例えば、アラム語では、シモン・バル・ヨセフ (ヘブライ語では、シモン・ベン・ヨセフ) というようになる。イエスは、本来なら、イエシュア・バル・ヨセフと呼ばれるべきであるが、ヨセフの実子ではないので、そう呼ぶことはできない。困みに、父なし子の場合は、「バル・アッパ」(父の子・天の子) と呼ばれていた (差別・嘲笑されていた) とも言われる。つまりは、このバラバこそイエスそのものであることになるのである。

8. 「民衆」 この「民衆」は、イエスを支持し付き従ってきた民衆ではなく、エルサレムの権力者側が用意した者たちであろうとすることもできる。

11. 「民衆にバラバを釈放して欲しいとピラトに願い出るように申し渡した」 ユダヤ人の側からすれば、武器を取って果敢にローマと戦ったバラバは英雄であるが、イエスは非暴力を貫いただけの無力な人物であるから、祭司長たちにそそのかされなくともバラバを助けたいと願っただろう。しかし、バラバはローマ当局に対して暴力的に犯行を企てた許し難い人物であり、その釈放を要求するということは、バラバの運動を支持するということになるから、それだけで反逆者とされ処刑されることになる筈である。つまりは、そういう要求はできる筈もないということである。

13. 「十字架」 十字架による処刑は、ローマが発明した処刑方ではないが、当時、脱走奴隷やローマに対する反逆者などに対して用いられた最も残酷な処刑法の一つである (他に火あぶりの刑や獣の餌食とされる刑もある)。公開処刑であり、十字架刑はできるだけ人目につく場所で執り行われた。見せしめなのである。この刑に処せられる者は、十字架の横木を刑場まで運ばされて、刑場で十字架に付ける前に殴られ衣服をはぎ取られた後、横木に両腕を紐で固定されるか、或いはその両手首を横木に釘で打ち付けられるかして固定される。十字架に固定されると罪人は息ができにくくなり窒息してやがて死に至ることになる。苦しみをできるだけ延ばす為に、腰の部分に板を当ててそこに座らせるような恰好を取らせて、数日間晒して殺す場合もあった。また、その死体は猛禽や野犬によって食いちぎられる場合もあった。よって、遺体もまともに残らないこともあるのである。

13. 「この男を十字架に打ちつけろ」 ユダヤ人の中では、石打にするのが専らの処刑方であるにも拘わらず、マルコはユダヤの人々に対してイエスを十字架に架けると言わせているのも妙な話である。

### 兵士たちがイエスを嘲弄する (15:16 ~ 21)

(マタイ 27:27 ~ 30、ヨハネ 19:2 ~ 3)

<sup>16</sup> 兵士たちはイエスを砦の中庭に連れて行き、全兵士を集結させた。<sup>17</sup> 兵士たちは、イエスに紫の衣をまといせ、イエスの頭に茨で造った冠をかぶせた。<sup>18</sup> 彼らはイエスをからかって「よう、ユダヤ人の王様よう」と叫んだ。<sup>19</sup> そして、彼らはイエスの頭を棒で殴り、イエスに唾を吐き、跪いてイエスを拝むようなふりをした。<sup>20</sup> 兵士たちはイエスを嘲笑した後、紫の衣をはぎ取り、イエスが身につけていた衣を着させ、イエスを釘で十字架に打ち付けた。<sup>21</sup> キレネ (Cyrene) 人のシモンという男が田舎からやって来て通りかかったので、兵士たちはシモンにイエスの十字架を担がさせた。シモンはアレクサンドロスとルフォスの父であったのである。

16. 「砦」 エルサレム内の砦 (要塞) といえば、アントニア要塞となるが…。

21. 「キレネ (Cyrene)」 今日のリビアにあった町。ここには、前 4 世紀にエジプトにギリシャ人のプトレマイオス王朝が誕生した時代から、ユダヤ人が居住していた。尚、キレネから来たキリスト教徒がアンティオキア (Antioch) の教会で活躍したことが使徒言行録に記されている (12:20, 13:1)。

21. 「兵士たちはシモンにイエスの十字架を担がせた」 十字架の縦木は刑場に用意されていたが、横木は罪人に背負わせて刑場まで歩かせた。しかし、イエスの場合、既に体力を消耗しており横木を

担がせることが無理だと判断した為か、兵士たちはそこに居合わせたシモンという名の男に横木を運ばせたのかも知れない。或いは、マルコが作った話なのかも知れない。つまり、マルコの共同体でアレクサンドロスとルフォスなる人物が何らかの重要な地位にあったので、その親のシモンなる人物をこの話に登場させたのかも知れない。

21. 「アレクサンドロス (Alexander)」

21. 「ルフォス (Rufus)」 1世紀のギリシャ-ローマ世界では一般的な名前である。ローマ書 (16:13) で、パウロが挨拶しているルフォスと同一人物の可能性はある。

イエス、十字架に付けられる (15:22 ~ 32)

(マタイ 27:31 ~ 44、ルカ 23:27 ~ 43、ヨハネ 19:17 ~ 27)

<sup>22</sup> 兵士たちはイエスを、その名が「骸骨の地」を意味するゴルゴタ (Golgotha) という地に連行した。<sup>23</sup> そこで、彼らは痛みを和らげる薬を混ぜたワインをイエスに与えたのであるが、イエスはそれを飲むことを拒んだ。<sup>24</sup> 兵士たちはイエスを十字架に打ち付けて、誰がイエスの衣を分捕るのか賭けをした。<sup>25</sup> 兵士たちがイエスを十字架に付けたのは朝の9時頃であった。<sup>26</sup> イエスが十字架に付けられた訳を示す札が掲げられ、そこには「この者はユダヤ人のども王である」と書いてあった。<sup>27 ~ 28</sup> 兵士たちは、イエスの右と左に、罪人二人を十字架につけた。<sup>29</sup> そこを通った人々はイエスにひどい言葉を浴びせた。彼らは頭を振りながら怒鳴った。「ほう、おまえは神殿を壊して3日で建て直すんだってな。<sup>30</sup> 十字架から降りてきて自分自身を救ってみようよ。」「<sup>31</sup> 祭司長たちと律法学者たちもまたイエスを嘲笑した。彼らはお互いに言い合った。「こいつは他の者を救ったというが、自分自身は救うことができないようだな。<sup>32</sup> もし、こいつがイスラエルの王であるメシアなら、十字架から降りてこれる筈だ。それを見たら信じようじゃないか。」「(イエスと一緒に十字架に付けられた) 二人の罪人もイエスを罵った。

22. 「ゴルゴタ (Golgotha)」 ウルガータのラテン語訳聖書ではカルバリー (Calvary) とされている。十字架刑の刑場はエルサレムの城壁の外の高台にあったとしているが、その場所は特定できないが、4世紀以降の伝承では、聖墳墓教会のあるところがゴルゴダではないかとしている。

23. 「痛みを和らげる薬」 「没薬」、ある種の麻酔作用をもつ薬であり、これを与えるということは温情を与えるということになる。

29. 「頭を振りながら怒鳴った」

32. 「二人の罪人」 マタイ福音書 (27:44) では二人は強盗であったと記している。因みに、ローマに対する反逆者ではなければ十字架に架けられることはない。尚、ヨハネ福音書にはイエスの両脇に二人の罪人が十字架につけられたという記述はない。

32. 「二人の罪人もイエスを罵った」 マタイ福音書 (27:44) も同様に記している。しかし、ルカ福音書 (23:39 ~ 43) によると、一方の罪人はイエスを罵ったが、もう一人はイエスは罪がなかったにも拘わらず十字架に架けられたのだと証言している。

イエスの死 (15:33 ~ 41)

(マタイ 27:45 ~ 56、ルカ 23:44 ~ 49、ヨハネ 19:28 ~ 30)

<sup>33</sup> 昼頃、空は暗くなり、この状態が3時頃まで続いた。<sup>34</sup> そして、3時頃、イエスは「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と、これを訳すと、「神よ、神よ、どうして僕を見捨てたんだ」という意味であるが、大声で叫んだ。<sup>35</sup> そこには何人かの人々が立ってイエスのこの言葉を聞いて、「この男はエリヤを呼んでるぞ」と言った。<sup>36</sup> (すると) 一人の男が走って行き、海綿を取り、それをワインに浸した後、棒の先に付けてイエスに飲まそうとした。(しかし) この男は、「エリヤがやって来てこいつをひきずり降ろすかどうか待っててみようぜ」と言った。<sup>37</sup> イエスは大声をあげた後亡くなった。<sup>38</sup> すると同時に神殿内の幕が上から下まで真っ二つに裂けたのである。<sup>39</sup> ローマ軍の百人隊長がイエスの正面に立っていたのであるが、百人隊長はイエスが亡くなる様子を見て、「この人は本当に神の子であった」と言った。<sup>40 ~ 41</sup> 何人かの女性たちが遠くから (イエスを) 見ていた。彼女たちはイエスと一緒にエルサレムにやってきたのである。彼女たちは、ずっとイエスに従ってきて、イエスがガリラヤに居たときはずっとイエスを助けていた人たちであった。この女性たちの中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセフの母マリアがいた。サロメもまたこの中にいた。

33. 「昼頃」 ローマの時刻で第6刻。

33. 「3時頃」 ローマの時刻で第9刻。

33. この時代にパレスチナで皆既日食があったということは確認されていないし、皆既日食が3時間も続くということはない。「空は暗くなった」というのは、あくまでも宗教的な象徴である。古代に於いては重要な出来事に際しては様々な自然現象が起こるとされたのである。例えば、ユリウス・カエサルが死んだときは流星が出現したとされている。尚、アモス書(8:9)に、Yahwehは、終わりの日には太陽を沈ませ、昼でも闇につつまむということが記されており、このことが成就したのであると、マルコは記しているのである。

34. 「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」 イエスの最後の言葉で、詩編22:2のアラム語版。マタイ福音書(27:46)では「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と記されており、こちらはヘブライ語版である。また、ルカ福音書(23:46)によると、イエスの最後の言葉は「父よ、この身を御手に委ねます」とされている。更に、ヨハネ福音書(19:30)では、「全ては終わった」がイエス最後の言葉であるとされる。福音書記者のいずれも生前のイエスを知らない。4人ともイエスの最期の言葉は何であったかは全く知らず、ただ伝聞に従って記しただけであるということになる。そして、その伝聞の内容も様々なものが流布していたということになる。

35. 「この男はエリヤを呼んでるぞ」 当時、ユダヤ人の中では、義人が苦しんでいる場合、エリヤが天から助けにくると信じられていたとされる。

36. 「ワイン」 この場合のワインは、酸化が進み酸味が強くなった安っぽいワインのことであり、兵士や下層階級にとっての酒である。イエスの最期を長引かせる為の気付け薬としての意味を持つ。

38. 「神殿内の幕が上から下まで真っ二つに裂けた」 神殿内にある至聖所(the Holy of Holies:大祭司が1年に1度だけユダヤ民族の贖罪の為に入る事が許された)は幕で外と仕切られていた。そして至聖所に神が臨在しているユダヤ人は考えていた。であるから、この幕が裂けたということは、至聖所にいる神が顕わにされたということである。更に言えば、これ以降、神はユダヤ人だけではなく異邦人にもオープンな存在になったのであると考えることもできる。勿論、このことは、実際におきた事実ではなく、象徴に過ぎない。

39. 「この人は本当に神の子であった」 最初にイエスが神の子であると証言したのは、異邦人であるローマの百人隊長であった、ということマルコは強調している。イエスの弟子たちは、イエスを神の子とは言わなかったし、結局のところイエスを見捨て皆離散したのに、この百人隊長はイエスの真の理解者となったということである。この証言をもってイエスの福音は異邦人にも(或いは異邦人にこそ)述べ伝えなければならないとマルコはしたのである。

40~41. 「マグダラ」 ガリラヤ湖西岸の港町。

40~41. 「マグダラのマリア」 Mary Magdalene. マグダラ(Magdala)出身のマリア。ルカ福音書(8:2)では、マグダラのマリアはイエスにより7つの悪霊を追い出して貰った女性として登場する。マグダラのマリアはイエスに付き従って行動した女性たちの一人であるが、その名前が記述されているのは、特に際だってイエスに付き従った証であろう。マグダラのマリアはイエスの死を見届けた一人であり、復活のイエスとその身を最初に現した人物がマグダラのマリアであるとしている(マルコ福音書の写本の一つにこうした記述がある)。

40~41. 「小ヤコブとヨセフの母マリア」 通常、「小ヤコブとヨセの母マリア」と訳される。マルコ6:3にイエスの兄弟としてヤコブとヨセ(フ)がいたとあるので、このマリアはイエスの実の母である可能性が大きい(マルコは同一人物として捉えていたと思われる)。

40~41. 「サロメ」 イエスの墓が空っぽになっていたことを確認した女性の一人である(マルコ16:1)。並行箇所であるマタイ福音書(27:56)を見ると、ゼベダイ(Zebedee)の子らの母となっているので、このサロメはイエスの弟子ヤコブとヨハネの母親である可能性が大きい。

#### イエスの埋葬(15:42~47)

(マタイ 27:57~61、ルカ 23:50~56、ヨハネ 19:38~42)

<sup>42</sup> さて、安息日の前日の夕方になった。ユダヤの人たちは聖なる日の為の準備をしていたのである。  
<sup>43</sup> アリマタヤ(Arimathea)出身のヨセフという名の男が、果敢にもピラトにイエスの遺体を(貰い受けたいと)願い出た。ヨセフはユダヤ人の議会で非常に尊敬されていた議員であり、ヨセフもまた神の王国がやって来るのを待ち望んでいたのである。<sup>44</sup> ピラトはイエスが既に死んだと聞いて驚き、百人隊長を呼びイエスが死んでから大分経っているかどうか調べさせた。<sup>45</sup> 百人隊長がピラトに報告した後、ピラトはヨセフにイエスの遺体を貰い受けることを許可した。<sup>46</sup> ヨセフは亜麻布を購入し、十字架からイエスを降ろした。ヨセフは亜麻布で遺体を包み、堅い岩を掘った墓の中に遺体を安置した。それから、ヨ

セフは墓の入り口に(入り口をふさぐ為)大きな石を転がして置いた。<sup>47</sup> マグダラのマリアとヨセフの母のマリアは、(この様子を見て、遺体が安置されている場所を覚えた。

42. 「安息日」 Sabbath, 1:21 を参照すること。

42. 「安息日の前日の夕方」 金曜日が終わろうとしている時間である。

43. 「アリマタヤ (Arimathea)」 エウセビオスは、エルサレムの南西の Lydda (1 Macc 11:34, Josephus Ant 13:127) の近くにあったとしているが、エフライムの丘陵地の西にあって、ここはエルサレムからみれば北西の位置にあるユダヤ人の都市であり、ヘブライ名は Ramah 或いは Ramathaim-zophim または Rathamin として知られていたのが、Arimathea とされている。この町は、サムエルとその両親の人生に於いて一つの役割を担った場所であり (1 Sam 1:1, 19; 2:11; 7:17; 8:4)、ルカ福音書 (23:50) でユダヤ人の町であったと記されている。

43. 「アリマタヤ出身のヨセフ」 マルコはヨセフを身分の高い人物 (神の国を待ち望んでいる) として描いているが、マタイはイエスの弟子 (金持ちである) として、ルカはサンヘドリンのメンバー (神の国を待ち望んでいる) として、ヨハネはユダヤ人を恐れ身を隠していた (イエスの弟子であることを隠していた) 人物として描いている。

43. 「ユダヤ人の議会」 マルコによると必ずしも最高法院 (サンヘドリン) を指してはいない。

44~46 イエスが息を引き取ったのが金曜日の午後3時頃であり、安息日 (土曜日) の前日 (金曜日) の夕方 (日没と同時に安息日の土曜日へ移行する) であるから、息を引き取ってからその遺体が引き取られるまで3時間ほどしか経過していないことになる。しかも、イエスの死を確認したのは、イエスが神の子であると証言した百人隊長である。もし、アリマタヤのヨセフとこの百人隊長が謀をしていたら、瀕死の状態にあったイエスを墓という安全な場所に一時的に隠すことも可能であった可能性も否定はできない。そして、安息日の内に、別な場所に移して手当したから、日曜日には墓の中にはあるはずだと考えていた遺体を女性たちは発見できなかったと推理することもできる。

46. 「亜麻布」 当時、亜麻布は遺体を包むのに用いられたのである。

47. イエスの十字架刑による死を見届け、遺体を安置した墓を確認し、きちんと埋葬しようと墓を訪れたのは、結局のところイエスに付き従ってきた女性たちだけであったのである。女性たちの行為は、卑怯にもイエスを見捨てて逃げ隠れた男の弟子たちと対照的である。

## 第16章

### イエスの生存 (16:1~8)

(マタイ 28:1~8、ルカ 24:1~12、ヨハネ 20:1~10)

<sup>1</sup> 安息日の後、マグダラのマリア、サロメとヤコブの母マリアはイエスの遺体つける為の香を購入した。<sup>2</sup> 日曜日の朝早く、日が昇ろうとしている頃、三人は(イエスの)墓に行った。<sup>3</sup> その途中、彼女たちはお互いに、「誰か、私たちのために(墓の)入り口にある石を転がして(どけて)くれる人っているかしら」と言っていた。<sup>4</sup> しかし、辿り着いて見ると、(墓の入り口を塞いでいた)石は既に転がされてあったのである、その石は巨大であったのにもかかわらず。<sup>5</sup> 女性たちは、墓の中に入ると、右側に白い衣をまとった一人の若者が座っていたので、ひどく驚いた。<sup>6</sup> その若者は言った。「そんなに驚かないで。あなた方は、十字架につけられたナザレのイエスを捜しているでしょ。神様がイエスを蘇らせたので、彼はここにはいないんです。彼の遺体を置いた場所が分かるでしょ。<sup>7</sup> さあ、行って彼の弟子、特にペテロに話して下さい。イエスはあなた方よりも先にガリラヤに行くでしょうってね。あなた方はイエスが話していたように、ガリラヤの地でイエスを見ることになるでしょう」。<sup>8</sup> 女性たちは狼狽え震え上がって、墓から逃げ出した。彼女たちはとても恐ろしかったので(彼女たちに)起こったことを誰にも話すことはできなかったのである。

1. 「安息日の後」 安息日(土曜日)の日没後。それにしても、夜中に香を購入することが可能なのだろうか?

1. 「マグダラのマリア、サロメとヤコブの母マリア」 十字架のイエスを遠くから見守った3人女性たち。マタイ福音書(28:1)では、マグダラのマリアと他のマリアの二人になっている。ルカ福音書(23:55)では、イエスと共にガリラヤから来た女性たちとなっている。ヨハネ福音書(20:1)では、墓に最初に行ったのはマグダラのマリアということになっている。

4. 「石は既に転がされてあった」 マタイ福音書(28:2)では、(天使による)地震が起きて石は転がされたとしている。ルカ福音書(24:2)及びヨハネ福音書(20:1)では、マルコ同様に、単に石が転がされてあったとしている。ただし、ヨハネ福音書(20:2)では、それを見つけたマグダラのマリアが、ペテロとイエスが愛した弟子の二人に、このことを話したとしている。

尚、マタイ福音書(28:4)では、墓には見張りの兵士たちがいたのであるが、天使を見て恐怖心の余り気絶したような状態になっていたと記されている。

5. 「墓の中に入ると」 最初に墓の中に入るのはマルコ福音書では(3人の)女性たちであり、ルカ福音書(24:3,12)ではガリラヤからイエスに付き従ってきた女性たち(24:10に、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリアや一緒にいたその他の女性たちとしている)が墓に入り、その後この話を聞いたペテロが墓の中を覗いたということにされているが、マタイ福音書(28:2~5)では二人の女性たちは墓の中には入ってはいない。これに対して、ヨハネ福音書(20:2~6)では、マグダラのマリアから聞いたペテロとイエスの愛する弟子が墓へ駆けて行き、イエスの愛する弟子は先に着いたのだが墓の中をのぞいただけで、最初に墓に入ったのはペテロであるとしている。

5. 「白い衣をまとった一人の若者が座っていた」 マタイ福音書(28:2~3)では、入り口の墓石を転がした天使が、白い衣を着て、その石の上に乗っていたとし、墓の中の様子は記述していない。ルカ福音書(24:3~4)では、墓の中に入った女性たちは遺体を発見できず途方に暮れていると輝く衣をまとった二人の人間が出現したと記している(女性たちと女性たちから話を聞いたペテロは墓の中にイエスの遺体を見つけることができなかったとされている)。ヨハネ福音書(20:6~8)では、墓の中に入ったペテロとイエスが愛する弟子の二人は誰にも会わず、遺体を包んでいた亜麻布が遺体を安置したところとは別の場所にあった(つまり、遺体は無くなっていた)ことだけを確認したということになっている。

穿った見方をすれば、この若者はアリマタヤのヨセフの協力者であるということもできる。

7. 「特にペテロに話して下さい」 十二弟子(この時は11人となっていたが)の中で、筆頭であったのがペテロであったということはこの記述からも知ることができる。

7. 「イエスはあなた方よりも先にガリラヤに行く」 マルコは復活のイエスは先ずガリラヤに行き、そこでやがて到着するであろう弟子たちに出現すると言っている。ところが、ヨハネ福音書(20:19)では、追っ手から逃げていた弟子たちの(エルサレムにあった)隠れ家にイエスは出現している。ルカ福音書(24:13~16)では、復活したイエスは、エルサレムから歩いて来た二人の弟子たちにエマオで現れたということになっている。マタイ福音書(28:9)に於いて、復活のイエスが最初に現れるのは、



イエスの墓にやって来たマグダラのマリアと他のマリアにで、エルサレムないしはその近郊で出現したということになっている。

7. 「ガリラヤの地でイエスを見ることになる」 マルコでは、墓の中にいた若者が3人の女性たちに、ペテロと弟子たちに伝えるように言った言葉であるが、マタイ福音書(28:9)では、マグダラのマリアと他のマリアに現れたイエスが、弟子たちにガリラヤに行くように伝えよという話の中で言ったということになっている。

8. 「彼女たちはとても恐ろしかったので(彼女たちに)起こったことを誰にも話すことはできなかった」 イエスが復活したという話しを聞いた女性たちが、そのことを誰にも話さなかったということであれば、この話をどうしてマルコが知ることができたのかという疑問が残る。そして、女性たちは話すように命ぜられたペテロや弟子たちにも話さなかったということであれば、ペテロたちは、イエスの復活をどのようにして信じたのであろうか。

8. マルコ福音書はこの節で唐突な終わり方をしている。研究者によっては、原典には続きがあったが、正統派キリスト教会にとって不都合なことが記載されていたので、9節以降は削除されたとする者もいる。現在、写本によっては記載されている9節以降の記述は、全て後代に加筆されたものである。

### 後代に加筆された結びの言葉(その1)

#### イエスマグダラのマリアに現れる(16:9~11)

(マタイ 28:9~10、ヨハネ 20:11~18)

<sup>9</sup> 週の最初の日の朝早く、イエスが蘇った後、イエスはマグダラのマリアに現れた。以前、イエスは彼女から7つの悪霊を追い出したのであった。<sup>10</sup> 彼女はその場を去り、嘆き悲しんで泣いていた、イエスの友人たちに(このことの)話しをした。<sup>11</sup> 彼らはイエスが生きていてマリアがイエスを見たということを知っても、このことを信じようとしなかった。

9. 「イエスは彼女から7つの悪霊を追い出した」 マルコ福音書本文にはなく、ルカ福音書(8:2)に記載されている内容である。

9~ 重要な写本には存在しない。他の福音書や使徒言行録から取り出した内容とされている。

#### イエス、十二弟子に現れる(16:12~13)

(ルカ 24:13~35)

<sup>12</sup> その後、イエスは、町から出て歩いている途中にある二人の弟子の前に、別の姿で現れた。<sup>13</sup> しかし、この二人の弟子たちが起こったことを話しても、他の弟子たちはこの二人の話信じなかった。

12. 「別の姿で現れた」 ルカ福音書のエマオでイエスが弟子たちに出現した様子と同様。尚、ヨハネ福音書(20:19~20)では、イエスが弟子たちの前に現れた時、弟子たちはそれがイエスであることをきちんと認識できている。

#### 弟子たちの派遣(16:14~18)

(マタイ 28:16~20、ルカ 24:36~49、ヨハネ 20:19~23、使徒 1:6~8)

<sup>14</sup> その後、イエスは彼の11人の弟子が食事しているとき、その前に現れた。イエスは、弟子たちは非常に頑なで、その一人が蘇ったイエスを見たと言うことを信じるができなかったため、彼らを叱った。<sup>15</sup> そして、イエスは弟子たちに話した。「行って世界中の全ての人々に良き知らせ(福音)を説きなさい。<sup>16</sup> 僕のことを信じて洗礼を受ける人は誰でも救われることになる。でも、僕のことを信じようとしない人は誰でも死罪とされることになる。<sup>17</sup> 僕を信じる人は誰でも不思議なことを行えることになるんだ。僕の名前を使えば、悪霊を追い出すことも、新しい言葉を話すことができるようになるんだ。<sup>18</sup> その人たちは蛇を掴み毒を飲んででも害を受けることはないんだ。その人たちは病人に手を触れることで治すこともできるんだ。」

17. 「新しい言葉」 「新しい異言」と訳されることもあった。

イエス、天に帰る (6:19 ~ 20)  
(ルカ 24:50 ~ 53、使徒 1:9 ~ 11)

<sup>19</sup> 主イエスがこれらのことを弟子たちに言った後、イエスは天に帰り、神の右の座に座った。<sup>20</sup> それで、弟子たちはその場を去り、あらゆるところで教えを説いた。主は彼らと共にあり、彼らがなした不思議なことが彼らのメッセージが本当であることを立証した。

後代に加筆された結びの言葉 (その2)

<sup>9~10</sup> 女性たちは急いでペテロとその仲間に起こったことを話した。その後、イエスは、人々がどのようにして永遠に救われるかという彼の聖なる永遠のメッセージを持たせて、弟子たちを東に西に送り出した。

9 ~ 10. 重要な写本にはない。明らかに後世に加筆されたものである。

— イエスの足どり —

曜日については、ユダヤ式とした。即ち、1日は日没と共に始まる。

日曜日：イエスの一行がエルサレムに近づく (11:2)。

月曜日：朝、弟子たちとベタニヤに赴く (11:12)。

：(午前中?)、神殿に入り、騒動を起こす (11:15)。

：夕方、エルサレムの外に出る (11:19)。

火曜日：朝、無花果の木が枯れているのを見る (11:20)。エルサレムに戻る (11:27)。

：?、エルサレムの権力者がイエスを詰問 (11:28 ~ 33)。

水曜日：(除酵祭と過越祭の2日前) エルサレムの権力者がイエス殺害を計画 (14:1)

木曜日：(除酵祭の最初の日) イエス、過越の食事の準備を弟子に命じる (14:12 ~)。

金曜日：日没後、過越の食事(最期の晩餐)を摂る (14:22 ~)。

：夜、ゲッセマネで祈る (14:32 ~)。

：夜、連行される (12:43 ~)。

：早朝、ピラトに十字架刑を言い渡される (15:1 ~)。

：9時、十字架につけられる (15:25)。

：3時頃、イエス、息を引き取る (15:34 ~ 37)。

：夕方、アリマタヤのヨセフ、イエスの遺体を貰い受け、墓に納める (15:42 ~ 47)。

土曜日：(安息日)

日曜日：朝早く、女性たちが墓に行くが遺体がないことに気付く。墓の中にいた若者がイエスが蘇ることを女性たちに告げる (16:1 ~)。